

転換期における「貧困」に関する
アウグスティヌスの洞察と実践の研究 別冊

Augustine's Understanding and
Practice of Poverty in an Era of Crisis
Supplement

出村和彦 上村直樹

Kazuhiko DEMURA Naoki KAMIMURA

転換期における「貧困」に関する
アウグスティヌスの洞察と実践の研究 別冊

Augustine's Understanding and
Practice of Poverty in an Era of Crisis
Supplement

出村和彦 上村直樹

Kazuhiko DEMURA Naoki KAMIMURA

転換期における「貧困」に関するアウグスティヌスの洞察と実践の研究 別冊

2009–2011年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究報告

Augustine's Understanding and Practice of Poverty in an Era of Crisis

Supplement

Research Report 2009–2011 Grant-in-Aid for Scientific Research (C)

謝辞

本研究は科研費(21520084)の助成を受けたものである。

Acknowledgement

This work was supported by JSPS KAKENHI (21520084).

© Kazuhiko DEMURA and Naoki KAMIMURA 2012

All rights reserved. No portion of this work may be reproduced or transmitted in any form or by any process or technique, electronic or mechanical, without the formal consent of the Authors.

First published in Japan in 2012.

Printed and bound by:

Nakanishi Printing Company Kyoto

Typeface URW Palatino TeXGyrePagella *System* L^AT_EX 2_ε

目次

凡例	VII
ポーリーン・アレン／エドワード・モーガン 「貧困」についてのアウグスティヌスの洞察	
序論	3
1 経済的な背景	4
1.1 諸資料における貧者の意味	7
2 諸資料の背景	7
3 モデル	10
3.1 人間性に関するモデル	10
3.2 哲学的・神学的なモデル	14
4 貧困と施しについての説教	18
4.1 「雌鶏が卵のうえに座るように、黄金のうえに座るな」	18
4.2 直接的、あるいは間接的な施し	25
4.3 聖職者の支援	29
4.4 差別的、あるいは無差別的な施し	30
4.5 物質的な、また霊的な施し：適切な統合	33
4.6 使用／享受、「貧者と愛の正しい秩序」	35
4.7 貧困についての気質に関わる思考	36
5 自発的な清貧に対するアウグスティヌスの態度	39
6 アウグスティヌスの社会的な見方	41
7 修辭と現実	45

7.1 貧困と物質的な施しについてのアウグスティヌスの修辞	46
運び手 (<i>laturarii</i>) としての貧者	46
物乞いのイメージの利用	47
永遠的な事物と時間的な事物の区別	50
キリストの身体への言及——キリスト者同士の施し	51
人間性を共通につなげている同一性	52
内なる正義を生み出す外的な施しについての描写	53
物質的な事物の正しい使用としての施し	53
健康という富	54
「夢と富」のはかなさ	56
物質的な施しについて別個に位置づけられるイメージ	57
7.2 考察される証言：	
貧者は現実のものか、修辞上構成されたものか	59
結論	62
参考文献	65
訳者後記	77
原典索引	81

凡例

<i>AL</i>	<i>Augustinus-Lexikon</i>
<i>AugStud</i>	<i>Augustinian Studies</i>
BA	Bibliothèque Augustinienne
CCL	Corpus Christianorum Series Latina
CSEL	Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum
ÉAA	Collection des Études Augustiniennes: Antiquité
<i>REAug</i>	<i>Revue des études augustiniennes</i>
NBA	Nuova Biblioteca Agostiniana
<i>RAug</i>	<i>Recherches augustiniennes</i>
WSA	The Works of Saint Augustine: A Translation for the 21st Century

「貧困」についてのアウグスティヌスの洞察

ポーリーン・アレン／エドワード・モーガン

上村直樹訳

序論

ヒッポのアウグスティヌス（430年死去）は、ヨハネス・クリュソストムス（407年死去）の後半生と重なる時期に活動したのだが、今日私たちは、その彼が著した膨大な著述を手にとって読むことができる。だがそこには、貧困、救貧、あるいは、自発的な清貧に集中している作品が一つたりとも存在していない。その結果、これらの主題に関するアウグスティヌスの思想を包括的に扱った研究はいまも見出されることがない¹。このヒッポの司教について論じている定評ある何冊かの研究書の索引のなかで、貧者、あるいは貧困について指示されることすらないのである²。そこで本論文において私たちは、40年にわたってアウグスティヌスが携わった教会の職務にそくし、さまざまな領域に残されているきわめて多くの資料をまとめあげることと専念するとともに、それらを理解するようにつとめる。まず、アウグスティヌスが活動した時期の経済状況一般について概観することから着手し、また、取りあげる資料について触れることにしよう。ついで、私たちは、アウグスティヌスによる慈愛に基づくモデル、つまり、人間性に関するモデルと哲学的・神学的なモデルの双方について考察したうえで、貧困、施し全般についての言説や、直接的（間接的）・差別的（無差別的）な贈与、聖職者への支援、物質的・霊的な施しに対する態度、使用と享受 (*uti/frui*) の区別、そして、気質に関わる貧困について検討する。アウグスティヌスの自発的な清貧に対する態度については、そのつぎに論じられる。これらすべての様相が、可能なかぎりアウグスティヌスの社会に対する見方と関係づけられるだろう。私たちは、この段階まで至ってはじめて、彼の著作における貧者が現実のものなのか、それともその大部分が修辞上構成されたものなのかについて問うことができる。この点については、より理論的な、あるいは思弁的な作品と、書簡や説教のような、貧困、貧者、また、救貧についての「事実的な」証拠を記している作品の両方を検証することによって考える。彼が、修辞上の方策としてイメージを使う度合い、また、貧者についての説教が首尾一貫しているかについても検証されるだ

¹ この状況について、P. R. L. Brown, 'Augustine and a crisis of wealth in late antiquity', *The Saint Augustine Lecture 2004, AugStud* 36 (2005) 5-30のうち、6頁を見よ。

² この例証として私たちが挙げることができるのは、G. Bonner, *St Augustine. Life and Controversies*, rev. edn (Norwich 1986); S. Lancel, *St. Augustine*, trans. A. Nevill (London 2002); R. Dodaro and G. Lawless (eds.), *Augustine and His Critics. Essays in Honour of Gerald Bonner* (London and New York 2000).

ろう。最後に私たちは、アウグスティヌスを、「貧者を愛する者」「貧者を統治する者」だと見なす観点についての私たちからの説明を呈示する。

1 経済的な背景

北アフリカは、古代ローマの経済において帝国に小麦とオリーブ油を供給する地域という役割を担っていた³。ローマに運ばれた食糧 (*annona*) は基本的に小麦とオリーブ油であり、ローマに属する地域に見られる一般的な傾向として、交易業者が、納税を目的として小麦とオリーブ油を輸出するようにと仕向けていた。アフリカが、オリーブの生産元、供給元だという地位は、1世紀にローマが北アフリカを獲得して以来、その地を耕作し、灌漑するという営為が続けられてきたことによって可能だった。しかしながらアフリカの諸文書は、商品への課税を徴収する難しさを記しているアンティオキアの文書と比べれば、その点について沈黙を保っている。このことが意味するのは、ローマによる徴税の要求が、この農業によって豊かだった地域経済へさほどの衝撃をもたらさなかったということである。アウグスティヌスが居住したヒッポは繁栄した都市であり、セイブーズ (*Seybouse*) 川の河口近くに港を設けることができたという自然の幸運に恵まれていた。ヒッポを取り囲む平原は、恒常的な沖積層からの湧き水に潤されていて、その流れは、この取引所をアフリカ全体と結合し、ローマとの結びつきは、この地域の経済上の成功にとって必要不可欠というどころではなかった。明白な証拠によって、経済上の繁栄が、ローマ時代の北アフリカへのヴァンダル侵入下でも続いていたことが確かである⁴。だが、そう言われるとしても、アフリカも古代末期における経済が衰退してゆく全般的な傾向から外れることはなかった⁵。

地中海世界の大部分の地方がそうであったように、アフリカ社会でも、土地を所有する者と土地を所有しない者のあいだに重要な区別があった。後者のグループのほうがはるかに数的に優位であり、自分たちが、法律上のあるタイプの契約によって土地所有者になれると分かっていた。永小作権契約 (*Emphytheotic contract*) はもっともよく知られていて、土地を借りている農民に、永世の土地

³ この点は、C. Wickham, *Framing the Early Middle Ages. Europe and the Mediterranean 400–800* (Oxford 2005) によって強調されている。

⁴ C. Lepelly, *Les Cités de l'Afrique romaine au bas-empire, 1. La Permanence d'une civilisation municipale* (Paris 1979) 316–317. たとえば、この侵入下でも市民への施しは継続して行われていた。

⁵ さらに、M. McCormick, *Origins of the European Economy. Communications and Commerce, A.D. 300–900* (Cambridge 2001) 30頁を参照。

所有を可能にした⁶。この所有権は、農民の後継者へ伝えることができたが、一方では、農民に対し最初の土地所有者の権利と立場を経済的に強めることになる一年ごとの使用料を求めるものであった⁷。北アフリカにおける多くの事例では、彼らはイタリアの元老院貴族だった。しかし、皇帝によって没収された諸都市や諸寺院にある所有地の耕作を、都市参事会員、つまり地域貴族が独占するようになったことを考えれば、社会的な区分は地域的でもあった。それ故、上意下達の社会システムは、アフリカのような属州にまで反映されていて、社会的な地位によって獲得できるものが一個人、あるいは家族の地位を定め、それによって社会的、また金銭上の便宜を増大させることが可能になったのである。参事会員階級は、自分たちの土地を借りている農民を搾取することで悪名高かった。コンスタンティウス二世帝の法は、彼らの所有地への課税のみならず、農民から搾取した利益への課税についても考慮するものだった⁸。よって、帝国法はより下位のローマ貴族による搾取からの取り分を要求することで、積極的に利益を得ようとしていた。ローマはまた、未開墾地と設定された皇帝自身の所有地 *res privata* に属する土地が、永代小作権契約を取り交わしていた者に与えられるよう命じた。これは、これらの契約上の利益に適い、さらには参事会員階級の手から財力を取りあげるものだった。それ故、土地所有による搾取の定番は、帝国、また参事会員階級を通して一貫して持続していたのであり、皇帝も土地に根ざした利益の樹木の頂点における自己の卓説性を確保していたのである。ヒッポは、もっとも栄誉あるアフリカの植民地であり、発掘品からはかなりの経済上の重要性をそなえた都市でありつづけたことが明らかである⁹。

⁶ A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire, 284–602. A Social, Economic, and Administrative Survey* (Oxford 1964; repr. 1986) 417–420頁が指摘するのは、*ius emphyteuticarium* (永小作権)、また *ius perpetuum* (終身保有権) という語が、後期ローマ帝国では同義になっていたということである。彼は、皇帝の個人所有 *res privata* に属する土地の大半が、終身保有を認められていたと考えている。また、これらの契約によって、自由民だが法的には「土地の奴隷」(*servi terrae*)である開拓民の集団が発展したことが認められる (*Codex Justinianus* 11.52.1; *Corpus ius civilis volumen secundum. Codex Justinianus*, in P. Krueger, (ed.), (Hildesheim 1989) 443)。Jones, *Later Roman Empire*, 792–812頁を参照。アウグスティヌス『書簡』10*と24*; NBA 23A, 78–87と212–215はそれぞれ、これが何を意味するのか本当はだれも知らなかったと説明する。その状況は、上方への社会的な移動の可能性が一切ない一種の永代的な小作であったように思われる。Lepelly, *Les Cités*, 1, 367頁を参照。

⁷ Jones, *Later Roman Empire*, 417–420.

⁸ *Codex Theodosianus* 12.1.32; *Codex Theodosianus*, in P. Krueger, Th. Mommsen, and P. M. Meyer, (eds), 3 vols. (Hildesheim 1990) 670頁を参照。

⁹ C. Lepelly, *Les Cités de l'Afrique romaine au bas-empire*, 2. *Notices d'histoire municipale* (Paris 1981) 113–114.

アフリカの経済は、ある特殊な仕方地中海全体との交易が成立可能であることに依存していた¹⁰。しかし、その経済は、ヴァンダルがローマへの租税を行きづまらせたのと同時期に交易もまた失速させた、その4・5世紀のヴァンダル侵入によって損害を受けなかった。むしろこの侵入という状況でも、経済は繁栄していたようである。オリーブ油の生産は、よりこの地方での産業が繁栄することで増大し、ヴァンダルの侵入で経済上の特権を手酷く剥奪された唯一の者たちとは、生計手段をアフリカの食糧に依存するようになっていたローマ人だった¹¹。

ローマ時代のアフリカでの普通の市民は、ローマ的な生活という優位な立場から利益を得ることができた。よく手入れをされた街の美しさ、浴場の利用、劇場、無償で恩恵を施与する者たちが供する宴会、また、穀物の配給¹²。しかし、都市のなかで選ばれた人々に享受された特権については集団内での区分が依然として存在していた。これは、田舎のアフリカ人にもっとも鋭敏に感受された隔たりだった。たとえば、キルクムケリオネス〔ドナティストと結合した下層農民・労働者の暴力的な集団〕の蜂起は、諸都市の特権への憤懣の表現であったし、参事会員の上に位置する名望家によって享受された特権に対するものだった。この不満は、キルクムケリオネス運動がはっきりとドナティスト論争のなかで宗教的な性格を帯びるようになっても、社会的でありつづけた¹³。キルクムケリオネスはほとんどの地方で、自由民の農園労働者・季節労働者だった¹⁴。

アウグスティヌスが私たちに語るのは、田園の貧者が頻繁に主人たちに手ひどく扱われたということである¹⁵。4・5世紀までに、彼らの置かれた状況は、耕作地の衰退のみならず、財政上の圧迫が進展することによって一層悪くなっていった。公的な支出における控除が、より高くなる課税によって発生していた。だが、貴族たちの生活は変わらぬまま継続し、アフリカでの実際の歳入は減少しなかった。かわって公的な支出からその財源が削減されることで、地方に居住する農民が、富者たちの市民としての寄進によって通常与えられる給付をもはや受け

¹⁰ Wickham, *Framing*, 721.

¹¹ Wickham, *Framing*, 722. この点で、元老院貴族は、彼らの土地が押取されることで同様に特権を剥奪された。

¹² Lepelly, *Les Cités*, 1, 327.

¹³ Lepelly, *Les Cités*, 1, 93-96と328. Lepelly は、その宗教上の特徴とは異なるキルクムケリオネス現象の基底にある社会的な不安感を認めている(93-96頁を参照)。

¹⁴ Lepelly, *Les Cités*, 1, 328.

¹⁵ アウグスティヌス『書簡』247; NBA 23, 846-851. この書簡によれば、たとえばボーン平原は、開拓者と農民によって耕されている大農園に分割され、彼らは自分の主人から頻繁に過酷な扱いを受けていた。

取ることができない程度にまで減らされた。社会的な貧困は人々を、富に近づくことができる階級から排除する、とりわけ、土地を所有する階層から排除することで北アフリカでの究極の分断として存在した。税が上昇した地域では、与えるよりも、小農に返されるものが一層少なくなって、彼らが苦しんだのである¹⁶。

1.1 諸資料における貧者の意味¹⁷

古代末期のローマの北アフリカにおいて、だれが貧者だったかという疑問に答えるのは難しい。私たちがそれより容易に語ることができるのは、古代末期のローマのシステム内部のそれぞれ異なる社会階層についてであり、財政上の圧迫が彼らに及ぼした影響についてである。私たちはアウグスティヌスの著述から、課税の増大がこれまでアフリカにおいて財政上恵まれてこなかった者に重く被さっていたこと、そして、その社会階層とは関係なく重荷になっていたことを知る。たとえばアウグスティヌスは、*ordines* ——ローマの帝国官吏——であっても、全住民に課せられた諸税によって弱体化していたと主張している¹⁸。したがって貧者には、国家によって要求される財政上の要求の増大で苦しみはじめていた者もまた含まれる。私たちは、課税の要求が恵まれた者たちに、あるいはそうではなかった者たちに指示される仕組みについて論じているのである。

2 諸資料の背景

アウグスティヌスが貧困について語るその大部分は、説教のなかに見出される¹⁹。この説教という資料のほとんどが、確実にその話された期日を特定するこ

¹⁶ Lepelly, *Les Cités*, 1, 328. キルクムケリオネスの集団内で証言されている早魃の多発が、小農の蜂起の温床となったというよりもむしろ、食糧の僅かな蓄えを奪った税の負担とその他の製品の徴収が、財政上の劇的な、またそれ故に社会的な危機を生み出したのである。

¹⁷ 貧者について用いられるさまざまなラテン語表現について、本書 1.1.1 [定義と術語] を参照。

¹⁸ アウグスティヌス『書簡』22*; NBA 23/A, 193–203. *Ordines* には、さまざまなカテゴリーのローマ官吏が含まれていて、税の徴収に専ら責務を負う参事会員だけを意味するのではない。

¹⁹ 先行研究として、例えば、H. Rondet, 'Richesse et pauvreté dans la prédication de saint Augustin', *Revue d'ascétique et de mystique* 30 (1954) 193–231; M. Marino, 'La pobreza de Cristo en los sermones de san Agustín', *Congresso Internazionale su S. Agostino nel XVI centenario della conversione*, Roma 15–20 settembre 1986, Atti II: Sezione di studio II–IV = *Studia Ephemeridis Augustinianum* 25 (1987) 295–311; P. Vismara Ciappa, *Il tema della povertà nella predicazione di Sant'Agostino*, Università di Trieste Facoltà di Scienze Politiche 5 (Milan 1975); R. Finn, *Almsgiving in the Later Roman Empire. Christian Promotion and Practice* (313–450) (Oxford 2006) はアウグスティヌスに集中するものではない; P. Allen and B. Neil, 'Discourses on the poor in Psalms: Augustine's Enarrationes in Psalmos', in *Meditations of the Heart. The Psalms in Christian Thought*

とができないので²⁰、アウグスティヌスの態度の変化を描き出すことはできない。加えて、マニ教徒やペラギウス派の喜捨についての考えに対するアウグスティヌスの反対、論争によって、個人的には強い禁欲的な基準をもってアウグスティヌスが通常なら語ろうとしなかったであろう比較的穏当な、あるいは寛容な立場において語るよう追い込まれていたかもしれない事実に配慮すべきである。

約537篇を数える『民衆向け説教』*Sermones ad populum* は、彼の聖職者としての生涯全体にわたっている²¹。とりわけ、冬という多くの貧者が困窮する時期に説教するときに、また、説教の聴衆たちに断食と喜捨のつながりが明白になるにちがいがなかった四旬節の断食の期間と四季の齋日のあいだに、アウグスティヌスは貧者への施しを提唱した²²。『説教』355と356は、アウグスティヌスの自発的、修道的な喜捨に関する考えを理解するにあたって決定的である。貧困という主題は、『詩篇講解』という約200篇にわたる説教のなかで継続して語られており、そこでは、貧者と虐げられた者を助力するという嘆願が、多くの聖書テキストの最前面に置かれている²³。これはまた、たとえば「ヨハネ福音書」についてのような、彼の他の説教註解でも変わらない²⁴。

アウグスティヌスの約300の書簡が私たちに伝わっていて、だがそれは、彼

and Practice: Essays in Honour of Andrew Louth が公刊予定〔‘Discourses on the poor in Psalms: Augustine’s Discourse on Poverty in *Enarrationes in Psalmos*’, in *Meditations of the Heart: The Psalms in Christian Thought and Practice. Essays in Honour of Andrew Louth*, C. Harrison, A. Casiday, and A. Andreopoulos (eds), *Studia Traditionis Theologiae* 8 (Turnhout 2011) として刊行〕。

²⁰ この点について、悲しんでいるかのように、だがおそらく実際的な評価をくだしている、H. R. Drobner, ‘The chronology of St. Augustine’s *Sermones ad populum*’, *AugStud* 31 (2000) 211–218; さらに、いくつかの説教とその他の著作年代を再確定している、P.-M. Hombert, *Nouvelles recherches de chronologie augustiniennne*, ÉAA 163 (Paris 2000) を参照。

²¹ 説教については、直近の H. R. Drobner, *Augustinus von Hippo: Sermones ad populum. Überlieferung und Bestand, Bibliographie, Indices*, *Supplements to Vigiliae Christianae* 49 (Leiden 2000); F. Dolbeau, *Augustine et la prédication en Afrique. Recherches sur divers sermons authentiques, apocryphes ou anonymes*, ÉAA 179 (Paris 2005), both with lit.; Finn, *Almsgiving*, 147–149 頁は、施しについて扱っているアウグスティヌスの説教一覧を掲載している。

²² Finn, *Almsgiving*, 150 頁を参照。

²³ M. Fiedrowicz, *Psalmus vox totius Christi: Studien zu Augustinus ‘Enarrationes in Psalmos’* (Freiburg i.B. 1997) では、実際のところ欠如; だが、R. D. Finn, ‘Portraying the poor: descriptions of poverty in Christian texts from the late Roman empire’, in M. Atkins and R. Osborne, *Poverty in the Roman World* (Cambridge 2006) 130–161 頁が、他の著作家・テキストと結びつけ、ある程度まで『詩篇講解』での取り扱いを補っている。

²⁴ 直近の研究として、M.-F. Berrouard, *Introduction aux homélies de saint Augustin sur l’Évangile de saint Jean*, ÉAA 170 (Paris 2004) を参照。

の書いたすべての書簡のうちのごく僅かにちがいない²⁵。1980年代になって、約20通の書簡がヨハネス・ディヴジャクによって発見され、その大部分が、アウグスティヌスが司教職にあったその後半生に位置づけられる²⁶。私たちが、さきに書簡執筆の作法について本書第2章(2.2)で論じた際に記したように、ディヴジャク書簡には、5世紀初頭の地中海世界における人身売買業者といった問題に関する重要な情報が含まれていて(『書簡』10*)、その1通は、ある教会の貧者名簿の存在に関する西方最初の証言であり(『書簡』20*)、助祭たちによって後に組織化されたものであり²⁷、一方他の書簡(『書簡』22*)では、自由民の子らの契約労働の証拠を記している。何通かは、*audientia episcopalis*〔司教裁判〕に関係し、その多くが一層貧しい市民だったが、民事が審理されていた²⁸。

加えて、『説教』355と356と同様に、『修道規則』*Regula*の男性向けと女性向けのものが、修道制という文脈における自発的な清貧に関するアウグスティヌスの考えを知るための第一級の資料である²⁹。

²⁵ 概して、L.-J. Wankenne, 'La langue de la correspondance de Saint Augustin', *Revue Bénédictine* 94 (1984) 102-153; R. B. Eno, 'Epistulae', in A. D. Fitzgerald, ed., *Augustine through the Ages: An Encyclopedia* (Grand Rapids, MI 1999) 298-310; J. Divjak, 'Epistulae', in C. Mayer et al., eds, *AL*, 2 vols (Basel 1996-2002), vol. 2, 893-1057; P. Allen, 'The horizons of a bishop's world: the letters of Augustine of Hippo', in W. Mayer, P. Allen, and L. Cross, eds, *Prayer and Spirituality in the Early Church 4. The Spiritual Life* (Strathfield 2006) 327-337頁を参照。

²⁶ J. Divjak, *Les Lettres de saint Augustin découvertes par Johannes Divjak*, Communications présentées au Colloque des 20 et 21 septembre 1982, Études Augustiniennes (Paris 1983) を参照。アウグスティヌスの書簡のネットワークについては、F. Morgenstern, *Die Briefpartner des Augustinus von Hippo. Prosopographische, sozial- und ideologiegeschichtliche Untersuchungen* (Bochum 1993); É. Rebillard, 'Augustin et le rituel épistolaire de l'élite sociale et culturelle de son temps. Éléments pour une analyse processuelle des relations de l'évêque et de la cité dans l'antiquité tardive', in É. Rebillard and C. Sotinel, eds, *L'évêque dans la cité du IVe au Ve siècle. Image et autorité*. Actes de la table ronde organisée par l'Istituto patristico Augustinianum et l'École française de Rome, Rome, 1 et 2 décembre 1995 (Rome 1998) 127-152頁を参照。

²⁷ さらに、Vismara Chiappa, *Il Tema*, 180-182; M. J. DeVinne, 'The Advocacy of Empty Bellies. Episcopal Representation of the Poor in the Late Roman Empire', unpub. PhD Diss. (Stanford, CA 1995) 119; and Finn, *Almsgiving*, 75; M. Rouche, 'La Matricule des pauvres. Évolution d'une institution de charité du Bas Empire jusqu'à la fin du Haut Moyen Âge', in M. Mollat (ed.), *Études sur l'histoire de la pauvreté (Moyen Âge-XVIe siècle)*, vol. 1, Publications de la Sorbonne, Série 'Études' 8, 1, 11 (Paris 1974) 83-110 at 96頁を参照。

²⁸ 特に『書簡』9* (タガステにおける司教アリビウスの裁判)、11*、20*.6-7と24*.1; NBA 23A. 『書簡』247; NBA 23, 846-850、これは、P. R. L. Brown, *Poverty and Leadership in the Later Roman Empire*, The Menahem Stern Jerusalem Lectures (Hanover and London 2002) 136 n. 108に、別の事例として引用されているが、むしろ、ある状況についてのアウグスティヌス個人の取り扱いだと思われる。

²⁹ テキストについては、L. Verheijen, *La Règle de Saint Augustin*, 2 vols, Études Augustiniennes

ある程度まで、『三位一体論』 *De Trinitate*、『神の国』 *De civitate Dei*、そして『告白』 *Confessiones* のような神学的、思弁的な論考が、アウグスティヌスの貧困と救貧についての論じ方について見識を与えてくれる。

私たちがすでに本書第2章(2.3)で記したように、アウグスティヌスの友人、同僚司教であり、修道生活におけるかつての仲間、カラマのポッシディウスによって編まれた『アウグスティヌスの生涯』 *Vita Augustini* は、教会の財政、貧しき者たち、また修道制に対するアウグスティヌスの態度についての相当の情報を一見したところ提供してくれる。しかし、真実のように思われるいくつかの詳細にも関わらず——たとえば、いくつかの問題について、アウグスティヌスがアンブロシウスの立場を模倣し、また記念碑的な *evergetism*〔エヴェルジェティズム・恩恵施与〕に抛出するのに躊躇している——、その作品は聖人伝の次元にとどまっていて、資料として用いるには注意を要する³⁰。

3 モデル

3.1 人間性に関するモデル

アウグスティヌスは、子供のころ自分の母が飲食物を殉教者の墓に供えていたことを証言している。彼女は、食べ物と飲み物を貧者と分かち合ったのだが、アンブロシウスが異教的な慣わしだと考えたがゆえに、この慣わしをミラノにおいて断念しなければならなかった³¹。アウグスティヌスも若年のころには、カルタゴでの自身の勉学を支援するロマニアヌスのエヴェルジェティズムによって助けられた³²。司教として何十年かののち、モニカの息子は貧者に祝宴を供すること

(Paris 1967); 英語訳は、*The Rule of Saint Augustine. Masculine and Feminine Versions*, introduction and commentary by T. van Bavel, trans. by R. Canning (London 1984); G. P. Lawless, *Augustine of Hippo and His Monastic Rule* (Oxford 1987).

³⁰ さらに、E. Elm, *Die Macht der Weisheit: Das Bild des Bischofs in der Vita Augustini des Possidius und anderen spätantiken und frühmittelalterlichen Bischofsviten*, *Studies in the History of Christian Thought* 109 (Leiden and Boston 2003) 105–159頁を参照。この伝記は、E. T. Hermanowicz, *Possidius of Calama. A Study of the North African Episcopate at the Time of Augustine* (Oxford 2008) 17頁において、「ミニマリストの伝記であり、アウグスティヌスの圧倒的な存在によって完全に支配された、平板で、匿名の背景に覆われている」と描かれる。

³¹ 『告白』 6.2.2; NBA 1, 146。そういった墓へ供えるもてなしに頻繁にもなった酔態のため、アウグスティヌス自身も後に(『書簡』 22.1.6; NBA 21/1, 110–112)、貧者には金銭を「直接」与えるほうがよいと述べる。

³² アウグスティヌスが、若いころに後援してくれたロマニアヌス宛ての挨拶については、『アカデミア派論駁』 1.1.1; NBA 3, 24–27。

によって、自らの司教への叙階の記念日を祝したかもしれない³³。だが確実なのは、386/387年に自分と親しい者たちとカッシキアムに滞在している最中、自発的な清貧の種がアウグスティヌスの精神に蒔かれたということである³⁴。アウグスティヌスがのちに「彼に苗木を植え、水をやった方」³⁵と描写したアンブロシウスの影響がここでも働いていたにちがいない。というのも、このミラノの司教は、エジプトのアントニウスがそのように紹介されてきたように、世俗と自分の財産をすべて放棄するように提唱しなかった³⁶。私たちは、貧困と財産についてアウグスティヌスが語っているかのように考える多くの文章を、アンブロシウスの『義務について』*De officiis*のうちに認めるのであり、たとえば、「個人の幸福は、その者が外的に享受する豊かさの程度によってではなく、内的なその者の良心の状態によって測られるべきである」³⁷、「それ故、心の意図、それが寄付を豊かなものに、あるいは貧しいものにするのであり、寄付されるものに価値を与える。同時に、主の意志は、私たちが財産すべてを一時に注ぎ込むべきことではなく、その財産を注意深く配分すべきことにある...」³⁸。族長たちに関するアンブロシウスの4つの著述における適度な禁欲主義への誘いについて、将来のヒッポの司教がその元々の講話のうちのどれかを口頭で聞いたかどうかにかかわらず、同じようにまた強い影響を及ぼしただろう³⁹。アウグスティヌスの伝記作者

³³ 『説教』339.3; NBA 33, 976と978では、P. Brown, *Augustine of Hippo. A Biography*, new edn (London 2000) 193頁によって、‘*humanitas*’あるいは、気前のよい寛大さとして描かれている。しかし、Finn, *Almsgiving*, 80頁は、「そのレトリックの背後に、貧者のための食事、施しの配分、あるいは特別な寄付があったかについて、確実視することはできない」と論じている。

³⁴ このエピソードについてのすぐれた論考は、D. E. Trout, ‘Augustine at Cassiciacum: *otium honestum* and the social dimensions of conversion’, *Vigiliae Christianae* 42 (1988) 132–146.

³⁵ 『書簡』147.23.52; NBA 22,428: ‘...[t]amquam plantatori et rigatori meo...’.

³⁶ この点については、N. B. McLynn, *Ambrose of Milan. Church and Court in a Christian Capital*, Transformation of the Classical Heritage 22 (Berkeley, Los Angeles and London 1994) 256. アウグスティヌスがキリスト者として形成されるにあたってアンブロシウスが及ぼした影響全般について、E. Morgan, *The Incarnation of the Word: The Theology of Language of Augustine of Hippo* (London, forthcoming). [*The Incarnation of the Word: The Theology of Language of Augustine of Hippo* (London 2010) として刊行]。

³⁷ Ambrose, *De officiis*, 1.44; I. J. Davidson (ed. and trans.), 2 vols, Oxford Early Christian Studies (Oxford 2001) i,142–143: ‘...[e]t ideo non secundum forensem abundantiam aestimandam beatitudinem singulorum sed secundum interiorem conscientiam’.

³⁸ Ambrose, *De officiis*, 1.149; Davidson, i,204–205: ‘Adfectus igitur divitem collationem aut pauperem facit et pretium rebus imponit. Ceterum Dominus non vult simul effundi opes, sed dispensari’.

³⁹ アンブロシウスのこれらの著述の年代と、アウグスティヌスが、口述されたこれらの何れかを聞いたかについての論争についての手際の良い要約については、M. L. Colish, *Ambrose’s Patriarchs. Ethics for the Common Man* (Notre Dame, IN 2005) 24–26頁を参照。

ポッシディウスは、どのようにヒッポの司教が、教会の財産と救貧に関してミラノの司教を自分のモデルとしたか、2つの具体的な例を挙げている。その第一は、捕虜の身請け金に教会の金銀の板を鋳潰したことについて⁴⁰、ある人々から批判されたのであり、その第二は、貧者と聖職者を軽視した会衆たちを諷めたことに関わる⁴¹。だが、アンブロシウスという手本についてのアウグスティヌスの扱いが、「一つの次元では、アウグスティヌスは逆方向にアンブロシウスに一層大きな影響を發揮した」ことを示唆している点が認められるのである⁴²。

私たちはこの点で、アウグスティヌスが、救貧と自発的な清貧に関して自身の会衆に期待していることと、自身と自身の聖職者共同体に期待していることを区別したい。自発的な清貧という領域では、アウグスティヌスに先行する幾人もの人々がいる。それは、ヴェルケッリのエウセビウスにはじまり、ノラのパウリヌスも含むのだが、彼らのアウグスティヌスに対する直接的な影響がいかなるものであったかは明瞭でない。アウグスティヌスは、ミラノのある住いについて、またローマの住いについても知っていたが、そこでは、模範となる聖職者の指導のもと一群の男たちが共に生活していた⁴³。私たちは、彼が、北アフリカへと共住の自発的な清貧という考えを移植した最初の者だということに満足せざるをえないだろう⁴⁴。彼の著作における自発的な清貧に関する以下の議論を先取りはせず、私たちは、彼自身とヒッポ・レギウスの司教館に共に住んでいた独身の聖職者らに向けて設定した基準が、会衆に設定した基準よりもはるかに高かったことを強調しておきたい。このことは、アントニウスについてのアタナシウスの伝記に描かれた極端な放棄が、万人向けのものでないと彼が考えたことに対比され指

⁴⁰ 司教の通例の責務としての捕虜の身請け金支払いについては、P. Allen and W. Mayer, 'Through a bishop's eyes: towards a definition of pastoral care in late antiquity', *Augustinianum* 40 (2000) 245-297. W. Klingshirn, 'Charity and power: Caesarius of Arles and the ransoming of captives in sub-Roman Gaul', *Journal of Roman Studies* 75 (1985) 183-203 頁を参照。

⁴¹ A.A.R. Bastiaensen, ed., *Vita di Cipriano. Vita di Ambrogio. Vita di Agostino*, introduzione di C. Mohrmann, *Vite dei Santi dal secolo III al secolo IV*, vol. 3, 4th edn (Milan 1997), *Vita Augustini* 24.16 (195 頁) と 24.17 (194 頁); *The Life of Saint Augustine by Possidius Bishop of Calama*, trans. J. Rotelle, introduction and notes by Cardinal M. Pellegrino, *The Augustinian Series*, vol. 1 (Villanova, PA 1988) 99. これら2つのエピソードについては、本書第2章(2.3)の聖人伝に関する箇所を参照。

⁴² N. B. McLynn, 'Ambrose of Milan', in Fitzgerald (ed.), *Augustine Through the Ages*, 19.

⁴³ 『カトリック教会の習俗とマニ教徒の習俗について』 *De moribus* 1.31.67; NBA 13/1, 98と100.

⁴⁴ さらに、F. van der Meer, *Augustine the Bishop: The Life and Work of a Father of the Church*, trans. B. Battershaw and G. R. Lamb (London 1961) 199. 『カトリック教会の道徳について』 1.31.65-68; NBA 13/1, 96-100において、アウグスティヌスは、エジプトや東方の極端な個人主義的な禁欲主義と、祈り、貧しさ、手労働、清貧を共に実践する共同生活を区別する。

摘されるのだが、一方では、彼の兄弟たちに向けて、彼が、「強制的である自発的な」清貧、あるいはよりの確に表現すれば、「所持品の共有」あるいは「生活の簡素さ」というものを命じていたのである⁴⁵。したがって、アウグスティヌスの貧困に関するさまざまな言説のなかには、ある分裂が存在する。

実際には決して会うことがなかったとはいえ、アウグスティヌスの25年にわたるノラのパウリヌス (c. 355-431) ——妻のテラジアと共に自発的な清貧を喜んでうけいれ、厳格な修道的生活を送った——⁴⁶との文通は、アウグスティヌスの貧困についての考えに影響を及ぼしたにちがいない。しかし、現在残っている書簡はこれを実証していない。『書簡』31.5において、パウリヌスに極端な自発的清貧の帰結について言い送っているのはアウグスティヌスである。「自分に可能であるかぎりのものを所有することのみならず、所有したいと欲したものを諦める者が本当にすべてを諦めている」⁴⁷。『神の国』1.10.2では⁴⁸、アウグスティヌスは、パウリヌスの自己剥奪を賞讃している。

さらに私たちが見るように、遺産や相続物に由来する教会の収入はかなりの程度になると同時に、しばしば問題を引き起こした。ここで、大都市カルタゴの司教であるアウレリウスが、アウグスティヌスにとって現実的なモデルだった⁴⁹。後進のヒッポの司教は自身の修道共同体に対して、自分の息子から相続権を奪ったのちに教会を相続人にしようとする者はだれでも、その遺産の受取人を探さなければならないと語り、そこでアウレリウスの例を引いている。アウレリウスは、これまで子供のなかった贈与者に子供が生まれたときには遺産を返還したのだった。アウグスティヌスが註記するのは、たとえ、市民法のもとではアウレリウスがその遺産を保持する権利を有していたにせよ、彼は天の法にしたがって行動したということである⁵⁰。彼、アウグスティヌスも同じことをしたであろう。

⁴⁵ そこで、van Bavel in *The Rule of Saint Augustine*, 51.

⁴⁶ パウリヌスのこの面について、J. T. Lienhard, *Paulinus of Nola and Early Western Monasticism: With a Study of the Chronology of His Works and an Annotated Bibliography*, Theophaneia. Beiträge zur Religion- und Kirchengeschichte des Altertums 28 (Cologne and Bonn 1977). アウグスティヌスとパウリヌスのあいだの文通に関しては、J. Divjak, 'Epistulae', in Mayer (ed.), *AL*, 2, 938-943; S. Mratschek, *Der Briefwechsel des Paulinus von Nola. Kommunikation und soziale Kontakte zwischen christlichen Intellektuellen*, *Hypomnemata* 134 (Göttingen 2002) 473-485頁を参照。

⁴⁷ NBA 21/1,206; trans. Teske, WSA 12/1,105: 'Et revera omnia contemnunt, qui non solum quantum potuit, sed etiam quantum voluit habere, contemnunt.'

⁴⁸ NBA 5/1,38.

⁴⁹ アウレリウスについては、A. Mandouze, *Prosopographie chrétienne du Bas-Empire 1. Prosopographie de l'Afrique chrétienne (303-533)* (Paris 1982) 105-127.

⁵⁰ 『説教』355.5; NBA 34,252.

3.2 哲学的・神学的なモデル

ヨハネス・クリュソストムスの貧困に関する説教のように、アウグスティヌスにおいても、私たちは、ストア派、新プラトン主義、そして、キリスト教の考えの混合を見出す。アウグスティヌスは、若いころにキケロの『ホルテンシウス』*Hortensius* を読み（『告白』3.4.7）、そして、それによって哲学を研究するようにと促された。しかしながら、彼はその後で、キリスト教的な「憐れみ」*misericordia* のために、ストア派的な *duritia*〔厳格さ〕と彼が呼ぶものを拒絶し⁵¹、そして、すべての罪が等価であり、よって同じ仕方でも罰せられるべきだというストア派の見方に反対した⁵²。この拒絶によって彼は、罪、贖罪、施しのあいだの階層をはっきりと区分することになった⁵³。アウグスティヌスの言説において卓越しているのは、富裕も貧困も倫理的には中立であり、もっとも重要なはその人の気質であって、事物の使用の仕方だという考えである。この考えはその多くを、アウグスティヌスが彼自身『告白』7.12.28において語っているように、プロティノスとその後継者である新プラトン主義との最初の遭遇に負っている。彼がはっきり理解するようになったのは、すべての物的な事物は神が創造したゆえに善いものであるということである⁵⁴。世界の対象についての正しい使用と享受に関する *uti/frui* の議論は、アウグスティヌスの著作のうちに繰り返し見出され、展開している⁵⁵。しかしながら、新プラトン主義の哲学との出会いのあとで、アウグスティヌスにとって、プロティノス的な永遠的な事物と時間的な事物の対立は、自分の貧困と富に関わる言説に都合よく、貧困を説教において終末論的な枠組みにおいて論ずることを可能にしたのだが、プロティノス的な傲慢さには批判的になる（『告白』7.12.18）。一貫して、貧困を霊的なものとして扱う試みと、その説教において繰り返される副次的な主題「夢と富」も、新プラトン主義的な考えから由来している⁵⁶。

アウグスティヌスの著作には、275箇所以上の「マタイ福音書」25:31-46から

⁵¹ 『書簡』104.16; NBA 21/2,1018 (*misericordiam Christianorum non duritiam Stoicorum*).

⁵² 『書簡』104.16-17; NBA 21/2,1018-1089. さらに、『書簡』91.9; NBA 21/2,790-792を参照。

⁵³ 以下、本論文(4.1)〔18-25頁〕を参照。

⁵⁴ 以下、本論文(4.6)〔35-36頁〕を参照。

⁵⁵ さらに、本論文(4.6)において論じられる。

⁵⁶ さらに、本論文(7.1)「夢と富」のはかなさ〔56-57頁〕を参照。

の引用があり⁵⁷、その三分の二が説教においてであるという事実から⁵⁸、私たちは、最後の審判において羊と山羊が分けられることに関して、この章句が中心的な役割を担っていることを諒解する。この章句は、貧困と救貧についての彼の考えに対してのみならず、終末論的な言葉遣いでもつばら表わされるキリスト者の生へ自分の会衆を促すにあたっても中心的である⁵⁹。このマタイ的な章句はまた、キリストを貧者と同定するに当たっても基礎的なものである⁶⁰。一方では、ヒッポの司祭館における普通の生活は、もつばら「使徒行伝」4:32「信じた人々が大量いて、その心と精神は一つになっていた。一人として自分の所有するものを自分のものだと言う者はなく、すべてが共有であった」によって鼓舞されていた⁶¹。これが、『修道規則』*Regula*の礎であり、事実、アウグスティヌスの修道生活の基本姿勢でもある⁶²。しかしながら註記されてきたのは、アウグスティヌスの著作に82回にわたって引用される『使徒行伝』4:32-35のうちで約70回の引用が、聖性はすべての人によって成し遂げられると指摘しつつも、キリスト者の生一般について言及しているということである⁶³。ともかくも、これら二つの新約の文書を典拠とすることがアウグスティヌスのこの主題について論ずる著作に顕著なので、紙幅の関係上、私たちは、貧困に関するアウグスティヌスの説教のなかで引証しているその他の章句について一覧を挙げることを控えたいと思う。

私たちは、施しと救貧一般についてのアウグスティヌスの態度が根本的には終末論的であることを指摘する機会を後ほど持つことになるだろうし、また、この

⁵⁷ Fitzgerald, 'Mercy, works of mercy', in Fitzgerald (ed.), *Augustine through the Ages*, 558頁を参照。

⁵⁸ L. -J. Frazier, 'L'interprétation du récit du jugement dernier (Mt 25, 31-46 dans l'oeuvre d'Augustin', *REAug* 33 (1987) 70-84 at 70 n. 3を参照。

⁵⁹ さらに、Frazier, 'L'interprétation', 71-79頁を参照。

⁶⁰ B. Ramsel, 'Almsgiving in the Latin church: the late fourth and early fifth centuries', *Theological Studies* NS 43 (1982) 226-259 at 226頁を参照。

⁶¹ もっとも重要なものとして、『説教』355.2; NBA 34,244と『説教』356.1; NBA 34,258と260を参照。

⁶² たとえば、『修道規則』1.1.3; NBA 7/2,30を参照。また、van Bavelの註解の41-61; L. Verheijen, 'Spiritualité et vie monastique chez saint Augustin. L'utilisation monastique des Actes des Apôtres 4:31, 32-35 dans son oeuvre', in C. Kannengiesser (ed.), *Jean Chrysostome et Augustin, Actes du colloque de Chantilly, 22-24 septembre 1974*, *Théologie historique* 35 (Paris 1975) 93-123; idem, *Saint Augustine's Monasticism in the Light of Acts 4:32-35*, *The Saint Augustine Lecture 1975* (Villanova, PA 1979)を参照。

⁶³ G. P. Lawless, 'Augustine's decentering of asceticism', in R. Dodaro and G. Lawless (eds), *Augustine and His Critics. Essays in Honour of Gerald Bonner* (London and New York 2002) 142-163.

立場の背後には他のいくつかの神学的なモデルが存在するとはいえ、カルタゴのキュプリアヌス、北アフリカにおけるアウグスティヌスにとってもっとも重要な司教である先行者、彼がその点で顕著な役割を果たしたことを想定する必要がある。たとえば、『背教者について』*De lapsis* 35、そこでは富者が、自らの財産を彼らの来たるべき裁き手、主によって飾るようにと教えられ、あるいは、『労働と施しについて』*De opere et eleemosynis* 16、そこでは、救いを達成するために施しを通して神へと至ることについて語られている。こうしたキュプリアヌスの著作からの章句は、アウグスティヌスの著作のうちに繰り返し反映されている。また、キュプリアヌスの書簡も、貧者への配慮が「司教のまわりに集った、閉ざされ囲まれた共同体」と密接に結合している慈愛に関わるモデルについての十分な証言を提供している⁶⁴。

アウグスティヌスが回心以前に『アントニウスの生涯』*Vita Antonii* について聞いていたといっても、それについてもかくも読んだのは回心以後だと思われる⁶⁵。この伝記の彼に対する影響は、彼自身の同時代人に対する影響のように、人々が禁欲主義を受け入れるにあたって決定的だった。もちろん、アントニウスのモデルは隠者であり、過激だったが、一方、アウグスティヌスは、ヒッポにおいて共住の修道制を展開し、自身の仲間の修道者以外には誰にも自発的な清貧を命ずることはなかった⁶⁶。私たちがすでに示唆したように、アンブロシウスの慈愛に関わるモデルのように、アウグスティヌスは、アントニウスに字義通りにしたがって、所有物も社会的なつながりも放棄して市民生活と断絶することにためらいを覚えていた⁶⁷。彼はたしかに、自分自身について私たちに語っているように⁶⁸、所有物を放棄は「した」。しかし一方では、彼は、歓待の義務によって訪問

⁶⁴ Brown, *Poverty and Leadership*, 24. 富裕なキリスト者に関わるキュプリアヌスの理論と実践について、L. W. Countryman, *The Rich Christian in the Church of the Early Empire. Contradictions and Accommodations*, Texts and Studies in Religion (New York and Toronto 1980) 183–207; G. D. Dunn, 'Cyprian's care for the poor: the evidence of *De opere et eleemosynis*', in F. Young, M. Edwards, and P. Parvis (eds), *Studia Patristica* 42 (Leuven 2006) 363–368頁を参照。

⁶⁵ 『告白』8.6.14–15; NBA 1,232と234。『キリスト教の教え』序4; NBA 8,4を参照。さらに、J. K. Coyle, *Augustine's 'De Moribus Ecclesiae Catholicae'. A Study of the Work, its Composition and its Sources*, Paradosis 25 (Fribourg, Switzerland 1978) 208–211; A. P. Carriker, 'Antony of Egypt', in Fitzgerald (ed.), *Augustine Through the Ages*, 48–49 at 49頁を参照。

⁶⁶ Coyle, *Augustine's 'De Moribus'*, 239頁は、アウグスティヌスが結婚、財産、名誉について放棄した一方で、「断食に関するかぎり、緩和された禁欲主義は一見したところマニ教的な態度のように思われる」と語る。

⁶⁷ アンブロシウスの立場については、McLynn, *Ambrose of Milan*, 249.

⁶⁸ 『説教』355.2; NBA 34,246.

者を食事のおりにいつも通りもてなすよう命じられていたのであり、この義務とは、おそらく兄弟たちと共有するものだったのだろう⁶⁹。社会的なネットワークはまた、貧民救済に、そして教会の支援とその務めを果たす者に利用された寄付や遺産や相続物を確保するための手段でもあった。共同で所有物を保持する共住の共同体は、それ故に、教会の政治的、社会的な使命を支援する必要と結びついた計略的な手立てであった。

大部分の教父と同じく、アウグスティヌスは、財産を、高利貸や貧困——彼の時代の社会を構成するものと同じその一部と見なしていた。もちろん、財産には、不動産だけでなく、現金や貴重品、奴隷といった流動資産も含まれていた。所有物が共同で所有されていた黄金時代を異教徒たちが省みるように、また多くの初期のキリスト者と同様に、アウグスティヌスも個人の所有物をアダムの墮落の結果であると見なしていたのだろう⁷⁰。それ以前には、獲得されたのは普遍的な共通のものであり、それが強欲や貪欲さによって破壊された。キリスト教古代における著作家たちは、厳格主義者や、マニ教徒やペラギウス派といった非正統的だと考えられた者をのぞけば、この墮落以後の状況がもはや覆せるものではないということを受け入れていたように思われる。そして、所有物を譲り渡すことについての一般的な勧告というものはなく、共同して保有するようにと強制するような根拠もないのである。ユダヤ教に由来し、さらにはセネカのようなストア派によっても伝えられたような⁷¹、すべてのものは始まりにおいて神に属したという残存的、潜在的なキリスト教的な考えが⁷²、アウグスティヌスの聴衆たちが貧者に与えるときには、彼らが、彼ら自身のものというより神のものを彼らに与えているという彼の聴衆たちへの促しの背後にある⁷³。

⁶⁹ 『説教』355.2; NBA 34,246. このくだりの解釈については、Hill, WSA III/10, 171 n. 14を参照。

⁷⁰ 教父における財産に対する態度全般については、S. Giet, 'La Doctrine de l'appropriation des biens chez quelques-uns des pères', *Recherches de science religieuse* 35 (1948) 55-91; D. J. MacQueen, 'St Augustine's concept of property ownership', *RAug* 8 (1972) 187-229 (異教徒と初期キリスト教の見解についてのすぐれた議論を含む); R. M. Grant, *Early Christianity and Society: Seven Studies* (London 1978) ch. 5, 96-123; Countryman, *The Rich Christian* を参照。

⁷¹ 黄金時代以降の社会についてのセネカの見方は、P. Garnsey, 'The originality and origins of Anonymus, *De Divitiis*', in H. Amirav and B. ter Haar Romeny (eds), *From Rome to Constantinople. Studies in Honour of Averil Cameron*, *Late Antique History and Religion* 1 (Leuven, Paris, and Dudley, MA 2007) 29-45 at 34頁を参照。

⁷² この点について、MacQueen, 'St. Augustine's concept of property ownership', 196.

⁷³ 『説教』50.1.2; NBA 29,946.

4 貧困と施しについての説教⁷⁴

4.1 「雌鶏が卵のうえに座るように、黄金のうえに座るな」⁷⁵

あなたが、それ〔施し〕を運び手 [laturarii] のように貧者に与えると考えてみなさい。結局のところ、あなたは、あなたの眼があなたに向かつて、あなたが施しを与える者たちは地上において歩くことができると語っているのを分かっている。なるほど、あなたが彼らに与えるものを、彼らは天に運び、あなたはあなたが与えるものそれだけを取り戻すのではない。地上のものと引き換えにあなたは、天のものを受け取ることになるのを見るだろう。死すべきものの代わりに不滅のものを、時間的なものの代わりに永続するものを受け取ることになるだろう⁷⁶。

この説教は全体として、貧者に施しを与えることの抜け目なさ、ピーター・ブラウンが、「株式仲買のような、非人格的な何かであり——この危険な世界からつぎの世へと資本を賢明にも移転するようなもの」⁷⁷ だと描き出すような方策について叙述している。このことは、アウグスティヌスが、施しを与えることによって彼の会衆が「ある種の商売上の貸付、あるいは資本投下を行い、あなたがたがここで貸付をし、あるいは投資をすることで、あそこでは利益をつけて払い戻さ

⁷⁴ アウグスティヌスにおけるこの主題全般について、A. D. Fitzgerald, 'Almsgiving in the works of St. Augustine', in A. Zumkeller (ed.), *Signum Pietatis: Festgabe für Cornelius Petrus Mayer OSA zum 60. Geburtstag*, Cassiciacum 40 (Würzburg 1989) 445-459; R. Garrison, *Redemptive Almsgiving in Early Christianity*, Journal for the Study of the New Testament Supplement Series 77 (Sheffield 1993); A. D. Fitzgerald, 'Mercy, works of mercy', 557-561; A. Kessler and J.-U. Krause, 'Eleemosyna', in C. Mayer et al. (eds), *AL* (Basel 1996-2002), vol. 2, 752-767; Finn, *Almsgiving*, passim; idem, less successfully, 'Portraying the poor'; N. Kamimura, 'The emergence of poverty and the poor in Augustine's early works', in *Prayer and Spirituality in the Early Church* 5, 283-298. 施しの領域におけるアウグスティヌスの用語法に関して、H. Pétré, *CARITAS. Étude sur le vocabulaire latin de la charité chrétienne*, Spicilegium Sacrum Lovaniense, Études et Documents 22 (Louvain 1948) 90-96, 134-139, 156-158, 197-199, 219-220; さらに一般的に、D. Grodzynski, 'Pauvres et indigents, vils et plebeians (Une étude terminologique sur le vocabulaire des petites gens dans le Code Théodosien)', *Studia et documenta historiae et iuris* (Rome 1987) 140-218; R. Klein, 'Arm und Reich. Auskünfte und Stellungnahmen Augustins zu Sozial-Struktur der Gemeinden in den neuen Predigten', in G. Madec (ed.), *Augustin prédicateur (395-411). Actes du colloque international de Chantilly (5-7 septembre 1996)*, ÉAA 159 (Paris 1998) 481-491.

⁷⁵ 『説教』 350B.1; NBA 34,158; trans. Hill, WSA 3/10,114: *Noli incubare auro*.

⁷⁶ 『説教』 107A.2; NBA 30/2,340; trans. Hill, WSA 3/4,120: 'Si datetur pauperibus laturariis? Nosti enim et vides quia quibus das in terra ambulant. Quod das in caelum portant, et cum portaverint ad caelum, non quod das hoc recipis. Pro terrenis enim caelestia accepturus es, pro mortalibus immortalia, pro temporalibus sempiterna.'

⁷⁷ Brown, *Augustine of Hippo*, 193.

れるようになる」⁷⁸と述べていることによって、確認される。彼らは、自分たちの施しを、貸し付けるのに完全に信用でき、彼らに貸付金に利益もつけてすべてが支払われるだろう神に対する金銭の貸付として考えるように指図されている⁷⁹。その言葉 *laturarii* の一貫した使用と、ヒッポという港湾都市⁸⁰の住民にも共鳴するその商業的な響きによって、慈愛に関わる取引の本質がいつそう効果的に表現されている。他の箇所では、施しを受け取る貧者は与えてくれた者のために神に祈り、「主よ、私は、金銭を借りました。どうか私の保証人になってください」とでも述べているかのようである⁸¹。

ヒッポの司教によって用いられた自己利益に基づくその他の論証とは、施し、あるいは祈りとともにある施しが、深刻ではない罪を拭い去るというものである⁸²。ここにアウグスティヌスの施しに関する考えへの独自の貢献がある、と言うことができるかもしれない。つまり彼は、罪の許し的手段として施しを呈示し、異なる罪については異なるかたちの施しが必要であり（すべての罪が等価であるというストア派的な見方に対峙して）、また、さらなる罪を避ける方法として施しが必要であるとする⁸³。しかしながら、アウグスティヌスにしたがえば、すべての施しはそれに伴う義務、つまり、断食、祈り、そして、罪の許しを含む。これらの結合については、さまざまなテキストのうちに認められ、そのすべてに初心者と共に⁸⁴、キリスト者共同体を強固にするという意図があるように思われる⁸⁵。他の箇所では、施しは、与える者の魂にとって将来の安息を贖う手段であ

⁷⁸ 『説教』 42.2; NBA 29,746; trans. Hill, WSA 3/2,235: 'Quasi fecus traiecitium facis. Hic das, ibi recipis.'

⁷⁹ 『説教』 86.3.3; NBA 30/2,10.

⁸⁰ アウグスティヌスにおけるその他の運搬人のイメージについて、B. Ramsey, 'Almsgiving in the Latin church: the late fourth and early fifth centuries', *Theological Studies* 43 (1982) 226-259 at 248 n. 110. 港湾都市ヒッポについては、Lepelley, *Les cités*, 2, 113-125. とはいえ、殆どの著作家において、施しに関する言葉は商業的になりがちである: Ramsey, 'Almsgiving', 247-248頁を参照。

⁸¹ 『詩篇講解』 36『説教』 3.26; NBA 25,820; trans. Boulding, WSA 3/16,134: 'Domine, mutuum accepi, fidedic me'.

⁸² たとえば、『説教』 39.6; NBA 29,718 と『説教』 56.12.16; NBA 30/1,160を参照。

⁸³ ここで私たちは、Fitzgerald, 'Mercy, works of mercy', 560頁にしたがっている。

⁸⁴ 施しについて、初心者に対するアウグスティヌスの促しについては、W. Harmless, *Augustine and the Catechumenate* (Collegeville, MN 1995) 229, 251 with n. 37と258.

⁸⁵ その例として、『詩篇講解』 42.8; NBA 25,1044と1046; 『説教』 9.17; NBA 29,180; 『説教』 16B.3; NBA 29,326; 『説教』 39.6; NBA 29,716と718; 『説教』 56.12.16; NBA 30/1,158と160; 『説教』 58.9.10; NBA 30/1,194; 『説教』 150.6.7; NBA 31/1,452と454 (施しと祈りの断食に対する優位性について); 『説教』 209.2; NBA 32/1,162; また、『キリスト教の教え』序文 6; NBA 8,244-246を参照。さらにその全般について、Ramsey, 'Almsgiving', 244-246頁、断食と施しのつながりについて。教会の一性を促進するものとしての施しに関して、Fitzgerald, 'Mercy, works of mercy', 558. 断食がそれ

ると言われる⁸⁶。ここで私たちが注意すべきは、その個人的な、また終末論的な強調の両方についてであって、それらについて既に一人の研究者にとどまらず、アウグスティヌスの主たる関心事が施しを与える者の救済にあり、実際の貧者の救済にあるのではないと結論づけていることである⁸⁷。

この枠組みにおいて欠けているのが顕著なのは、教会的な一体性を強調しているにも関わらず、施しを通しての集団的な救済という考えであり——それが驚くにあたらないのは、アウグスティヌスには、少数者にとっての予定という考えがあるからである⁸⁸。貧民救済と呼ばれるかもしれないものに対するこうしたアプローチは、激しい批判をよんできた。たとえば、ジョン・バーナビーは、その結果として、私たちの隣人のみならず神もまた、私たち自身の利益のために使用しようとすることになることを主張した⁸⁹。このアプローチの個人主義は、アウグスティヌスによれば、同じく施しのよい動機が個人自身の貧しい、病の魂に憐れみを示すことだという考えにも見出されることができ。彼ら自身の内的な住いに関心を払ったのちにはじめて、個人は適切に他者に対して与えるという行為に従事することが可能になる⁹⁰。このことは、悔悛の実践と結びついた強制的な施しの形態ともしっかり結びつくことになるだろう⁹¹。

施しについてのアウグスティヌスの説教では一貫して、与える者の気質をはっきりと強調する言説に私たちは出会うのであり、そこでは、謙遜が決定的である。つぎのような一節が典型的である。

だれかが十分な金銭と資産を有していて、だがそれのことを誇っていないかもしれない。

自体として一体性を達成する手段だという点について、『断食の効用について』、特に、57.7-8; CCL 46,236-237. 施しと罪の赦しとの関係については、L. Swift, 'Giving and forgiving: Augustine on *eleemosyna* and *miseriordia*', *AugStud* 32 (2001) 25-48.

⁸⁶ 『説教』 86.14.17; NBA 30/2,24.

⁸⁷ たとえば、Vismara Chiappa, *Il tema*, 165; またこの点が論じられるのは、R. Canning, *The Unity of Love for God and Neighbour in St Augustine* (Heverlee-Leuven 1993) 394-395頁である。それゆえ、Fitzgerald, 'Almsgiving', 447頁で、アウグスティヌスが、「貧者を富者の聖化の手段として用いることはない」と語ることに同意するのは難しい。

⁸⁸ 予定説と貧民救済については、以下の議論を参照。

⁸⁹ J. Burnaby, *Amor Dei. A Study of the Religion of St. Augustine*, The Hulsean Lectures for 1938 (London 1960) 134. 明らかにこの点を支持するのは、Ramsey, 'Almsgiving', 254 n. 142; Canning, *The Unity of Love*, 351-420頁は、バーナビーの立場に反対。Fitzgerald, 'Almsgiving' も随所でアウグスティヌスを擁護する。

⁹⁰ とりわけ、『神の国』 21.27.3; NBA 5/3,294; 『説教』 9.18; NBA 29,180と182; 『説教』 39.6; NBA 29,716と718; 『説教』 106.4. また、『説教』 34.7; NBA 29, 626と628を参照。

⁹¹ Ramsey, 'Almsgiving', 247; K. Uhalder, *Expectations of Justice in the Age of Justinian* (Philadelphia 2007) 105-127 with lit.

そして、そのときその者は貧しい。別の者が、何も持っていないで、だが貪欲で膨れ上がっているかもしれない。そして、そのとき神は、その者を豊かで非難される者のうちに入れるのである。神は、富者と貧者を、その者たちの宝の箱、あるいは住居にではなく、その心において尋ねる⁹²。

ここから、富者で天にいたる者がいる一方で、貧者でいたらない者がいるということになる⁹³。しばしばアウグスティヌスは、謙虚な富者と傲慢な貧者とを並置する。これはおそらく、ペラギウス派の霊的な高ぶりについての自身の関心を反映しているのだろう⁹⁴。他の箇所では、霊的な貧困は霊的な富と対比して描かれ、高慢を包含し⁹⁵、そして、その富者は、高慢で尊大な人々と呼ばれている⁹⁶。アブラハムが、謙虚な富者の例である⁹⁷。神は、人々の富に注意を向けるのではなくて、彼らの気質の本質に注意を向けるのであって⁹⁸、高慢な富者と貧者、潜在的な物乞いに対する共通の物差しとは、彼らの謙虚さなのである。

自分たちも同じだと分かっているあなたが、どのような顔であなたの主に向かって乞うことができようか。その人は言うだろう。「私はそのような者ではない。私がそのような者でないようにしたまえ」。絹をまとった者は高慢な思いでぼろをまとった者について話している。だが私は、裸の者たちに尋ねている。私は、今あるような衣服をまとったあなたがたに尋ねているのでなく、生まれたときにそうだった裸の者たちに尋ねている⁹⁹。

この共通の人間性は、富裕と貧困のあいだ相互に関係を生み出すにちがいない。

⁹² 『詩篇講解』48「説教」1.3; NBA 25,1196; trans. Boulding, WSA 3/16,352-353: 'Habeat multas facultates pecuniarum; si in eis non extollitur, pauper est; non habeat aliquid, et cupiat et inpletur, inter divites et reprobos eum deputat Deus. Et divites et pauperes in corde interrogat Deus, non in arca et domo.'

⁹³ これは、反復される主題であり、この主題について検討した議論は、『説教』114B (=「ドルボー説教」5).9-13; NBA 35/1,106-116に見出される。

⁹⁴ たとえば、『詩篇講解』39.27; NBA 25,968と970; 『詩篇講解』48「説教」1.3; NBA 25,1196と1198; 『説教』85.2.2; NBA 30/1,650; 『説教』346A.4; NBA 34,94. G. Bonner, 'Anti-Pelagian works', in Fitzgerald (ed.), *Augustine Through the Ages*, 41-47 at 42頁を参照。禁欲主義に対するアウグスティヌスとペラギウスのアプローチの差異については、J.-M. Salamito, *Les virtuoses et la multitude. Aspects sociaux de la controverse entre Augustin et les pélagiens* (Grenoble 2005) (with lit.) の包括的な研究を参照。

⁹⁵ 『説教』14.2; NBA 29,244.

⁹⁶ 『説教』290.6.6; NBA 33,190.

⁹⁷ 『説教』14.5; NBA 29,248.

⁹⁸ 『説教』105A.1; NBA 30/2,302-308.

⁹⁹ 『説教』61.8; NBA 30/1,236と238; trans. Hill, WSA 3/3,145: 'Quam frontem habes petendo ad Dominum tuum, qui non agnoscis parem tuum? Non sum, inquit, talis: absit a me, ut talis sim. Inflatu obsericatus ista loquitur de pannoso. Sed ego nudos interrogo. Non interrogo in vestibus, quales sitis, sed quales nati fueritis.'

なぜなら、貧者が、この生において富者の仲間になじられているからである¹⁰⁰。彼らは双方同じ道にそって歩いていて、たがいの荷を分かち合わなければならないからである¹⁰¹。ある点では、この分かち合いにはドナティストの荷を含むことさえあるように思われる¹⁰²。そのように共通の人間性に対して訴えているのは、富裕と貧困の対比をぼんやりさせることだけでなく、キリスト者の共同体における結束を励ますことを意図しているのであって¹⁰³、それらは、共通の善さという概念とはほとんど関連がないように思われる¹⁰⁴。

仮に神が、与え手の気質にのみ関心を有するならば、与えられる総体は非物体的で、富がすぐさま取り去られるべきでないということが帰結する。アウグスティヌスの説明では、キリスト者は、彼らがキリスト者で必然的に貧者だということをはっきりと分かっているかぎり、富裕だということを許されていることになる¹⁰⁵。富の所有は、終末論的には、「テモテ前書」6:18-19「よいことを働き、よい働きにおいて富み」という文脈において理解されるべきであり¹⁰⁶、そして、その与える程度は、「コリント後書」8:13「それは、他の人々が楽になり、あなたがたが苦勞するということではなく」という意図において定められるべきである。つまりアウグスティヌスは、自らの会衆に対して、自分に負担をかけることなくその能力に応じるよう望んでいる¹⁰⁷。彼らができるかぎり多くを費やすべきだとはいえ¹⁰⁸、彼らの手立てにしたがって¹⁰⁹、自分たちがただよい心掛けだけを持ち、金銭を持っていないと心配すべきでなく¹¹⁰、あるいは、彼らが所有している僅かばかりから少ししか与えられないなどと心配すべきでもない¹¹¹。アウグスティヌスは、いかなるキリスト者も10分の1税を納めるのが容易いことは

¹⁰⁰ 『説教』25A.4; NBA 29,492と494

¹⁰¹ 『説教』53A.6; NBA 30/1,112と114; 『説教』85.6.7; NBA 30/1,656; 『説教』164.7.9; NBA 31/2,722.

¹⁰² 『説教』164.7.10-11; NBA 31/2,724.

¹⁰³ Brown, *Augustine of Hippo*, 247「彼が、ドナティストの批判に対抗するために、群れの一体感を保つ必要があったことによって、富裕者と貧者の間のたいへん現実的な分裂のうわべを繕い、それに結託しさえしたかもしれないことは、ほとんど疑いの余地がない」〔P・ブラウン『アウグスティヌス伝』上、出村和彦訳（教文館、2004）259頁〕。

¹⁰⁴ とはいえ、『説教』50.2; NBA 29,946と948を参照。さらに、Vismara Chiappa, *Il tema*, 174-175.

¹⁰⁵ 『詩篇講解』68『説教』2.14; NBA 26,688と690.

¹⁰⁶ 『詩篇講解』72.26; NBA 26,850と852.

¹⁰⁷ 『説教』42.2; NBA 29,746.

¹⁰⁸ 『説教』86.14.17; NBA 30/2,24.

¹⁰⁹ 『説教』39.6; NBA 29,716と718.

¹¹⁰ 『詩篇講解』125.5; NBA 28/1,116.

¹¹¹ 『説教』107A.8; NBA 30/2,348.

ほとんどないと分かっている¹¹²、そして聴衆に向かい、彼ら自身に余分なものを寄付することによって、貧者に必需品を提供するようにと説得しており、さらには、彼らが貧者に彼らの安価な品を与えるかぎり、高価な品を使いつづけるようにとさえ促している¹¹³。概して、アウグスティヌスの施しに関する勧告は穏健なもので、また、自発的な清貧という主題について、以下で私たちがさらに論ずるように、キリスト者の大多数に向かって完全な放棄を提唱していない。強調されているのは、むしろ、人々が自分たちの持ち物と自分たちに応じた仕方で行う謙虚で、気質にかなった分かち合いである。

アウグスティヌスとキリスト教古代の作家たちによって、施しへと彼らの会衆を刺激すべくさらに採られた方策とは、キリストと貧者を同一視することだった¹¹⁴。実際、これは強力な神学的装置である一方、貧者をキリストへ包括することで彼らの人格を剥奪する危険を孕んでいないかどうか、その点が妥当な仕方であらうと問われなければならない¹¹⁵。この点は私たちが、貧者が現実のものなのか、あるいは修辭的な装置かを考察するときに簡潔な仕方であらうと前面に出てくるだろう。

施しについて論ずるキリスト教古代のすべての作家にとって、施しというこの形態、それは利己的であっても神への投資であれば適切なのだが、それに対比されるのが高利貸だった¹¹⁶。すくなくとも4世紀初頭、詩人コモディオスは、高

¹¹² 『説教』 106.3; NBA 30/2,318. アウグスティヌスが10分の1税を取めるよう勧めている箇所については、たとえば、Ramsey, 'Almsgiving', 234 with n. 46. Finn, *Almsgiving*, 51頁を参照。A. H. M. Jones, 'Church finance in the fifth and sixth centuries', *Journal of Theological Studies* NS 11 (1960) 84-94 at 85頁では、事実、10分の1税がまったく例外的だったと考えている。

¹¹³ 『説教』 61.11.12; NBA 30/1,240と242.

¹¹⁴ たとえば、アウグスティヌス『詩篇講解』36『説教』3.7; NBA 25,822; 『詩篇講解』39.27; NBA 25, 968; 『詩篇講解』40.2; NBA 25,980と982; 『詩篇講解』147.13; NBA 28/2,826; 『説教』25.8; NBA 29,484. M. Marino, 'La pobreza de Cristo en los sermones de san Agustín', 295-311、特に299頁を参照。

¹¹⁵ Ramsey, 'Almsgiving', 253; Fitzgerald, 'Almsgiving', 450 with n. 24には反して。Ramseyの立場は、Kessler and Krause, 'Eleemosyna', 766頁によって斥けられている。

¹¹⁶ 概して、R. P. Maloney, 'The teaching of the Fathers on usury: an historical study on the development of Christian thinking', *Vigiliae Christianae* 27 (1973) 241-265; Ramsey, 'Almsgiving', 229; アウグスティヌスにおけるこのトピックについては、C. L. Hanson, 'Usury and the world of St. Augustine of Hippo', *AugStud* 19 (1988) 141-164, and A. Di Berardino, 'La défense du pauvre: saint Augustin et l'usure', in *Saint Augustin: africanité et universalité. Actes du colloque international Alger-Annaba, 1-7 avril 2001, Augustinus Afer, Textes réunis par P.-Y. Fux, J.-M. Roesli, O. Wermelinger (Fribourg, Switzerland 2003) 257-263* (教会法上の文献について); ギリシア教父については、B. Ihssen, 'That which has been wrung from tears: Usury, the Greek Patristics and Catholic social teaching', in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Patristic Social Ethics: Issues and Challenges for Contemporary Christian Social Thought*, CUA Studies in

利貸から生まれた施しは神によって拒まれるだろうという考えを抱いていた¹¹⁷。たとえ、この考えがアンブロシウス『義務について』1.145において取り上げられたとはいえ、私たちは、高利貸が市民法によって許可されていた一方、教会によって非難されていたという確立された方針を取るアウグスティヌスに、この考えを明確に見出すことはない¹¹⁸。彼によれば、高利貸を開業している者たちが自分たちの団体を作り、高利貸は隆盛で公に誇示されている¹¹⁹。しかし、このことによって彼が、どのように富者が神に貸さなければならないかを記述するに際して、高利貸のあらゆる用語を使うことを妨げられているわけではない。「主自身が進み出て、あなたに貸与について尋ねる。彼は、あなたが高利貸であることを禁じている」¹²⁰。このようにして、正しい人は高利貸を実践すべきである¹²¹。

アウグスティヌスの貧者と救貧についての見方にとりわけ関連しているのが、予定についての彼の考えである¹²²。仮に永遠において自分たちの運命がどうなるか不確かならば、救貧に貢献しようとする会衆にどのような動機付けがあったか、それを尋ねるのがもっともなものかもしれない。彼らが永遠の罰に処されるな

Early Christianity (Washington, DC, forthcoming), with lit. [‘That which has been wrung from tears: Usury, the Greek Patristics and Catholic social teaching’, in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Reading Patristic Texts on Social Ethics. Issues and Challenges for Twenty-First-Century Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, 2011) として刊行]。

¹¹⁷ *Instructiones divinae* 20; CCL 128,59. さらに、Ramsey, ‘Almsgiving’, 250–251頁を参照。

¹¹⁸ たとえば、『説教』77A.4; NBA 30/1,550と552; 『説教』86.3.3; NBA 30/2,10; 『説教』113.2.2; NBA 30/2,414と416; 『説教』239.5; NBA 32/2,626; 『詩篇講解』36「説教」3.6; NBA 25,818と820; 『詩篇講解』54.14; NBA 26,100と102を参照。だが、『書簡』153.24; NBA 22,550と552では、盗まれた金銭が貧者に渡されたとしても、施しだと考えるべきでないと忠告する一方、『説教』359A.13; NBA 34,338では、詐欺、略奪、ゆすりによって得られ施しにいられた基金は、施す者には何ら影響を持たないことが述べられている。

¹¹⁹ 『詩篇講解』54.14; NBA 26,100.

¹²⁰ 『詩篇講解』36「説教」3.6; NBA 25,818; trans. Boulding, WSA 3/16,133: ‘Ipse Dominus procedit quem feneres, qui tibi iubebat ne fenerares.’

¹²¹ 『詩篇講解』36「説教」3.6.

¹²² アウグスティヌスの予定についての考え、とりわけペラギウス派との論争においてはっきりとした点については、特に、G. Bonner, *Saint Augustine of Hippo*, 348–349頁と392頁「その教えを擁護しようとする試みることによっては何も得られず、その教えは過酷なものにとどまり、ほとんど、私たちの共感を得るというよりも、私たちに畏怖の念をかきたてるに等しいのである」、Lancel, *Saint Augustine* は、「救済の選びの *numerus clausus*」(432頁)〔選ばれる者の数〕に言及して、「アウグスティヌスは、彼の最後の20年を通して、自身の反ペラギウス論争に囚われの身となった」(434頁)と記している。アウグスティヌスの予定についての考えが、非論争的な仕方では擁護されているのは、J. Wetzel, ‘Snares of truth. Augustine on free will and predestination’, in Dodaro and Lawless (eds), *Augustine and His Critics*, 124–141頁。

らば、そのときには施しは時間の無駄だろう。まさに施しという行為そのものが、罪へ落されたキリスト者への懲戒のようなものであれば、一方では行為を行う者が、他方では受け取る者が選びに属するかぎりにおいてのみ、その行為はおそらく有効だろう¹²³。たとえ、教えの真実が会衆から隠されるべきでないと考えていたにせよ¹²⁴、アウグスティヌスは慎重にも、会衆に向かってというよりむしろ著作において、知識人や反対者、あるいは修道者に向けて自分の予定についての教えを表現する。だが、より単純な人々が、彼らのうちの漠然とした数の者たちが救われ、残りの者たちは滅びるというメッセージに常に直面しないようにと、その教えは控え目に説明されたと思われていた¹²⁵。現代の多くの読者が嫌悪を抱いて見るようなこの曖昧な姿勢において、貧者は實際上現実の人間として見失われている。事実、アウグスティヌスの予定の神学は、彼の施しについての見方を役立たずのものにしてしまうと論じられるだろう。この教えが有益だという観点から見ても、彼らが社会的な変革の道具として描かれることはできない。

4.2 直接的、あるいは間接的な施し

伝記作者ポッシディウスによれば、アウグスティヌスが貧者に分配していたのは、「その収入が教会の財産と信者たちの献金からであるような、彼や彼と一緒に住んでいる者たちがそれによって生計を立てていたのと同じ源から」である¹²⁶。しかしながら、ヒッポにおいて広く行われている救貧のいくつかの別の方法が、直接的、また間接的な贈与の両方を含んでいたことは明らかである。アウグスティヌスによれば、イエス自身も財布を所有し、信者たちからの寄付を受け取っていた¹²⁷。私たちがブラウンの示唆とともに論ずるのは、平信徒が実際のところ、自分たちは二つの施しの仕組み、一つは貧者と聖職者の支援のための仕組み、もう一つは彼ら自身の救いのための仕組み、これらのあいだに挟まれ

¹²³ 破滅に予定されたキリスト者を懲戒することが有益であるかどうか不確実な点については、『譴責と恩恵について』*De correptione et gratia* 14.43; NBA 20,178. Bonner, *Saint Augustine*, 348頁を参照。

¹²⁴ 『堅忍の賜物』*De dono perseverantiae* 16.40; NBA 20,360と362. Bonner, *Saint Augustine*, 349頁を参照。

¹²⁵ 『堅忍の賜物』22.57–61, esp. 58; NBA 20,386–390.

¹²⁶ 『アウグスティヌスの生涯』23.1; ed. Bastiaensen, 188; trans. Rotelle, 95: '[e]rogabat unde et sibi suisque omnibus secum habitantibus, hoc est vel ex redditibus possessionum ecclesiae vel etiam ex oblationibus fidelium.'

¹²⁷ 『詩篇講解』103「説教」3.11; NBA 27/1,720と722; trans. Boulding, WSA 3/19,152.

ているのを分かっていたということである¹²⁸。たとえば、人々の扉や門のまえに立っている物乞たちのイメージが、「ルカ福音書」16:19-31の富者とラザロの物語の修辭的な反響であるとしても¹²⁹、直接的な施しがアウグスティヌスの会衆たちによって実践されたこと、あるいは多分、物乞たちに強制されたということを知らせるために、彼らが立ってその視線を個々の者へ向けていることに関する十分に具体的な言及が存在している¹³⁰。私は、古代末期においては、とりわけ教会や修道院のような儀式が行われる場に物乞いの群れが集まったということを知っている¹³¹。それ故、アウグスティヌス自身が語る場所では、教会への道の途中で貧者たちの待ち伏せを受け、彼らに対して、総督代理 (*legatus*) が貧者に語るように、彼が会衆へと自分たちに施しを行うように語ってくれと約束させられたことがあった¹³²。別の機会での会衆に向けての忠告は、貧者に直接施すこと、そしてそうすることで、二重の恵みの行為——貧者の悲惨さを和らげるのみならず、与える者として謙虚な振る舞いを遂行している——を為しているというものであった¹³³。このことはまた、貧者に *agape*、あるいは食事を提供し、その場では与える者は食卓で給仕することによって実際に施しを行うという習慣にも当てはまる¹³⁴。寄付は、アウグスティヌスの修道的共同体に対して（以下参照）信者たちによって行われ、そこから、貧者に配分されたのである。私たちに分かっているのは、「荷馬車」 (*quadriga*) というものがあって、多分車輪のうえに載った献金箱で典礼の最中に教会のなかを何回もめぐって、そのなかに会衆が自分たちの献金を入れたということである¹³⁵。他の箇所では、教会に行く人々が、貧者に自分たちの収入からある部分を取りのけておくようにと助言を受けており¹³⁶、それは、累積していた間接的な贈与、一つの完全な行為で自分たち

¹²⁸ Brown, 'Augustine and a crisis of wealth', 12.

¹²⁹ たとえば、「説教」32.23; NBA 29,596と598（私たちはこれについて、Finn, *Almsgiving*, 175頁の懐疑的な見方を共有している）と「説教」56.6.9; NBA 30/1,148と150を参照。

¹³⁰ たとえば、『説教』9.19; NBA 29,182と184; 『詩篇講解』36「説教」2.13; NBA 25,782と784; 『詩篇講解』75.9; NBA 26,950; 『詩篇講解』102.12; NBA 27/1,606を参照。

¹³¹ V. Neri, *I marginali nell'occidente tardoantico. Poveri, 'infames' e criminali nella nascente società cristiana*, MUNERA. Studi storici sulla Tarda Antichità 12 (Bari 1998) 64頁を参照。

¹³² 『説教』61.13; NBA 30/1,242.

¹³³ 『説教』259.5; NBA 32/2,840.

¹³⁴ 『説教』259.5; NBA 32/2,840.

¹³⁵ 『説教』66.5; NBA 30/1,346。この仕掛けの中身についてのヒルの考察については、WSA 3/3,214 n.19を参照。私たちは、Finn, *Almsgiving*, 47頁のように、この言葉でもってエリヤの戦車のイメージまで見ようとはしない。

¹³⁶ 『詩篇講解』146.17; NBA 28/2,794.

の所有物をすっかり譲渡できないだろう、あるいはしないだろう大部分の人々にとって、救いを実現するための実際的で逐次的な手段だった、いわば「キリストのための取り分」を仄めかしている¹³⁷。『説教』86.9.11においてアウグスティヌスは、自分の子供たちにそなえて蓄えることについて打ち解けた忠告を行っていて、それを危険な冒険だと評している。彼の言うには、死ぬこともある子供に託そうとするものを、見知らぬ人々や外国人たちに与えるほうがずっとよい。あるいは、キリストをもう一人の子と考え、他の子と共有する分を貧者を通してキリストに割り当てるほうがよい¹³⁸。

ヒッポ教会の収入のかなりの部分は、教会の財産からのものに違いない。収入のいくらかは、寄付、遺産、あるいは相続物であって、そうした財産の集積が、3世紀からの帝国経済の一般的な特徴であった¹³⁹。アウグスティヌスは、貧者に役立てるのには遺贈よりも遺産を望んでいたように思われる。というのも、後者は前者の一部であり、前者には司教を相続人とするものが含まれていて、ときには亡くなった者の子供たちを犠牲にすることもあった¹⁴⁰。『説教』355と356は、私たちが以下で見ると、自発的な清貧についてのアウグスティヌスの見方を教える貴重な資料であり、教会のために自分の資産を譲渡した人々についてのいくつかの卓越した例を提供し、寄進を受けるにあたってのアウグスティヌスの認

¹³⁷ 取り分については、E. F. Bruck, *Die Kirchenväter und soziales Erbrecht. Wanderungen religiöser Ideen durch die Rechte der östlichen und westlichen Welt* (Berlin, Göttingen, and Heidelberg 1956) (S. R. Holman, *The Hungry Are Dying. Beggars and Bishops in Roman Cappadocia* (Oxford 2001) 14 における批判); Vismara Chiappa, *Il tema*, 184–188.

¹³⁸ NBA 30/2,20. 同じ忠告が、『キリスト教の教えについての説教』 *Sermo de disciplina christiana* 8.8; CCSL 46,216 に見出される。さらに、P. Allen, 'Challenges in approaching Patristic texts from the perspective of contemporary Catholic social teaching', in Leemans, Matz, and Verstraeten (eds), *Reading Patristic Social Ethics*, forthcoming. ['Challenges in approaching Patristic texts from the perspective of contemporary Catholic social teaching', in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Reading Patristic Texts on Social Ethics. Issues and Challenges for Twenty-First-Century Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, 2011) として刊行]。

¹³⁹ Jones, 'Church finance in the fifth and sixth centuries', 84–85; Brown, 'Augustine and a crisis of wealth', 12; H. G. Ziche, 'Administrer la propriété de l'église: l'évêque comme clerc et comme entrepreneur', *Antiquité Tardive* 14 (2006) 69–78; A. Leone, 'Clero, proprietà, cristianizzazione delle campagne nel Nord Africa tardoantico. *Status quaestionis*', *Antiquité Tardive* 14 (2006) 95–104; A. Giardina, 'The transition to late antiquity', in W. Scheidel, I. Morris, and R. Saller (eds), *The Cambridge Economic History of the Greco-Roman World* (Cambridge 2007) 743–768 at 768.

¹⁴⁰ 『アウグスティヌスの生涯』24.3; ed. Bastiaensen, 190; trans. Rotelle, 97–98. またヤヌアリウスの事例については、以下を参照。

識についても実証している¹⁴¹。アウグスティヌスの同僚の修道士のひとりであるヤヌアリヌスの場合がとりわけ巧妙なものだった。修道院に入るにあたって彼は、自分のすべての資産を捨て去ってしまったと主張していたのだが、その死に際して分かったのは、自分に息子と娘が一人ずつ残されていたにもかかわらず、教会を自分の資産の受取人とする遺言を作成したということだった。ヒッポの司教は、自分を卑劣な取引に巻きこむだろうと考えて、その遺贈の受取を拒絶した。そして、彼は、個人的にその件をヤヌアリヌスの子供たちと解決することに取り組んだ¹⁴²。この遺贈を拒絶することで批判を受けざるを得ないことを、彼は分かっていた¹⁴³。同じような事例がボニファティウスの遺産にもあり、彼は、教会に所有してもらうよう望んだ船会社を所有していた。これもまた、難破にともなう莫大な負債とそれが招く科料と損害のため、アウグスティヌスは受取を拒絶した¹⁴⁴。助祭のファウスティヌスは、軍務ののちにアウグスティヌスの修道院に加わったのだが、結局は、自分が兄弟と共有していた財産を分割して、彼らには半分を贈与し、半分は自分の出身である教会に贈与した¹⁴⁵。裕福な助祭のヘラクリヌスは、ヒッポにある最初の殉教者聖ステファノの *martyrium*〔殉教者記念聖堂〕のための基金を設け、司教アウグスティヌスに彼自身の手で配分されるべき金額を提供した。司教は拒絶し、その代わりに地所を購入しようと助祭に相談を持ち掛けた。この取引は裏目に出た。というのも、ヘラクリヌスはその資産を購入するために金を借りなければならなかったからで、また、その頃アウグスティヌスは説教において、その投資にはかなりの年月にわたって収入を生み出す見込みはまだついていないと語ったのだった。加えてヘラクリヌスは、教会の裏手に一区画の地所を購入し、そこに家を建ててそのすべて教会に寄贈した。だが、二、三人の奴隷と一緒に修道院に加わったとはいっても、自分の負債のため彼は貧しいままであった¹⁴⁶。良家出身の司祭レポリウスは違ったやり方を採り、すべての財産を別の場所にある教会に譲渡して、そこに自分が修道院を設立して

¹⁴¹ 寄進に対するアウグスティヌスの注意深い態度については、L. de Salvo, 'Nolo munera ista (Aug. Serm. 355.3): eredità e donazioni in Agostino', in G. Crifo and S. Giglio (eds), *Atti dell'Accademia Romanistica Costantiniana. IX Convengo Internazionale Napoli 1989* (Spello, Perugia, and Città di Castello 1993) 299-323頁を参照。

¹⁴² 『説教』355.3; NBA 34,248と250; 『説教』356.2; NBA 34,260; 『説教』356.11; NBA 34,268と270。

¹⁴³ 『説教』355.4; NBA 34,250と252。

¹⁴⁴ 『説教』355.5; NBA 34,252。

¹⁴⁵ 『説教』356.4; NBA 34,262。

¹⁴⁶ 『説教』356.7; NBA 34,264と266。

修道士たちに譲り渡した。アウグスティヌスの執拗な要請で、彼はまた宿屋と聖堂をヒッポに建てて、一軒の家を購入した¹⁴⁷。ヒッポの司教が、自分自身に取り組むのに気乗りがしなかった記念碑的なエヴェルジェティスムを他の人たちが行うのはやめさせようとしなかったようにも思われる。アウグスティヌスの共同体における聖職者の贈与に関するそのような写実的的確な描写は、一層増大する官僚制をまきこむ施与の膨大で複雑な体系だつたにちがいないものに、ちょっとした味わいを与えている。だが、それはほとんど、貧者に直接接触れることを、あるいは彼らを私たちの眼に見えるようにはしてくれないように思われる。

4.3 聖職者の支援¹⁴⁸

すでに述べたように、ポッシディウスは、アンブロシウスのようにアウグスティヌスが、信徒に向かって聖具室に必要なものを提供しないようにと勧告している¹⁴⁹。ある箇所で「労苦する雄牛たち」¹⁵⁰と描写されている聖職者への支援の呼び掛けが、さらに強く訴えかける仕方で行われている。物乞い、あるいは恵んでくれるかもしれない人にしつこく頼み込む困窮者と、困窮しても沈黙し、与える側から求めるべき司祭との対比が示されているかどうか、また、それが直接的になのか、間接的なのか、それは明らかでない。アウグスティヌスは、「あらゆる仕方でも物乞いに与えなさい。だが、さらに一層を神のしもべに」と忠告している¹⁵¹。会衆は、自分たちの聖職者たちの要求を警戒するようと言われている。おそらく、彼らの一人が食べ物が必要とせず、衣服を必要としているとか、あるいは、自分の頭にかぶせる覆い、あるいはおそらく教会を建てていて、財政的な助けを必要としているとかである。ヒッポの司教は、司教たちが金銭を蓄えているということを否定し、信徒たちに向かって、彼らの聖職者への寄付を増やしてくれるようにと促している¹⁵²。公的な異教のさまざまな競技という脈絡のなかで行われた一つの説教では、彼らには、贈り物を剣闘士たちに与えるか、それ

¹⁴⁷ 『説教』 356.10; NBA 34,266と268.

¹⁴⁸ このトピックについては、A.-M. La Bonnardière, 'Les Enarrationes in psalmos prêchées par saint Augustin à Carthage en décembre 409', *RAug* 11 (1976) 52-90 at 65-70; Brown, 'Augustine and a crisis of wealth', 13 with n. 26 (lit.) を参照。

¹⁴⁹ 『アウグスティヌスの生涯』 24.17; ed. Bastiaensen, 194; trans. Rotelle, 99.

¹⁵⁰ 『詩篇講解』 103 「説教」 3.10; NBA 27/1,718.

¹⁵¹ 『詩篇講解』 103 「説教」 3.10; NBA 27/1,718; trans. Boulding, WSA III/19,152: 'Da illi, sed multo magis illi.'

¹⁵² 『詩篇講解』 103 「説教」 3.12; NBA 27/1,722.

とも聖職者を支援するかという選択肢を設けている¹⁵³。この説教には、施しがこの段階でエヴェルジェティズムの伝統的な形態に取ってかわっていたかを考察するときに戻ることにしたい。「ピリピ書」4:11-14でのパウロというモデルによって提唱された自足というものが、アウグスティヌスが説明するように、すべての司教にとってそうであったわけではなく、自分たちを助けることができないそういった司教たちは、「羊の群れの乳」（「コリント前書」9:7を参照）、つまり、自分たちの会衆の財政的な支援をともにしなければならぬ。福音書を説教する者たちの僅かな支援は、福音書それ自体が安っぽく見え売りに出されていることを意味しているので、避けられるべきである¹⁵⁴。ヒッポでの彼の聖職者の共同体の場合には、贈り物が個別の構成員に対してではなく、その集まり全体に対して申し出されるべきである。「献金箱 (*gazophylacium*) にはりついていなさい。そうすれば、私たちは皆でそれを所有するでしょう」とアウグスティヌスは述べている¹⁵⁵。すでに言及したように、「使徒行伝」4:32とそこでの共有への強調は、アウグスティヌスの共同体における修道規則の核心にあった。

4.4 差別的、あるいは無差別的な施し

アウグスティヌスが多くのテキストで明らかにしているのは、すべての人がすべての人の隣人であり、共通する人間性によって親しいものだということである¹⁵⁶。たとえば、『説教』149.18では自らの聴衆に向かい、彼らの隣人、つまり、すべての人を愛するように強く勧めている¹⁵⁷。『説教』399.3.3においては、すべての人は隣人であると語っている¹⁵⁸。それ故、キリスト者の貧者に対して寛大であることが、キリスト者でない者たちから所有するものを奪うことの埋め合わせになると考えるのは間違いである¹⁵⁹。事実、キリスト者でない者たちが、教会の施しを要求することさえあるらしい¹⁶⁰。仮に私たちが、自分の敵に対してさえ善行を為すよう命じられるならば、ましてや、今までに知ることのなかった誰

¹⁵³ 『詩篇講解』102.13; NBA 27/1,608. La Bonnardière, 'Les Enarrationes in psalmos', 75頁を参照。

¹⁵⁴ 『説教』46.5; NBA 29,800.

¹⁵⁵ 『説教』356.13; NBA 34,270; trans. Hill, WSA 3/10,179: 'Gazophylacium attendite, et omnes habebimus.'

¹⁵⁶ 詳細については、R. Canning, *The Unity of Love* を参照。

¹⁵⁷ 同一の感性について、『キリスト教の教えについての説教』3.3; CCL 46,209-210を参照。

¹⁵⁸ NBA 34,736.

¹⁵⁹ 『説教』178.5.5; NBA 31/2,904. この議論については、Canning, *The Unity of Love*, 391.

¹⁶⁰ 『詩篇講解』46.5; NBA 25,1154.

かに対しても善行を為すべきではないか、と彼は論ずる。というのも、たとえその者が悪しき者であっても、敵というまでではないのだから¹⁶¹。不正な人に対して与えることさえ容認されている¹⁶²。この包括的な見方は、私たちが人の心を読むことができないので無差別に与えなければならないという彼の立場によって裏付けされつつ¹⁶³、人は罪人に対して施しを与えるべきではないというマニ教徒や他の者たちが持っていた考えに対して¹⁶⁴、アウグスティヌスが拒絶したことに何かしらをおそらく負っているのだろう。「無差別的」ということで彼が理解していただろうことは、マニ教徒が、マニ教徒でない者たちの手にあつたら、パンや野菜、あるいは水が汚されてしまうという恐れから、物乞いたちには食べ物ではなく金銭だけをもつぱら与えるようにと主張していたという点で¹⁶⁵、受け取る者の人格と施しという行為の特性、その両方に関わる。よってアウグスティヌスは、飢えている物乞いに金銭を与えることを嘲笑している。その金で食べ物を買う場所をどこか見つける前に死んでしまうかもしれない¹⁶⁶。このことから明らかなのは、憐れみという身体的作用と同様、施しには食べ物と金銭両方が含まれていたということである¹⁶⁷。

与えるということの無差別的な本質は、ときに予測のつかないものである。

実際、あなたが何かを沢山持っていてそれを持っていない一人の人に与えるべきである。… たまたま二人の人に会うとする。そのどちらが一層困っているとか、必要としていられるのでなければ、どちらに与えたらよいか、くじで選ぶよりほかに手がないだろう。このようにすべての人に心を配ることはできないのだから、たまたま他の人よりもあなたの近くにいるかぎり、誰であれその人がくじで選ばれたと見なすべきである¹⁶⁸。

¹⁶¹ 『説教』 Lambot 2; ed. C. Lambot, 'Nouveaux sermons de S. Augustin. I-III "De lectione Evangelii"', *Revue Bénédictine* 49 (1937) 263-265. この議論については、Canning, *The Unity of Love*, 393.

¹⁶² 『説教』 60.6; NBA 30/1,218と220. 以下の、マニ教的な立場に対しては、『説教』 164A (= Lambot 28) を参照。

¹⁶³ 『説教』 Lambot 2, ed. Lambot, *Revue Bénédictine* 49 (1937) 266.256-258.

¹⁶⁴ 『説教』 164A (=Lambot 28), passim; ed. C. Lambot, *Revue Bénédictine* 66 (1956) 156-158. Vismara Chiappa, *Il tema*, 189頁を参照。

¹⁶⁵ Ramsey, 'Almsgiving', 230 with n. 26を参照

¹⁶⁶ 『カトリック教会の習俗とマニ教徒の習俗について』 2.15.36と16.53; NBA 13/1,154, 156, 172, それぞれの箇所。この態度についてのその他の例については、Kamimura, 'The emergence of poverty', 286 n. 14 (with lit.) を参照。

¹⁶⁷ Finn, *Almsgiving*, 100頁もまた、『説教』 208.2に基づいて、この結論に至っている。

¹⁶⁸ 『キリスト教の教えについて』 1.28.29; NBA 8,40と42; trans. Hill, WSA 1/11,118-119: 'Sicut enim si tibi abundaret aliquid, quod dare oporteret ei qui non haberet, nec duobus dari potuisset, si tibi occurrerent duo, quorum neuter alium vel indigentia vel erga te aliqua neces-

またあるときには、アウグスティヌスは、キリスト者の貧者のためだけに世話するよう主張しているようにも思われる。「そこでは、善意を見せつける者たちの数が増えるように。なぜなら、確かに、信ずる者たちの数も増えているのだから」¹⁶⁹。

しかしながら、テキストの圧倒的多数においてアウグスティヌスは、与えることを無差別に提唱している。施しそれ自体の本質はまさに、彼にとっては寛大なものであり、無差別的である。『エンキリディオ』 *Enchiridion* 19.72では、長いリストがあげられていて、必要とする者に必要とされているものを与えること一切含んでいる¹⁷⁰。別の箇所では、彼は、貧者に食べ物を与え、裸の者には衣服をあたえ、教会を建設し、など富者たちが自分の財産を極貧の者に費やすべきだという助言を行っている。よき勧めという賜物、あるいは教えという賜物を持っている者たちは、他の者の気質もそのようにすべきであり、他の者は病の人々を見舞い、あるいは死者を弔うことができるようになる。要約すれば、「誰か他の者のために何かを行うことができない者を見つけ出すことはまったくもって難しいだろう」¹⁷¹。物乞いたちも互いを助けるのであり¹⁷²、また、修道的な共同体が貧者に分け与えることも期待されている¹⁷³。赦すこと、また平安を授けることは、両者ともに施しであり¹⁷⁴、ちょうど、ガラテヤの人身売買を行う者たちに食いものにされる囚われ人を身請けするようにである¹⁷⁵。進行中の議論に決着をつけるため彼は、異教徒や異端者でも憐れみという身体的作用を遂行するならば、ましてや、キリスト者にも期待されるべきだと結論づけている¹⁷⁶。施しに対するこのような網羅的な態度が、アウグスティヌスのマニ教的な禁欲主義——憐れみという身体のあらゆる作用が彼らの選ばれた者には禁じられていた——に対

situdine superaret, nihil justius faceres quam ut sorte legeres cui dandum esset quod dari...sic in hominibus quibus omnibus consulere nequeas, pro sorte habendum est, prout quisque tibi temporaliter colligatus adhaerere potuerit.'

¹⁶⁹ 『説教』 102.4.5; NBA 30/2,258; trans. Hill, WSA 3/4,75.

¹⁷⁰ NBA 6/2,560. Ramsey, 'Almsgiving', 241頁を参照。

¹⁷¹ 『説教』 91.9; NBA 30/2,130; trans. Hill, WSA 3/3,463-464: 'prorsus difficile inveniatur aliquis qui non habeat unde aliquid alteri praestet.'

¹⁷² 『詩篇講解』 36『説教』 2.13; NBA 25,784; 『詩篇講解』 125.12; NBA 28/1,130.

¹⁷³ たとえば、『カトリック教会の習俗とマニ教徒の習俗について』 1.31.67; NBA 13/1,98と100を参照。

¹⁷⁴ 『説教』 206.2; NBA 32/1,144; 『説教』 107A.8; NBA 30/2,348と350.

¹⁷⁵ 『書簡』 10*.7; NBA 23/A,84と86.

¹⁷⁶ 『詩篇講解』 83.7; NBA 26,1186.

する反動のうちどの程度までその根を持つか、それは明らかではない¹⁷⁷。

4.5 物質的な、また霊的な施し：適切な統合

アウグスティヌスの説教において、人々が困窮している人々に応ずる力の決定的な様相は、物質的な、また心理的な言葉を使って表現されている彼らのその力だった。つまり、勧告を与えること、あるいはそれを必要としている誰かに対する赦しという行為は、物質的な助力の提供以上に、それより大きくなくとも、等しい価値をとまなう施しであった。このような物質的な施しに対する心理的な施しの優先性が広がっているのは、自分が友愛の会食を催し、獄につながれている者に食べ物を運び、裸の者に衣服を与え、見知らぬ者を迎え入れていると言う者に尋ねるさいに認めることができる。「あなたは、自分が与えていると本当に思っているのでしょうか」¹⁷⁸。アウグスティヌスにとっては、贈与の意図が根本にあるように思われる。仮に贈与の精神が悪しきものならば、そのときには施しはその価値を減じることもあり得る¹⁷⁹。それ故、与える者と受け取る者双方について、与える者の内的なあり方が贈与の変化させる能力にとって本質的である。しかしアウグスティヌスは、物質的な施しの価値を減ずることはなく、実際、施しを二つの極を有するものとして、つまり、霊的であり物質的であり、そうしたものだとして説明している。彼は、そのことを非常にはっきりと述べる。

一つの施しは、あなたがあなたの兄弟の罪を赦すとき、心から行う施しである。もう一つの施しは、あなたが貧者にパンを与えるとき、物によって行う施しである。¹⁸⁰

物質的、また霊的な施しは、ここで二つの突起が立って一つの目的へ向かうものとして機能している。目的は、人間の救いに関わり変化させることである¹⁸¹。

施しに対するアウグスティヌスの註記のなかでもっとも鋭いものは、助力を与えることのできるある人が、直接的に、また個人的に困っている誰かを助けようとする際に生ずる個人のあいだの融合について説明されるときに見出される。ア

¹⁷⁷ Fitzgerald, 'Mercy, works of mercy', 560頁を参照。

¹⁷⁸ 『説教』 178.4; NBA 31/2,902; trans. Hill, WSA 3/5,291: *Dare te putas?*

¹⁷⁹ Kessler, in Kessler and Krause, 'Eleemosyna', 762頁を参照。

¹⁸⁰ 『説教』 58.10; NBA 30/1,194; trans. Hill, WSA 3/3,123-124: 'Una eleemosyna est, quae fit de corde, quando fratri tuo dimittis peccatum. Altera eleemosyna est, quae fit de substantia, quando pauperi panem porrigis.'

¹⁸¹ 『詩篇講解』 103 「説教」 3.10; NBA 27/1,716-720 と 『詩篇講解』 118 「説教」 12.2; NBA 27/2,1208-1212を参照。

ウグスティヌスはその過程を説明しようとして困惑するが、その過程を一つの現象として観察する。その二人の人の身体的なつながりが決定的である。

私の兄弟たちよ、どのようにして、何かを現実に貧者に手渡す人の精神が、ある種の共通の人間性と弱さへの思いやりを経験しているのか、私には分からない。その時に、持っている人の手は現実に、必要としている人の手のうちに置かれている。一方が与えていて、もう一方が受け取っているといっても、注視されている一方と、注視しているもう一方は、本当の関係のうちに結ばれている。¹⁸²

アウグスティヌスは、こうした観察に基づきさらに註記して、人間性を結合しているのは結局のところ、苦難ではなくて人間性そのものだと述べる¹⁸³。つまり、一人の人が身体の動作をともなって困っている人に手を差し出すとき、二人のあいだで生じている結びつきの瞬間は、人間がもっとも密接に結び合わされている場所であり、すべての人間性に共通するものをもっとも親密に認められる。人々のあいだのこの「結びつき」という記述は、アウグスティヌスの三位一体の神学の反響であり、彼はその神学において、父と子の関係性を聖霊によって「結ばれて」いるものと語る¹⁸⁴。私たちは、アウグスティヌスの三位一体の神学を、彼の社会思想のうちに位置づける、あるいはその逆のことはなく、おそらくは彼が、直接的に他者の必要をお互いに注視するときには、三位一体の愛（そのペルソナ個々とは区別される）をもっとも密接に反映できる人間相互のつながりを可視的にしているということを見て取れば充分だろう。与えることと受け取ることのあいだの複雑な関係性に関する彼の分節化はさらに、与える者の意図がもっとも重要だといっても、贈与のプロセスが内的な自己を変化させることを可能にする、ということの意味している。施しの贈与が、恵みと愛の可能性を増すかぎり、そして、与える者と受け取る者同士、また相互に恵みと愛の流入を増すかぎり、その際に彼の見るところ、施しは適切に与えられている¹⁸⁵。

自己認識と価値の問題を再度構成することが、富裕と貧困のあいだの関係性についてのアウグスティヌスの説教をもっとも特徴づける。彼は、富に対する人間の神学的な気質について論じ、聴衆たちが自分たちを、また互いを結びつけるこ

¹⁸² 『説教』 259.5; NBA 32/2,840: 'Nescio quomodo, fratres mei, animus eius qui porrigit pauperi, velut communi humanitati atque infirmitati compatitur, quando ponitur manus habentis in manum indigentis. Quamvis ille det, ille accipiat, junguntur minister et cui ministratur.'

¹⁸³ 『説教』 259.5; NBA 32/2,840; trans. Hill, WSA 3/7,181.

¹⁸⁴ 『三位一体論』 5.11.12; NBA 4,250-252.

¹⁸⁵ Kessler, in Kessler and Krause, 'Eleemosyna', 764-765頁を参照。

とができるような自己認識に関する彼の新しい枠組みを、修辞を用いて提供している。だが、私たちには、この再構成が彼の聴衆に対してどれほど効果的だったか、その程度について示されることはない。私たちは、以下において、修辞と現実のあいだの関係性という問題に向かいたい。

4.6 使用／享受、「貧者と愛の正しい秩序」

アウグスティヌスは、人間が互いをどのように扱うべきかに関する包括的な枠組みにおいて、貧者が現に存在している以上に彼らを存在していないものとしてしている。『キリスト教の教えについて』においてアウグスティヌスは、人があらゆる人を愛するのと同じように、自分の隣人を愛するべきかを尋ねる。それは、世界内の対象の適切な使用と享受 (*uti/frui*) に関する議論の一部を構成している¹⁸⁶。ここでアウグスティヌスが、そういった広範囲にわたる議論において明示的に貧者に言及していると期待されるかもしれないのだが、そうはしていない。代わりに彼は、「運命の輪の回転によって」¹⁸⁷、私たちに一層密接に結びつけられている者たちを私たちが愛すべきだと語っている。アウグスティヌスは、その議論を、「愛の秩序」についてのもの——誰が、また何が第一に愛されるべきなのか、そしてどのようにしてか——へと構成することによって、捨象された人間に関する普遍化された疑問と、どのように私たちが、私たちの目の前の社会環境における人間に接近すべきかについての疑問が支配的であるような枠組みを組み立てる¹⁸⁸。アウグスティヌスは、神を前にする自己調和についての話に転じている。人間は、摂理と自分を直接に取り囲むもののなかで救いの賜物を得るためどのように生きているか、神の愛と隣人愛は、「貧しい」者の自己認識に根拠づけられているのではなく、愛の特質とその現われに根拠づけられている問題である。

『キリスト教の教えについて』における貧者の不在は、アウグスティヌスの思弁的な諸著作での傾向を反映している。社会現象としての貧困への言及は、抽象

¹⁸⁶ *uti/frui*、「使用と享受」という区分についての信頼できる註解については、O. O'Donovan, 'Usus and fruitio in Augustine's *De Doctrina Christiana I*', *Journal of Theological Studies* NS 33 (1982) 361-397頁を参照。

¹⁸⁷ 『キリスト教の教えについて』1.28.29; NBA 8,40-42; trans. E. Hill, *Augustine. Teaching Christianity* (New York 1996) 118: *quasi quadam sorte*.

¹⁸⁸ この点を反映しているものとして、『書簡』243.12; NBA 23, 832と『書簡』262.9; NBA 23,914を参照。そこでアウグスティヌスは、自分の配偶者と施しについて論ずるべきだと述べ、さらに、最初に自分の家族に施しを与えるべきであり、その後でより世間一般の貧者に与えるべきだと語っている。

的な仕方教えや、あるいは神学についての論点を言表するという彼の関心事にとって、常に従属的である。たとえば、『三位一体論』における負債に関する彼の言及を取り上げてみよう。そこで彼は、救済の歴史を、キリストが自身負っていない負債を支払ったというメタファーへ変換する¹⁸⁹。だがこれが、古代末期における負債回収という現象について私たちに何事か語っているとして、アウグスティヌスがもっとも詳しく語っていることである。私たちはただ彼の著作に基づき、執行官たちによる負債回収が、人々が、彼のメタファーの使用に基づいて自分たちの司教の考えに関与できるほど充分一般的なものだったと想定するにすぎないだろう。アウグスティヌスは、それによって、古代末期の北アフリカの負債を回収する税務官吏を照らし出す視点を私たちに授けてくれるわけではない。同じように、パウロが聖書において語るような寡婦の現象にアウグスティヌスが言及する際、それを人間の親切さという気質にかなった行動のメタファーへ転換している。というのも、『三位一体論』のアウグスティヌスにとって、「テモテ前書」におけるパウロの議論での「寡婦の息子たち」とは、キリストに信をおく魂によって遂行される内的な慈愛の行動だからである¹⁹⁰。物質的な貧者、あるいは社会的に剥奪されている者への言及は、アウグスティヌスの思弁的な、また理論的な教説に関わる著述のなかでは、ただ通りすぎるだけのものである。さらに充分にその主題へ注意を向けても、それはただ、より大きな修辞上の目的の部分として、理論的な、あるいは心理的なメタファーをもたらすにすぎない。社会の解放などがけっしてその目的ではない。

4.7 貧困についての気質に関わる思考

アウグスティヌスの気質に関わるアプローチの主たるカテゴリーは、人々が自分たちの富者に対して持っている結合の形態、あるいはそれ以外の手立てである。理想としては、富者は自分の富からは離れていなければならない、それから速やかに立ち去ることができなければならない¹⁹¹。富の所有という論点は、所有している富によってどれだけ所有されているかという点によって支配されている¹⁹²。富を含む、世界内の対象への悪しき愛は、愛する者自身を墮落させう

¹⁸⁹ 『三位一体論』 4.13.17; NBA 4,202-204; 13.3.6; NBA 4,512-514; 13.14.18; NBA 4,538-540.

¹⁹⁰ 『三位一体論』 12.7.11; NBA 4,476-478.

¹⁹¹ 『書簡』 157.4.34; NBA 22/2,626-628.

¹⁹² 富者の自身の富に対する問題と、物質的に過度に富裕であることから一般的に生ずる心理的な問題に関するアウグスティヌスの説明について、『説教』 36.4; NBA 29,642; 『説教』 50.3; NBA 29,948;

る¹⁹³。これに対するアウグスティヌスの解決は、個人は、富を所有されるべきものとしてよりも、むしろ使われるべきものと見ることによって、自分たちの財産に対して自身を再構成すべきだというものである¹⁹⁴。これによって人々は、富に対する自らの関係性を変更することができる。彼は、その再構成を会話において描き出し、人によって欲求される黄金を貪欲な仕方でも人を誘惑するものと描写し、一方では、その人が自身のために応答し、態度の変更を示すことができると見なしている。「黄金は私に何と言っているのか。「私を愛してくれ」。だが、神は何と応答するようにと私に言っているのか。「私が、あなたを使うようにさせてほしい。あなたを使うようにすれば、あなたは私を所有することなく、あなたは、私をあなたから切り離すのだ」¹⁹⁵。

アウグスティヌスは、気質における区別が、どのように魂に対して富が効果を及ぼすことができるかを理解するにあたって決定的であることを認めている。金銀は、「守銭奴の魂に苦痛をもたらすが、しかし情け深い者たちの配慮には大きな助けである」¹⁹⁶。したがって、貪欲とそれが表現する魂の状態は、究極的には富への悪しき気質を支配するものである。寛大さや、親切心、そして、物質的な所有物を分かち持とうという意欲は、それとは対照的に、他の人間たちに向かう、また世界のなかの諸対象に向かう愛の適切なかたちに根拠づけられている。

それ故、金銭と所有物は、アウグスティヌスにとって倫理的に中立である。彼の思索において重要な要素は、どのように人がそれらのものへと、またそれらに割り当てられる使用へ傾向づけられているかである。アウグスティヌスにとって、物質的に富裕な者が所有する事物はそれ自体では、またそれ自身によって善いものだが、人を善く「させる」ことはない¹⁹⁷。彼は、神が悪しき人々に富を与

『説教』 50.6; NBA 29,950-952; 『説教』 53A.2; NBA 30/1,106-108 (富者の心配について); 『説教』 53A.4; NBA 30/1,108-110; 『説教』 65A.3-4; NBA 30/1,324-326; 『説教』 107A.4; NBA 30/2,344. ここでは自分の富によって所有されているという概念への直接的な言及がある。『説教』 68.10; NBA 30/1,374-376と『説教』 68.11; NBA 30/1,376. ここでは、貪欲さの際限のなさについて語っている。所有していることの苦痛は、アウグスティヌスの著作全般で反復される主題である。

¹⁹³ 『説教』 65A.1; NBA 30/1,322.

¹⁹⁴ O'Donovan, 'Usus and fruitio', 361-397頁を参照。

¹⁹⁵ 『説教』 65A.3-4; NBA 30/1,324-326; trans. Hill, WSA 3/3,200: 'Quid mihi dicit aurum? Ama me. Sed Deus mihi quid? Utar te, et sic utar te ut non teneas me et separeas a te.'

¹⁹⁶ 『説教』 50.3; NBA 29,948; trans. Hill, WSA 3/2,345: 'Avarus inde torquetur, inde misericors adiuvatur.'

¹⁹⁷ 『説教』 61.2; NBA 30/1,230-232; 『説教』 301A; NBA 33,472-489. このアウグスティヌス的な思考の基準は、『告白』における新プラトン主義との出会いに関する記述にもっとも明瞭に説明されている。そこで彼ははじめて、すべての物質的な事物はそれ自体で、それ自身によって善いものだ

えるのは、その結果として善き貧者が、他にもさまざまな善いことを約束しているにも関わらず、その富が追い求められるべきものだと考えないようにするためではないかとさえ皮肉を言う¹⁹⁸。物質的な事物が倫理的に中立であるという自身の観点をいっそう強固にするため、アブラハムとラザロの物語（「ルカ福音書」16:19-31）について鋭く論じ、富裕な男が慈しみについての自身の失敗のため非難されたというその物語において、アブラハムとラザロを抑制しているのは、彼らの内的な敬虔さだと語っている。結局のところ、アブラハムは彼自身富裕な男だった。だが、神を愛し、また貧者について心配していた。ラザロの物語における富裕な男の過ちは、彼への永遠の非難を保証するような貧者についての心理的な配慮を持つことにあった。アウグスティヌスは、もしもその物語の富裕な男が貧しい男の窮状にほんの少しでも注意を向けてさえいれば、その時には、彼もまたアブラハムの懷に座を受け継ぐことになっただろうと述べる¹⁹⁹。

同じようにアウグスティヌスは、善い人々、悪しき人々が、同時に富裕で貧しいと言う²⁰⁰。さらに、物質的な貧困が天の王国へ入ることを保証するのでもないと言ふ²⁰¹、またいっそう力強く、「富者のあいだに数えられる多くの者たちが天の王国へと入ることになるだろう。そして、貧者のあいだに数えられる者たちのなかで、多くの者たちが永遠の火のなかに入ることになるだろう。彼らが富において豊かであったからではなく、貪欲さにおいて火にかけられるからである」²⁰²と語る。アウグスティヌスの富者と貧者に対する非難は常に、それぞれが持つ傲慢という罪の観点からなされる。彼は、物乞いは自身尊大であるかもしれないが²⁰³、高慢である富裕な男は、この高慢さのために自分たちの富によって相互に所有されている者である²⁰⁴と述べる。これらの人々は両者ともに神を必要とし、神との救済を授けられる関係性を確立するに際して特徴づけられるのは、

が、それは神がその創造主だからだということを知る。『告白』7.12.18; NBA 1,200-202を参照。

¹⁹⁸ 『説教』105A.1; NBA 30/2,302-308.

¹⁹⁹ 『説教』15A.5; NBA 29,278-280. 『説教』299E.3; NBA 33,432-434と『書簡』157.4.23; NBA 22,614を参照。

²⁰⁰ 『説教』18.1; NBA 29,342-344.

²⁰¹ 『説教』346A.6; NBA 34,96-98.

²⁰² 『説教』346A.4; NBA 34,94; WSA 3/10,74: 'Nunc vero et de numero divitum multi ituri sunt in regna caelorum, et de numero pauperum multi ituri sunt in ignem aeternum, non qui sit dives facultate, sed quid ardeat cupiditate.'

²⁰³ 『詩篇講解』48「説教」1.3; NBA 25,1196-1198.

²⁰⁴ 『説教』53A.4; NBA 30/1,108-110.

この関係性の前提条件となる高慢の欠如である²⁰⁵。アウグスティヌスにとって不可欠な変容とは、自分の物質的な豊かさをすみやかに捨て去ることを可能にする内的なものであり、より強烈に言えば、物質的、あるいはその他の手段によって、他の個人の貧しきや苦境に応じることを可能にする内的なものである²⁰⁶。

5 自発的な清貧に対するアウグスティヌスの態度

アウグスティヌスが、パウリヌスとテラジア、ピニアンとメラニアのような著名な修道者たちの自発的な清貧を賞讃していると思われるかもしれないが、概して彼は、聴衆や読者に向けて彼らの所有物を一切放棄するよう促すのではなく、むしろ気質に適う貧困を勧めている。これが特徴的なのは、『説教』125A.4であり、そこでは、トビトが自分の息子トビアに与えた忠告について言及している。「お前の財産に応じて、豊かなら豊かに施しをきなさい。たとえ少なくとも少ないなりに施すことを恐れてならない」（「トビト記」4:8-9）。彼はつづけて、

彼は、「すべてを施しなさい」とは言わなかった。トビトが勧めたことを行いなさい。多くの人々はまた、別のことを行ってきた。彼らは、自分たちの持ち物すべてに別れを告げて、自分たちの持ち物を貧者にすべて与えて、自分たちには何も残さなかった。何も残さなかったというのを本当だと思うだろうか。それでは、神はどこにいるのか。²⁰⁷

この論証には暗黙のうちに、人目を惹きつける貧困は、神を敬う生活には何の保証ももたらさないということが含まれている。だが、この説教を行った年代を特定できないので、私たちは、マニ教的な立場を拒絶しているのか、あるいはペラギウス派の立場を拒絶しているのか、それとも両者ともに拒絶しているのかを確かめられない。他の箇所では彼は、神の貧者それ自身となるよりもむしろ、自分の所有するものすべてを貧者にすすんで分配しようとする人々がいると主張している²⁰⁸。マルクス・レグルス、ルキウス・ヴァレリウス、またクインティウス・キンキナトゥスといったような、ローマの昔からの自発的な清貧の *Exempla* は、キリスト者が自分たちの完全な財産放棄についてうぬぼれるべきでないということ

²⁰⁵ 『説教』85.3; NBA 30/1,650-652.

²⁰⁶ これと同じ論点については、Kessler, in Kessler and Krause, 'Eleemosyna', 762頁と764-765頁を参照。

²⁰⁷ NBA 31/1,104; trans. Hill, WSA 3/4,267: '...[n]on dixit: Totum da. Hoc facite quod Tobis monuit. Multi et illud fecerunt; omnia sua dimiserunt, omnia sua pauperibus donaverunt, nihil sibi reliquerunt. Nihil, putamus? Et ubi est Deus?' 『説教』88.16.16; NBA 30/2,68を参照。

²⁰⁸ 『詩篇講解』71.3; NBA 26,790.

を論証するため引かれてきた²⁰⁹。『説教』15.9においてアウグスティヌスは、自発的な清貧を喜んで受け入れ、貧者たちが引つつかんで奪おうとするほんの少し前に、間近に見える貧者に自分たちの所有物をすべて与えた少数の者の存在に言及している²¹⁰。同じく少数なのは、すべてを放棄したり殉教さえするような英雄的な徳行を実践する者たちであり、さらに少ないのは、そうしたことを立派に周到に実践する者たちである²¹¹。こうした人々すべてがまったくの少数派だったことは明白であり、一般の者たちがこれらの範に倣うようにという指示はなかった。反対に、研究者が近年論じているように、アウグスティヌスは、上流の人々によって信奉されたような過激な自発的清貧に反目していた。なぜなら、奴隷や、借地人、また使用人の値を引き下げることによって、社会的な構造を取り壊してしまう恐れをはらんでいたからである²¹²。

しかしながら、アウグスティヌスの司教館に付属していた修道的な共同体という文脈での自発的な清貧はまったく別の問題であって、それは二つの驚くべき説教、仲間の修道士に向けてその生涯の終わりにあたって行われた話によって実証される。『説教』355.2、425年に行われた話のなかで²¹³、彼は修道士たちに、「使徒行伝」4:32「一人として自分の所有するものを自分のものだと言う者はなく、すべてが共有であった」を思い出させて、彼自身がヒッポに到着したときには僅かな土地財産を売り払ってしまったので、自分が着ていた衣服のほかは何も持たなかったということを指摘している。彼は、自分の修道士たちすべてに、同じく所有物をすべて放棄するよう期待しているのだが、しかし司祭のヤヌアリヌスがそうしたように見えながらも、実際はいくばくかの金銭を持ち続け、それが自分の娘のものだと言ったのだった。ヤヌアリヌスの死後判明したのは、自分の娘と息子ではなくて、教会を遺産相続人としていたことだった。しかしアウグス

²⁰⁹ 『神の国』5.18.1-2; NBA 5/1,372-378.

²¹⁰ NBA 29,266と268.

²¹¹ 『信ずることの効用について』*De utilitate credendi* 17.35; NBA 6/1,236と238. Kamimura, 'The emergence of poverty' を参照。

²¹² C. Lepelley, 'Facing wealth and poverty: defining Augustine's social doctrine', Saint Augustine Lecture 2006, *AugStud* 38 (2007) 1-17 at 13-16, with lit. においてまとめられている。Anicia Juliana と彼女の禁欲主義の受け入れについては、G. D. Dunn, 'The elements of ascetical widowhood: Augustine's *De bono viduitatis* and *Epistula* 130', in W. Mayer, P. Allen, and L. Cross (eds), *Prayer and Spirituality in the Early Church*, 4. *The Spiritual Life* (Strathfield 2006) 247-256頁を参照。

²¹³ NBA 34,244-257. 年代については、Hill, WSA 3/10,171 n. 1と182 n. 1. ヤヌアリウスについては、de Salvo, 'Eredità e donazioni in Agostino', 309-311頁を参照。

ティヌスは、その遺産の受取を拒絶し、代わりにその遺言を彼の子供たちに変更する仕事を自身で引き受けた（第3節）。つぎに彼は、自分の共同体に告示を張り出し、出し惜しみされるかもしれないものを一切売却して、その売り上げを配分する、あるいは共同体の基金に寄付する期限を修道士たちに設定している（第6節）。元来この共同体では、自発的な清貧の受けいれを拒んだ聖職者が、アウグスティヌスによってその資格を剥奪されていた。彼はその規則を緩めようとしていて、抵抗する者たちには、ただちに立ち去るならば彼の共同体の外では聖職者の地位に留まることを許可しようとしている（第6節）。この説教は、近い将来この問題について引き続いて考えることを約束して閉じられている（第7節）。

この約束が守られたのが、『説教』356であり、426年の始め頃に行われている²¹⁴。ここで司教は、助祭や司祭の修道的な貢献について吟味を行い、彼らのうちのある者を名前を挙げて言及している。彼らが自分たちの所有物を放棄していることに、あるいはそうしようとして少なくともその途中にあることには満足しているのだが、彼らに対して辛辣な最後通牒を突きつけている。彼は、その共同体のある構成員が依然として財産を所有していることを見つけたにちがいない。彼らは、修道院と聖職者の地位から追い払われることになるだろう（第14節）。

これら二つの説教の厳格な調子と自分たちの修道士のなかでの清貧に対するアウグスティヌスの絶対的な要求は、別の箇所での気質にそった貧困への要求と相反する対比を示している。自分の修道士に対する妥協の余地のない規則があり、一方では、会衆に対するより思いやりのある穏健なアプローチが存在している。

6 アウグスティヌスの社会的な見方

アウグスティヌスがそうであったように、パウロ書簡に基づいたいかなる神学的な枠組みも、ただちに現状の変革を認めることはない。自分たちの主人にしたがうようにという奴隷に対するパウロの命令、また、キリスト者の主人と奴隷が対等であるなどとうぬぼれるなという命令は²¹⁵、アウグスティヌスの『修道規則』へも投影されている。ここで、より貧しい修道士たち、彼らのうちのある者はたしかに以前奴隷だったのだが、「以前には近づこうなど思ってもみなかった人々の仲間いま加わっているのだから、威張って体裁ぶる」²¹⁶べきでないと言

²¹⁴ NBA 34,258-277. 年代については、Hill, WSA 3/10,171 n. 1と182 n. 1を参照。

²¹⁵ 「エペソ書」6:5、「テモテ前書」6:1-2.

²¹⁶ 『修道規則』1.6; NBA 7/2,30; trans. Canning, *The Rule of Saint Augustine*,12: 'Nec erigant cervicem, quia sociantur eis ad quos foris accedere non audebant.' 『修道士の働きについて』

われている。同じく女性の修道士たちは、高貴な女性たちのほうが、修道院ではより貧しい姉妹たちよりも立派な食事や衣服、寝台を持つことが許されていると言われていて、そして、高貴な女性が敬意を払われているのでなく堪え忍んでいるのだから、このことによって貧しい姉妹たちが気をくじくべきでないと言われる。「そうでなければ、その修道院においては可能なかぎり、高貴な女性が働く者となり、貧しい女性が優美で繊細な淑女になるという堪え難い転倒が生じてしまうことになろう」とアウグスティヌスは説明する²¹⁷。また、『修道士の働きについて』25.32では在俗の兄弟たちについて、同じように描写されている²¹⁸。彼はまた、「詩篇」への註解において聴衆たちに指摘する。「そこでご覧の通りパウロは、奴隷たちを自由民の男女へ変えようとはしておらず、悪しき奴隷を善き奴隷へ変えている」²¹⁹。たしかに、奴隷制と貧困はまったく次元が別である²²⁰。だが奴隷たちは、資産を構成するもののなかの正当な一部であり、初期キリスト教文学のなかのどこにあっても私たちは、キリスト者に対して彼らを譲渡するようという命令を見出すことはない²²¹。それ故、私たちは、古代末期の社会が効果的に運用されるにあたって、貧者が奴隷と同様必須のものであると推論することができる²²²。私たちがアンブロシウスに投影すべきほどに、アウグスティ

De opere monachorum 25.33; NBA 7/2,584 参照。

²¹⁷ 『書簡』211.9; NBA 23,518; trans. Teske, WSA 2/ 4,23: 'ne contingat detestanda perversitas, ut in monasterio, ubi, quantum possunt, fiunt divites loabriosae, fiant pauperes delicatae.'

²¹⁸ NBA 7/2,580 と 582.

²¹⁹ 『詩篇講解』124.7; NBA 28/1,98; trans. Boulding, WSA 3/20,63: 'Ecce non fecit de servis liberos, sed de malis servis bonos servos.'

²²⁰ J.-M. Carrié, 'Nil habens praeter quod ipso die vestiebatur. Comment définir le seuil de pauvreté à Rome?', in F. Chausson and É. Wolff (eds), *Consuetudinis amor: fragments d'histoire romaine (IIe-VIe siècle) offerts à Jean-Pierre Callu* (Rome 2003) 71–102 at 40; Allen, 'Challenges in approaching Patristic texts', and P. Van Nuffelen, 'Caring for the community. Imperial munificence and care for the poor in late antique panegyric' ('The answer of ancient ethics to slavery tends to be the freedom of the soul, not social change'), both in Leemans, Matz, and Verstraeten (eds), *Patristic Social Ethics*, forthcoming [両者共に、'Challenges in approaching Patristic texts'; 'Caring for the community. Imperial munificence and care for the poor in late antique panegyric', in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Reading Patristic Texts on Social Ethics. Issues and Challenges for Twenty-First-Century Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, 2011) として刊行] を参照。

²²¹ アウグスティヌスの場合について、G. Corcoran, *St. Augustine on Slavery*, *Studia Ephemeridis Augustinianum* 22 (Rome 1985) を参照。

²²² Holman, *The Hungry are Dying*, 32. Brown, *Poverty and Leadership*, 87頁は、後期ローマ帝国における、「社会の非対称性についての率直な是認」について語っている。

ヌスのモデルは社会的な変革に対する時代錯誤の関心しかもたず²²³、私たちは、ヒッポの司教が社会を通例の仕方に変革する意図しか持っていなかったと信ぜざるを得ない²²⁴。両者はともに、むしろ彼らの世界に存在したように、「社会の諸関係のさまざまな危険地帯をやり過ごすこと」に関心を有していた²²⁵。アウグスティヌスは社会の変革者でなかった。貧困についての彼の所見のうちには何ら、そういう者だったということが見出されない。アウグスティヌスの集成のなかの『説教』367.3は、研究者のなかにはその真性性に疑いを持つ者がいる一方で、貧困に関するこうした社会的な見方をまとめている。「富者と貧者は互いに対立する二つの存在である。しかしなお、彼らは互いを必要とする二つの存在である。…富者は貧者のために作られたのであり、貧者は富者のために作られたのである」²²⁶。貧困がさらなる幸福を運んでくるという古代末期のキリスト教的な修辞はまた、アウグスティヌスによっても用いられ²²⁷、彼は、貧困が富者にとっての機会であり、あるいは試練だと述べている²²⁸。相続した遺産はただ *datum* [与えられたもの] である。「富裕な両親のもとに生まれた者は富裕である。そうありたいと欲したゆえに富裕ではなく、多くの世代を受け継ぐ者だからである」²²⁹。そのときにはおそらく、受け継いだ貧困もまた同様に、*datum* であり、とりわけ私たちが、豊かになりたいと欲することが貧者にとって罪であるという

²²³ McLynn, *Ambrose of Milan*, 249. S. R. Holman, 'The entitled poor: human rights language in the Cappadocians', *Doctores Ecclesiae*, in *Pro Ecclesia* 9/4 (2000) 476-488 (教父のテキストについての時代錯誤の読解の危険性について) を参照。

²²⁴ よって、私たちはたとえば、アウグスティヌスが自分の所見をその修道的な社会の見通しに限っていなかったにしても、「よりよい社会へと向かって前進するための他者との共有」(*The Rule of Saint Augustine*, 52) をアウグスティヌスが提唱していたとみる van Bavel には同意しない。

²²⁵ McLynn, *Ambrose of Milan*, 299, relying on Possidius, *Vita Augustini* 27.4; ed. Bastiaensen, 198と200。

²²⁶ NBA 34,466; trans. Hill, WSA 3/10,297: 'Dives et pauper duo sibi sunt contraria: sed iterum duo sibi sunt necessaria...Dives propter pauperem factus est, et pauper propter divitem factus est.' 同じような考えは、Paulinus of Nola, *Ep.* 32.21; CSEL 29,296に見出される。D.J. MacQueen, 'St Augustine's concept of property ownership', *RAug* 8 (1972) 187-229 at 188 「だけれども、アウグスティヌス以上に、社会的・政治的な秩序の「贈与」について、いっそう鋭敏に対応する者はいない」を参照。

²²⁷ 『説教』14.6; NBA 29,248. 『説教』36.4; NBA 29,642を参照。

²²⁸ たとえば、『詩篇講解』124.2; NBA 28/1,90; 『説教』39.6; NBA 29,716. Allen, 'Challenges in approaching Patristic texts' を参照。

²²⁹ 『説教』61.9.10; NBA 30/1,238; trans. Hill, WSA 3/3,146. 『詩篇講解』38:19; NBA 25,918; trans. Boulding, WSA 3/16,190 「仮にあなたが貧しいならば、あなたが富裕になる確証はない。仮にあなたが教育を受けていないならば、教えられることについて確かでありえない。仮にあなたが虚弱であるならば、あなたの力強さを回復できるのかは確かではない」を参照。

アウグスティヌスの判断を考慮にいれるならば²³⁰、そうなのである。その当時広がっていた、挿話的な、構造的な、地方に固有な、さまざまに絡み合った、あるいは流行の貧困について、私たちが瞥見することはほとんどないと言わざるをえないし²³¹、いかなる箇所でもアウグスティヌスは、貧者のために彼らの社会的な立場を恒久的に緩和しようとか、「社会的な力」を提唱することを言い出していない。裁判官としての彼に向かって *audientia episcopalis* で表ざたになるような貧者に対する不正義は、「市民の」法にしたがって処理されたのであり、たとえば、アウグスティヌスの *bête noire*〔鬼門〕であるフッサラの司教アントニヌスによる被害者の場合、彼らは、「金銭、家財、家畜、収穫物、材木、さらには建築用の石材を失った」²³²。私たちは、ヒッポの司教の浩瀚な著述のなかで一つかみの具体的な例を示されているだけであり、その大部分はその書簡である。ここでは彼は、貧者、あるいは虐げられた者のため調停しているが、そうでなければ、法と秩序のために行動している²³³。レペッリイはまさしく、アウグスティヌスの「もっとも歴然とした不正をとめるための日々の活力に溢れた活動が、効果的であり有益であったのだが、彼はきわめて明確に、そうした活動が深刻な不公平や貧困化を含むそうした不正の多くを矯正することができなかったのを知っていた」と結論づける²³⁴。現状を変革するには司教が無能であるという事態に直面して、アウグスティヌスは代わりに、社会的な不均衡を生み出している心理的なメカニズムを再評価することに会衆が取り組むよう繰り返し試みている。この点は、次節でより詳細に論じられるだろう。パトラジアンやブラウンのよう

²³⁰ 『説教』14.8; NBA 29,250.

²³¹ こうした用語については、A. R. Parkin, 'Poverty in the early Roman empire: ancient and modern conceptions and constructs', PhD Diss. (Cambridge 2001) 7-8と11-12頁、その修辞と現実については、本論文(7.1-2)〔46-62頁〕を参照。

²³² 『書簡』20*.6; NBA 23/A,164と166; trans. Teske, WSA 2/4,303: 'Pecuniam, suppellectilem, vestem, pecora, fructus, ligna, denique et lapides...ammittebat.' 司教裁判については、Uhalde, *Expectations of Justice*, 29-43, with lit.

²³³ これらは、C. Lepelley, 'Le patronat episcopal aux IVe et Ve siècles', in Rebillard and Sotinel (eds), *L'évêque et la cité*, 17-33 at 31-32; idem, 'Saint Augustin et la voix des pauvres. Observations sur son action sociale en faveur des déshérités dans la région d'Hippone', in P.-G. Delage (ed.), *Les Pères de l'Église et la voix des pauvres. Actes du IIe colloque de La Rochelle 2, 3 et 4 septembre 2005* (La Rochelle 2006) 203-216; idem, 'Facing wealth and poverty', 16-17によって議論されている。R. Dodaro, *Christ and the Just Society in the Thought of Augustine* (Cambridge 2004)の著作は、貧困のような経験的な論点についてというよりは、正義の社会についての神学的、また哲学的な読解に関わっている。

²³⁴ Lepelley, 'Facing wealth and poverty', 17. また、司教裁判における多くの司教が、効力を発揮できなかった点に関して、Uhalde, *Expectations of Justice*, 38-43頁を参照。

に²³⁵、施しがエヴェルジェティズムについてのさまざまな伝統的な形態に取って代わったという断言する研究者に関して、私たちは、430年にアウグスティヌスが死去するときまでヒッポでは、ギリシア・ローマの贈与のシステムとキリスト教的なエヴェルジェティズムが依然並行して行われていたことを示しておきたい²³⁶。市民の競技に対してよりも救貧に資金を提供するようにという勧めは、アウグスティヌスの会衆のあいだに、一つの仕組みを別の仕組みに取って変えようとするよりまえに、裕福な者たちがまだかなりの道を歩まなければならなかったことを示しているのである²³⁷。

7 修辞と現実

アウグスティヌスのさまざまな著作に現われる貧者が、現実の存在だったのか、それともほとんどが修辞上構成されたものなのかという疑問は、古代世界における貧困全般を私たちがどのように扱うかということに影響する。私たちのテキストは、古代末期の社会的に剥奪されている者たちが被った具体的な苦難に関する証言なのか、それとも、アウグスティヌスのような文学上の才能に恵まれた者による修辞を尽くした嘆願に対してより説得力を持たせる証言なのか。アウグスティヌスがはっきりと関心を表明している「貧しい」者たちが、修辞上の図式のなかでその役割を果たしているのか、そして、その修辞上の構成が描き出しているテキストの背後に存在する、それが何であろうと現実が再発見されうるのか、こういったことを問うことができる。本論文のこの節では、修辞家アウグスティヌスと社会についての註釈者アウグスティヌスとを区別することで、方法論と一定の所産の双方について明らかにするよう試みる。その方法と所産が分かちがたく関連づけられているかぎり私たちは、アウグスティヌスの著作における「貧しい」者たちについての彼の註釈の適切な価値をいかに評価するかという問

²³⁵ E. Patlagean, *Pauvreté économique et pauvreté sociale à Byzance, 4e-7e siècle* (Paris 1977); Brown, *Poverty and Leadership*. この点を仮定しているのは、また、たとえば、Krause, in Kessler and Krause, 'Eleemosyna', 759-760頁と Lepelley, *Les cités*, 1, 298-318頁、たとえば、301頁において彼は、ローマの市民生活にとって必須であるアフリカでの施与の伝統が、4世紀の終わり頃まで維持されていたことをはっきりと認めている。

²³⁶ これはまた、Krause, in Kessler and Krause, 'Eleemosyna', 759-760頁により想定されている。

²³⁷ さらにまた、La Bonnardière, 'Les Enarrationes in Psalmos', 71-75. 社会の仕組みをキリスト教化しようとするアウグスティヌスの努力について述べる Lepelley, 'Facing wealth and poverty', 11-12頁を参照。

題を提出するだろう²³⁸。それ故、私たちはここで、彼の二つの著作、『キリスト教の教えについて』と『三位一体論』、また、二つの説教集成、『説教』と『詩編講解』、これらにおける貧困に関する言説を考察する。

7.1 貧困と物質的な施しについてのアウグスティヌスの修辭

アウグスティヌスは、『説教』『詩編講解』『書簡』を通してさまざまに現われる物質的な施しに関する10のイメージを呈示する。それらは、以下に示される。

運び手 (*laturarii*) としての貧者

運び手としての貧者に関するアウグスティヌスの説明は、外的な施しをめぐるそれらのイメージのなかではもっとも具体的に行われている。彼が会衆に語っていることを挙げてみれば、「飢えた人を見なさい。裸の人を見なさい。困窮した人を見なさい。移住してきた人を見なさい。囚われた人を見なさい。あなたが、自分の持ち物を天へ運ぶときに、彼らがあなたがたの運び手である」²³⁹。富者に代わって運ぶ者という貧者のメタファーは、その二者の関係を逆転するという効果を上げており、富者が貧者に差し出すものを受け取ることによって、彼らに富者の世話をさせているのである²⁴⁰。その言葉自体でこのメタファーは、尽きることのない想像をかきたてるように思われる。もしも富者が自分たちの財産をすべて貧者に与えるならば、彼らが、その財産を最近貧しくなった富者に再び与えるよう強制されると考えられるかもしれない。アウグスティヌスが、一度きりというわけではなくメタファーを推し進めている、また、ここではそれを駆り立てるようにして促しているという事実は、富者の善行がほどほどに限られて

²³⁸ そうすることによって、私たちは、アウグスティヌスの説教の詳細に関して、Finn, *Almsgiving* の考察を一層委曲を尽くして述べてみたいと思う。

²³⁹ 『説教』53A.6; NBA 30/1,112-114; trans. Hill, WSA 3/3,80: 'Attende esurientes, attende nudos, attende inopes, attende peregrinos, attende captivos: laturarii tui erunt migrantis ad caelum.' また、『説教』25A.4; NBA 29,492-494と『説教』60.6; NBA 30/1,218-220を参照。

²⁴⁰ Ramsey, 'Almsgiving', 252頁を参照。Finn, *Almsgiving*, 188頁は、富者の「運び手」としての貧者のイメージを、富者の「受動的な受取人」から、自分たちの約束を果たしている「能動的に働く者」へ貧者が転換される例として註記している。彼は、この点に関するキリスト教文学の寛大さをもたらした社会秩序における、貧者に関する意識上の一般的な推移の一部として、これを分析している。しかし注意しておいた方がよいのは、こう指摘しても、私たちには、どれほど多くの人がアウグスティヌスの見方を真剣に受け取ったか、あるいは、そうした手段を通して貧者たちの地位を向上させたのか、に関する量的なデータがまったく与えられていないということである。Finn は、De Vinne, *Advocacy*, 98頁での De Vinne の誇張を反駁することに成功している。

いたことを示唆している²⁴¹。このメタファーは究極的には、社会秩序を逆転させたモデルを修辭的に示すことによって、富者と貧者の相互依存という枠組みを作り出そうとする彼の企てを強調することに役立っている。いつもと変わらず、富者の与えるものが、富者たち自身の目的にとってもよいものとして示されている。貧者に施し、同時に貧者を養うという重い負担をかけられた富者が、自分たちに過剰にあるものを減らす一方で、自分たちのために利益をもたらすことになる²⁴²。それ故、アウグスティヌスの呼びかけは、貧者たちに必要なものという枠組みに作用していることが決定的である一方、終末論的な見地から富者が自分に利益をはかることにおいてその彼らに対し負担を強いている。乏しいものしか持たない者（アウグスティヌスの二次的な関心事）のための物質的な救援を生み出すことを通して、富者が神へと一層近づくことができるようになる（アウグスティヌスの第一の関心事）のである。こういった言葉で考え出されている施しの広がりや実際にどれ程であったかについて、アウグスティヌスの説教の何れからも、また、その他に利用できるいかなる証拠からも測ることはできない。

物乞いのイメージの利用

アウグスティヌスは、物乞いのイメージを3通りの仕方を用いている。第一に彼は、自分自身を貧者の代表として描き出し、そして、「物乞いたちのための物乞い」というように自分が代表であることを表現している²⁴³。こう言った文脈での貧者についての彼の描写は、生き生きとしている。

私が教会に来て、また教会に戻るたびに、貧者たちは私に懇願して、自分たちにあなたがたから何か与えてもらいたいと、あなたがたに言ってくれるようにと私に語りかける。彼らは、私に、あなたがたに話してくれるように迫っていた。そして、彼らがあなたがたから何も得られていないということを分かったときには、私があなたがたに働きかけたことが空しかったと思うことになるだろう²⁴⁴。

²⁴¹ 『ヨハネ書簡講解』8.5; NBA 24/2,1792を参照。また、Ramsey, 'Almsgiving', 255: 「富者は、貧者が自分たちに等しくなり、「両者ともに、どのような奉仕も尽くすことができない者〔つまり、神〕のもとにあるだろう」ことを望んでいるのだろう」を参照。

²⁴² 『説教』61.12; NBA 30/1,242.

²⁴³ 『説教』66.5; NBA 30/1,346: *mendicus mendicorum*; 『説教』61.13; NBA 30/1,242: *legati ipsorum*.

²⁴⁴ 『説教』61.13; NBA 30/1,242; trans. Hill, WSA 3/3,148: 'Ex quo hic sumus euntes ad ecclesiam, et redeuntes, pauperes interpellant nos, et dicunt ut dicamus vobis, ut aliquid accipiant a vobis. Nos monuerunt loqui vobis: et cum se vident non accipere a vobis, inaniter nos arbitrantur laborare in vobis.'

アウグスティヌスは自分自身を、貧者が彼ら自身施しを求めるのと同じ目的のために施しを求める者として描写する。つまり、富者を彼らの救いのために助けるという目的である。「それは私たちにとってどういうことか。私たちを物乞いのための物乞いにさせたまえ。あなたがたは神の子らの数に入れられるだろう」²⁴⁵。永遠の救いにあずかることは、富者の物質的な施しに依存するものとして示されている。だが、この「代表であること」(‘ambassadorship’)と、貧者のための直接的な擁護に関する事例はまったく稀であり、私たちが、ヨハネス・クリュソストムスのなかに見出す事例よりも生き生きとしているわけではない。

物乞いというイメージに関するアウグスティヌスの第二の用法は、世俗的な豊かさを神の永遠の救いという文脈のうちに置くことによって、その豊かさの意味を再構成することを含んでいる。世俗的な豊かさは救いと対比され、実質のないものとなる。アウグスティヌスは富者を、彼らの豊かさにも関わらず依然神の豊かさを必要としている神の前の物乞いとして描き出す²⁴⁶。彼の修辞上の手立ては、神が永遠の救いにおいて差し出すものと対比したときには、富者が自分たちを豊かだと正当には考えられないと示唆することで、ここでも富者を貧者へ変えてしまうといった自己認識の問題に取り組んでいる。時間的な善と永遠の善の価値を対比させるのと同じような手法で、彼は、貧者と富者の地位を再び並べ替えることを修辞的に可能にするような永遠性の形而上学を利用している。さらにアウグスティヌスは、私たちがみな物乞いとして神の憐れみを必要とするものだと認めるよう促している。結局のところ物乞いとは、世に生まれたときに神へやって来た者たちである²⁴⁷。物乞いは、アウグスティヌスが、永遠を背景にして人間のさまざまな現実を示すことができるような修辞的な仕掛けであり、さらに永遠の報酬を受け取る個人の可能性をはっきりとさせる。これが、永遠の救いを背景として世俗的な豊かさとされているものを変えるのであり、永遠の救いの豊饒さは、地上で手に入るいかなるものにもはるかにまさっている。

アウグスティヌスが物乞いのイメージを使用する第三の方法は、彼らを社会的な状況のなかで描き出すことである。彼は、物乞いたちの懇願が、富者に施しを与えるようにと促す際の勧告であるかのように見えるという説得的なイメージを呈示している。

²⁴⁵ 『説教』 66.5; NBA 30/1,346; trans. Hill, WSA 3/3,213: ‘...[q]uid ad me? Ego sim mendicus mendicorum, ut vos numeremini in numero filiorum.’

²⁴⁶ 『説教』 56.9; NBA 30/1,148–150.

²⁴⁷ 『説教』 112.8; NBA 30/2,394–396.

主は、「求める者には、誰にでも与えよ」と言っている（「ルカ福音書」6:30）。もしも誰にでもというならば、困窮している者、悲惨な者にはさらにそれ以上ではないか。彼らの痩せ衰え、弱々しい様子が、彼らにできる懇願なのである。彼らの舌は沈黙しているけれども、彼らの汚らしさ、彼らの呻きは、施しを求めている²⁴⁸。

ここでの貧者たちのイメージは切実だが、アウグスティヌスにおけるそういったイメージは僅かである。なぜなら、貧者たちの個別の特徴を抽象的な本質に置き換えていることを考えれば、彼が真に誇張的な文体を採ることで、貧者個人の姿をその描写の背後に見ることを大抵は難しくしているからである²⁴⁹。彼が、これら沈黙した物乞いの名前を挙げることは一切ない。またいかなる著作でも、彼が個人的な司牧の務めのおり、ヒッポの通りに存在した者と描かれている彼らと自分が接触したということを述べていない²⁵⁰。自分自身を、貧者のための富者に対する「代表」として描き出した唯一の描写、これは、困窮した者たちに近いというよりも、むしろ隔たっていたという考えに結びつくことができるかもしれないイメージなのだが、これを別にすれば、アウグスティヌスは自らの説教において、貧困の問題を一般化している。彼の焦点は、特に困窮した者に絞られていたというよりも、困窮それ自体という人間の現象に絞られている。これに基づいて、彼はたとえば、神の永遠性を前に考えて富者を物乞いの立場に変換することができるのであり、また、その同じ根拠に基づき、会衆たちが物乞いたち自身の困窮を分かることによって通りにいる無名の物乞いと一体化すべきだ、と語ることができる。この次元において私たちは、アウグスティヌスの修辞を、ヒッポの通りを見通す姿見を用意するものというよりも、人間論的なメタファーという目的のため配置されたものだと論じるのである²⁵¹。

²⁴⁸ 『説教』 350B.1; NBA 34,158; trans. Hill, WSA 3/10,114: 'Omni, inquit Dominus, petenti te da. Si omni, quanto magis egeno et misero, cuius macies et pallor mendicant, cuius lingua tacet, squalor et gemitus eleemosinam petunt.'

²⁴⁹ この誇張的という修辞上の手法の特徴については、たとえば、H. Delehay, *Les Passions des martyrs et les genres littéraires*, Subsidia Hagiographica 13B (Brussels 1966) 168 (聖人伝に適用されたものとして)。

²⁵⁰ この点は、Finn, *Almsgiving*, 20頁で言及しているような、ガザの司教ボルピュリオスの物語、その聖人伝作者は、貧者バロカスを看護して健康にしたと彼について描写しているが、その物語と比較されるかもしれない。アウグスティヌスは、彼の伝記を著したボッシディウスによってはそのような描かれていない。貧者の個人的な世話に関して、アウグスティヌスについて公的に記録されたものには何も記されていない。

²⁵¹ 古代の無名の貧者たちを視覚化するという問題一般については、Parkin, 'Poverty in the Early Roman Empire', 1-34頁を参照。また、Kessler and Krause, 'Eleemosyna', 753頁は、この点について、「アウグスティヌスは、物乞いの具体的な状況についてはほとんど関心を示していない」と述

永遠的な事物と時間的な事物の区別

アウグスティヌスは、富者はつぎの世での収穫のために種を蒔くというつもりで貧者に寛大であるべきだと述べる²⁵²。「ここで分かち合いなさい。あなたがたはあそこでも分かち合うでしょう」というのが、アウグスティヌスが示す簡潔な勧告である²⁵³。彼の施しに関わる説教においては、ほとんど変わることなくこうした自己利益的な、終末論的な枠組みが保持されている。この枠組みは、この世においてそれ自体では不安定で過ぎ去るものである有形のものを差し出すことのできる永遠的な状況の保証に基づく。アウグスティヌスは、イエスの助言「あなたの主の助言に耳を傾けよ。〔あなたの財産には〕地上のどこにも安全な場所はない。それを天へ移しなさい」に基づいて自分の助言を述べる²⁵⁴。さらにアウグスティヌスは、永遠的なものと時間的なものの関係について、「時間的なものを沢山持っている」者は、「永遠的なものを求めている」と述べる²⁵⁵。こうした並置は、とりわけ彼による「マタイ福音書」の至福に関する註解で言及される。貧者の幸いを理解しようと試みるなかで、彼は、時間的なものよりも変わることなく価値がある永遠的なものを所有している者として貧者を表現する。同じ文脈でアウグスティヌスは、富者を神の永遠性を求める物乞いだと表現している。彼による物乞いと富者の同化には、肯定的な面と否定的な面の両方がある。アウグスティヌスは、永遠の報酬を受け取るという観点からの区別を立てる。というのも、貧者たちに自分の金銭を与える富者がいる一方、自分たちの持ち物を寛大に与えることができない者たちが永遠の罰を受けることになるからである²⁵⁶。さらにアウグスティヌスが指摘するのは、人は、収税吏が訪ねてくるとそうしてしまうように、恐ろしい化けものにしりごみをするように施しを与えることをため

べる。Krause, in Kessler and Krause, 753-754頁はまた、私たちがヒッポにおける実際の貧者たちの数について適切に説明することができず、その点についてアウグスティヌスは確かに何の助けにもなっていない、と註記する。

²⁵² 『説教』 45.4; NBA 29,778-780.

²⁵³ 『説教』 85.4; NBA 30/1,652; trans. Hill, WSA 3/3,393: 'Communica hic, et communicabis ibi.' アンブロシウス『義務について』 1.11.39: '...[c]orporalia seminas et recipis spiritalia.' (あなたがたは物的な種を蒔いて、霊的な実を収穫する) Trans. Davidson, 1,138-139頁を参照。

²⁵⁴ 『説教』 53A.5; NBA 30/1,112; trans. Hill, WSA 3/3,80: 'Consilium audi Domini tui. Non est tutus locus in terra: migra in caelum.'

²⁵⁵ 『説教』 53.5; NBA 30/1, 90; trans. Hill, WSA 3/3, 68: '...[a]bundas temporalibus, egas aeternis.'

²⁵⁶ 『説教』 36.6; NBA 29, 644-646.

らうべきでないということである²⁵⁷。アウグスティヌスによる二つの義務のあいだの区別はまた、キリスト教的な授与の終末論的な焦点——時間的なものを保有することよりも永遠的なものを受け継ぐこと——が、なぜ、またどのようにキリスト者が施しを与えるべきかについての彼の思想の基盤において存在する。

キリストの身体への言及——キリスト者同士の施し

アウグスティヌスの説教において数回にわたって、与えるべきだと促すものとしてのキリストの身体のイメージが言及されている。彼は、貧者がキリストの身体の一員であり、その貧者たちを富者が世話すべきなのは、貧者たちの頭としてのキリストが、自らの身体が十分に世話される時一層幸福になるからだと述べる。彼は聴衆に気づかせている。「キリスト者がキリスト者を受けいれるときには、身体が身体に仕えている。そして、その頭は喜び、彼の一員に惜しみなく与えられているものは何であれ、自分に与えられているかのように見なす」²⁵⁸。この促しは、富者と貧者に同じように発せられるだろう。しかし別の箇所での彼の促しからは、彼自身がとりわけ対象にしているのが、富者であることが判明する。

その頭は天にあるが、しかし彼は地上に身体をもっている。キリストの身体がキリストの身体に与えるように。持っている者が欠けている者に与えるように。あなたがたはキリストの身体であり、与えるべき何ものかを持っている。彼はキリストの身体であり、あなたがたが与えるために必要としている²⁵⁹。

それ故、アウグスティヌスは、物質的な貧困という事実を、貧者たちに富者が与えるように促すという目的を設定させる現象へ変換することによって、貧困を目的論的に修正している。彼が、数回にわたってキリスト者のあいだの施しに言及しているという事実は、その実践においてこのタイプの施しが、キリスト者ではない物質的に貧者に対しての施し以上に大切だったであろうということを示してい

²⁵⁷ 『詩篇講解』 146.17; NBA 28/2,792-796.

²⁵⁸ 『説教』 236.3; NBA 32/2,596-598; trans. Hill, WSA 3/7,45: 'Cum ergo Christianus Christianum suscipit, serviunt membra membris; et gaudet caput, et sibi inputat datum quod membro eius fuerit erogatum.' 『詩篇講解』 130.6; NBA 28/1,246-248を参照。アウグスティヌスにおける、キリストと施しを受け取る者の同一視については、Kessler, in Kessler and Krause, 'Eleemosyne' 763頁を、また、キリストの身体に施しを与えることのアウグスティヌスにおける卓越性については、Kessler, in Kessler and Krause, 'Eleemosyne', 765頁を参照。

²⁵⁹ 『説教』 53A.6; NBA 30/1,112-114: 'Caput in caelo est, sed membra habet in terra: det membrum Christi membro Christi, det qui habet egenti. Membrum Christi es, et habes quod des: membrum Christi est, et eget ut des.'

る。だが、私たちが上述の差別的、あるいは無差別的な施しについて論じたように、おおまかに言えば彼は、思うまま誰にでも与えるようにと提唱している。

人間性を共通につなげている同一性

物質的な施しを促すため、アウグスティヌスが、富者と貧者のあいだの共通の自己認識について決着をつける別の方法とは、彼らに共通の損なわれやすい始まり、彼らに共通の倫理的な条件、そして、彼らに共通の罪を受け継ぎ、それに与っていることの強調である。彼は、富者が財産を積み上げていても、彼らに備わっている弱さは富者にも貧者にも等しいのだということを認めている。

だが、富者たち、あなたがたは何かを持って生まれてきたのではない。あなたがたは、すべてこの世で見出した。貧者と同じように、あなたがたも裸で生まれてきた。両者に共通しているのは、身体のみ弱さであり、泣き叫ぶことも、悲惨の証拠も共通である²⁶⁰。

アウグスティヌスのこうした傾向は、富者を神の前での物乞いと見なしたいという願望と合致している。欠乏状態に人間が位置づけられるという普遍性に言及するものであり、外面的に蓄積された財産に基づいた社会的な差異が生じていることの効力を弱めようとするものである²⁶¹。アウグスティヌスは、富者の骨格と貧者の骨格に何か違いがあるのかと尋ねる。そして、富者と貧者に共有されている共通の条件を強調する人が誰もいないという事実を認める²⁶²。同様に彼は、罪が共通の人間性によって共有されていることを喜んで指摘する。さまざまなものを所有することに伴う財産と地位という社会的な差異は、この普遍的な背景に対して何の意味を持たない²⁶³。アウグスティヌスが労働という問題に関して考慮しているように、富者は財産を維持するために働いている一方、貧者は財産を得るために働いている。両者共に、墮落した人間性のために広がっている罪の条件を免れているのではなく、両者の何れかが、罪の本来的な帰結である死を免れているわけでもない²⁶⁴。富者も貧者も、引き起こされた死が巻きついている罪と、罪と死が生み出す神を前にした欠乏に同じように支配されている。

²⁶⁰ 『説教』85.6; NBA 30/1,654; trans. Hill, WSA 3/3,394: 'Sed nec vos, divites, aliquid attulistis. Totum hic invenistis, cum pauperibus nudi nati estis. Communis est in utroque infirmitas corporis; communis vagitus, miseriarum testis.' 『説教』61.8; NBA 30/1,236-238を参照。

²⁶¹ さらに、『説教』61.8; NBA 30/1,230-238を参照。その思想は、こういった言葉で正確に表現される。『詩篇講解』73.13; NBA 26,838-840を参照。

²⁶² 『説教』33A.3; NBA 30/1,230-238。

²⁶³ 『説教』70A.1; NBA 30/1,394-396。

²⁶⁴ 『説教』70A.1; NBA 30/1,394-396。

内なる正義を生み出す外的な施しについての描写

アウグスティヌスは、物質的な施しを与えることで魂の内なる正義を増すということを明白に主張している。彼の思想は明快である。「あなたがたの金銭を配分することによって、あなたがたは正義を増す」²⁶⁵。「内なる正義」を増すというこの考えは、物質的な所有物を放棄することで、その人は神へと一層近くされることができ、自身の隣人と近くされることができるという彼のテーゼとのみ関わることが可能である。別の箇所では表現しているように、彼は、祈りと施しの二重の本質に関するイメージを用いる。

私たちは、祈るだけでなく、施しをすべきである。なぜなら、船が沈まないように水あかをくみ出すとき、声を出し腕を動かして作業に取り組むからである²⁶⁶。

同じように彼は、貧者には自分たちの財産を天へと運ぶことを許しつつ、物質的に豊かな者には彼らの救済をもたらすために所有物を放棄するよう促しているとき、ここでのこの物質的な施しを、死すべき生という公海を成功裏に航海することを魂ができるようになるという可能性と結びつけている。別の箇所ではアウグスティヌスは、私たちが貧者に与える金銭が、帰郷するために私たちが費やす金銭に近いのだと述べる²⁶⁷。『キリスト教の教えについて』でその概要が記された使用と享受の区別がここに反響している²⁶⁸。アウグスティヌスにとって、物質的な事物を分け与えることは自分たちの天上の故郷へ至ろうと試みる個人的な企ての変形した帰結である。物質的な事物の重みを片づけることによってのみ、実際にも、また心理的にも人は安全に自らの天上の港へ航海することができる。

物質的な事物の正しい使用としての施し

『キリスト教の教えについて』でその概要が語られた使用と享受についてのアウグスティヌスの思想は、説教にもその反響が見出される。物質的な豊かさは、それらが貧者に与えられるかぎりでのみ善いものであり、これが実際、それらを

²⁶⁵ 『説教』 61.3; NBA 30/1,232; trans. Hill, WSA 3/3,143: 'Erogando pecuniam, auges iustitiam.'

²⁶⁶ 『説教』 56.11; NBA 30/1,152; trans. Hill, WSA 3/3,101: 'Non tantum autem debemus orare, sed et eleemosynam facere: quia quando sentinatur ne navis mergatur, et vocibus agitur et manibus.'

²⁶⁷ 『説教』 65A.2; NBA 30/1,324.

²⁶⁸ 上述の議論を、また、O'Donovan, 'Usus and fruitio', 361-397頁を参照。

善いものにする」と述べる。ヨブの例を引き、彼は、ヨブの豊かさを善いものとしたのは、その使い方だったと主張する。ヨブは自分のパンを貧者に裂いて与え、裸の者に衣服を与え、見知らぬ者を迎え入れた²⁶⁹。ここでのアウグスティヌスの記述によれば、善さについての、また物質的な事物についての描写は、彼の思想を支配している気質に関する枠組みに全面的に依存していると論じることができよう。善いものが正しく使われるかぎり、人はそれらを善いものと呼ぶことができる²⁷⁰。だが、それらの事物が悪く使われるならば、何かしらその善さを客観的に失ってしまうということが意味されていない。代わりに、人間の贖いにとって中心的である人間の気質に関する彼の思想には、人はとりわけ、創造された事物を正しく使うことによってさらに贖われるということが含意されている²⁷¹。

同じ場合をより強固にして、アウグスティヌスは、富者には貧者に与えるという直接的な社会的義務があるということを仄めかす。たとえば、ある子供が死に、その子が受け継ぐために両親が節約していたという場合、節約された金銭は、いまは貧者に対する義務という点から所有されているのである²⁷²。同じような義務という脈絡で、アウグスティヌスは、人が貧者に与えるための金銭を持っているとき、そうするのに失敗したことを詐欺に等しいものだとして描いている²⁷³。

そうした力強い描写は、アウグスティヌスが、たとえ、気質に関する変化が本質的に義務によって支えられているといっても、物質的なキリスト教的な施しへの義務を、気質に関する変化の意義にとって二次的なものとは見なしていなかったということを示唆している²⁷⁴。

健康という富

アウグスティヌスは、身体的な健康を所有することの意義について、そして、貧者にとってさえ幸福を保証するのだということは何回か言及している。たとえば彼は、「[精神の強固さ、健康、また一般的な身体の状態が]健全であるかぎ

²⁶⁹ 『説教』 15A.5; NBA 29,278–280.

²⁷⁰ 上述の本論文(4.6)〔35–36頁〕を、また、『説教』 61.2; NBA 30/1,230–232 と、『説教』 301A; NBA 33,472–489を参照。

²⁷¹ 創造された秩序の客観的なよさについてのアウグスティヌスの言明には、紛らわしさが無い。この点に関する言説の一つとして、『告白』 7.12.18; NBA 1,200–202を参照。

²⁷² 『説教』 9.20; NBA 29,184–186.

²⁷³ 『説教』 206.2; NBA 32/1,144.

²⁷⁴ 上述の本論文(4.5)〔33–35頁〕「物質的な、また霊的な施し：適切な統合」を参照。

りで、貧者でさえ豊かである」ということを認める²⁷⁵。アウグスティヌスは、率直に幸福を身体的な健全さと同等に扱っている。別の箇所では、身体的な健康が損なわれることで、人が健康を回復することにまったく確信を持っていないような不確かな状態へ追いやられることになると註記している。彼は、この不確かさが、貧しいならば豊かになるだろうとか、あるいは教育を受けていないならば教育を受けるだろうということが不確かであるのと同じようなものだと論じている²⁷⁶。偶然性が、こうした可能性のいずれにも支配的である。アウグスティヌスは、身体の高い健康状態が実際貧者にとっての財産だと述べるとき、物質的な財産と健康との類比を明示するのであり、実際貧者は、多くの人が自分の富裕さについて主に向かって叫ぶのと同じ仕方で、自分の健康について主に向かって叫ぶ²⁷⁷。

アウグスティヌスが、身体の高い健康と金銭の豊かさとをこのように同一視することは、いくつかのことを示唆する。第一に、身体の高い健康は人間の精神における健全さにとって根本的である。物質的な施し——たとえば、食糧の供給——についての彼の関心事は、彼が考えている他のかたちでの施し、たとえば、罪を赦すことにとって二次的ではない²⁷⁸。第二に、彼は、身体の高い健康を持つことが、実際に幸福な誰かを支えるのに十分なものであるという状況を想定して備えていた。そうすることで、上方へ社会的に移動する余地や、そうするだけの刺激をまったく提供せず、彼の説教を、不均等な社会的、経済的な「現状」の押し付けだと考えることができよう²⁷⁹。しかしここで、人間の身体的な養育という「財産」についてのアウグスティヌスの認識はある程度まで彼の名誉を挽回している。富者に対する他での彼の説教が、金銭的な財産を所有しているために彼らが不幸であるということに基づいて行われ、人間の幸福の主軸としての身体の高い健康を承認することによって、生の単純さを是認している。この生の簡素さは、すでに十分に富者たちに対して同じことを押し付けることがなかったにしても、彼が自身の修道的な共同体に対して、いくらか力づくで強いているものである²⁸⁰。彼にとって、人間の自足は、ただ身体が基本的に必要とするものを用意することのみ依存している。それと比べれば、金銭的な財産を獲得することで、彼が別の箇所で列挙

²⁷⁵ 『詩篇講解』101「説教」1.1; NBA 27/1,508–510; trans. Boulding, WSA 3/19,45: ‘...[e]tenim cum haec salva sunt, et pauperes divites sunt.’

²⁷⁶ 『詩篇講解』38.19; NBA 25,918–920.

²⁷⁷ 『詩篇講解』76.2; NBA 26,998,970 (この巻の頁付けは、この箇所に関して混乱している)。

²⁷⁸ 『説教』58.10; NBA 30/1,194と、上述の「物質的な、また霊的な施し：適切な統合」を参照。

²⁷⁹ 上述の「運び手としての貧者」を参照。

²⁸⁰ 上述の「自発的な清貧」(5)を参照。

しているような心理上の、また霊的な厄介事によって悩まされることになる。

「夢と富」のはかなさ

アウグスティヌスの著作のなかで、富と貧困に関連して明らかになっている考えに「夢と富」がある。アウグスティヌスは、自らが新プラトン主義から引き継いだものを思い起させる仕方で、どれほどに物質的な豊かさがそれ自体夢のように過ぎ去るかについて論じている²⁸¹。彼が見るところ、貧者は眠りについて自分が富裕であるという夢を見る。これは、目覚めると自分の財産がなくなってしまうのを知るためにだけであって、彼らは、そこから逃れるために眠りにつくのが常である労苦や苦痛へ戻ってくる²⁸²。アウグスティヌスは、永遠の生の永続性とそれがもたらす豊かさを、貧者が夢見ている物質的なものと対比して強調する場合にはいつでも、「夢と富」という主題を用いる。当の事物のはかなさは、ただ物質的な豊かさに限られているのではなく、社会的に剥奪されている者に希求されているような名誉や肩書き、また賞讃といった社会的なものも包含している。彼は、こうしたものが永続しないことだけでなく、神の観点からすれば、聖書が証言しているように粉碎されることになるのだということを強調している。「詩篇」72に註釈をほどこして、彼は、「主よ、あなたの町において、あなたはそれらの形を無へと変える」と語る²⁸³。ここでの詩篇作者の意図に対するアウグスティヌスの信は、貧者に追い求められ、富者に所有されている世俗的なものが過ぎ去ってゆき、ついには価値を失うということを見てとり、地上の町と天上の町とのあいだの対比をうむために聖書を用いているほどには重要ではない。

他の箇所でもアウグスティヌスは、富者によって所有されている財産が一時的なものであることを証示するために、この主題を利用する。彼は、「なんと多くの人が、富者として眠りにつくが、夜のうちに強盗に入られてすべてをもってい

²⁸¹ 夢についてのアウグスティヌスの思想については、M. Dulaey, *La rêve dans la vie et la pensée de saint Augustin* (Paris 1973) 71–88; J. H. Taylor, 'The meaning of spiritus in St. Augustine's *De Gen. ad Litt. XII*', *The Modern Schoolman* 26 (1948–1949) 211–218; R. A. Markus, 'The eclipse of a neo-Platonic theme: Augustine and Gregory the Great on visions and prophecies', in H. J. Blumenthal and R. A. Markus (eds), *Neoplatonism and Early Christian Thought. Essays in Honour of A. H. Armstrong* (London 1981) 204–211, esp. 204–206; reprinted in Markus, *Sacred and Secular. Studies on Augustine and Latin Christianity* (London 1994); and S. F. Kruger, *Dreaming in the Middle Ages* (Cambridge 1992) 35–36

²⁸² 『詩篇講解』75.9; NBA 26,948–950.

²⁸³ 『詩篇講解』72.26; NBA 26,850–852.

れてしまい、貧しくなって目を覚ますことだろうか」と問いかける²⁸⁴。睡眠という現象についてのアウグスティヌスの関心は、言及のたびに人間の条件の不確かさとその不確かさのうちに内包されている事物とを強調するものになっている。睡眠とそれに隣り合う夢という現象がこのことにぴったりなのである。財産が現実のものであり、富者によって所有されている場合であれ、その財産は予告なしに持ち去られ、そうされることで、それが夢と同じように過ぎ去るものであることがあらわになる。それ故、アウグスティヌスは、人間の条件について一般的に描写するために利用する自らの哲学的な、また聖書的な伝統と結びつけて、強盗のようなありふれた社会現象を用いている。ここで示されるのは、私たちが普通に認めるような、懐疑論や事物の存在に関する懐疑論的な問題である。実際にはそうでなくとも、夢のなかのものが本当のように見えるならば、私たちの目覚めている世界におけるそういった事物について、私たちはどのように確信することができるのか²⁸⁵。注目すべきは、アウグスティヌスがそうした強盗についての個別の事例をまったく語らず、また、自分が富裕だという夢を見て、実際はそうでなかったと分かる苦痛を個人的に経験しているような個々の貧者についてもまったく語っていないということである。代わって彼は、懐疑論についての通例の哲学的な問題を取り上げ、その問題を、一般的な言葉遣いで考察される人間の条件についてのメタファーへ移行させる。私たちは、古代のヒッポにおける社会の諸現象について批評を語るジャーナリストとしてのアウグスティヌスに出会うことは決してないのである。その代わりに私たちは、抽象的な、また一般化された言葉遣いで考察された人間の条件に関する洞察にみちた司牧的な註解と出会う。

物質的な施しについて別個に位置づけられるイメージ

アウグスティヌスの『説教』における物質的な施しに関するその他の言及は、いかなる共通テーマのもとにもまとめられない。それらの言及はたとえば、会衆への一般的な批判の一部となっている世俗的な望みから教訓をくみ取ろうとする指摘のうちに見出される。その批判において彼は、施しを与えることについての会衆の失敗を、同じように失敗した聖書におけるパリサイ人たちの事例と結びつ

²⁸⁴ 『説教』 61.11; NBA 30/1,238-240; trans. Hill, WSA 3/3,147: 'Quam multi dormiunt, et venientibus latronibus et cuncta auferentibus, evigilant pauperes?'

²⁸⁵ アウグスティヌスの懐疑論的なジレンマと関連する夢についての簡潔な議論については、『アカデミア派論駁』 3.11.24-25; NBA 3,136-138と『告白』 10.30.41; NBA 1,334-336 (夢についての倫理的問題について)を参照。

ける²⁸⁶。ここでの中心は、それ自体で貧者を無視することを伴う世俗的な望みへの一般的な非難である。

だれも、数えきれない物乞いたちの極度の欠乏について考えることもなく、だれも、あなたたちの背後にある多数の這いつくばっている者たちを振り返りもせず、皆の目は、あなたがたの先頭に立っている少数の富者に注がれている²⁸⁷。

特定の個人というよりも一般化して人間の動機を批判するというアウグスティヌスの傾向は、こういったタイプの描写が彼の標準的な修辞の定式の一部であるという考えを確証する。彼の非難は、きわめて卑劣な手を使うような人間の状態の特質に向けられる。その非難は、彼が説教の最後で寄付を求めることよりも、むしろ彼の聴衆の心のなかでの関心事を変化させることを目指している。

別の箇所ではアウグスティヌスは、両親の子供との関係に言及して人間の貧困の条件を描く。ちょうど私たちが、求められてもすべてを自分の子供たちに与えることがないように、神も、自分の子らに欲するものをすべて与えるわけではない²⁸⁸。このことが、ほとんど強制的な神義論ということになるわけではない。アウグスティヌスは、貧困の問題がいつそう多くのものを所有したいという欲望との関連というよりもむしろ、欠乏との関連で理解することができるという事実をそっと黙って無視している。さらに、彼の思考に独特の強調点は、貧者の苦難について何とか説明しようとするよりも、神の人間性に向けられた愛に置かれている。このことが明らかにする第一は、ここでの彼の話がかなり富裕な会衆に対するものだということであり、彼らは「必要」についてよりも「欲求」について理解するのだろう。第二にアウグスティヌスは、神義論に関係するかぎりでは、貧困の問題についてのいかなる系統的な思想も示していないことが明らかである。他の箇所では彼が、貧困をもっぱら「必要」という観点で表現しているという事実から、彼がそれをこの箇所では省いているのは、よく考えたうえのことだということが示唆される。アウグスティヌスは、「富裕」と「貧困」についての自身の言葉が弾力的であることを反映しつつ、また貧者についての諸問題に系統的な神学的思索を展開することなく、富者が一体感を持つことのできる事柄を扱っている。

²⁸⁶ 『説教』 9.19; NBA 29,182-184.

²⁸⁷ 『説教』 9.19; NBA 29,182-184; trans. Hill, WSA 3/1, 276: 'Non attenduntur egestates innumerabilium mendicorum, non respiciuntur posteriores multitudines pauperum, sed paucitas praecedentium divitum ante oculos ponitur.'

²⁸⁸ 『説教』 21.8; NBA 29,404-406.

劇場での見世物全般に対する批判と一致して、アウグスティヌスはときに、施しを与えることができないことを劇場での催しに費やされた費用と比べている。ここで貧者は、飢えているキリストとして言及され、一方で貧者に費やされるべき金銭が下劣な催し物に当てられている²⁸⁹。しかし一方で、これはアウグスティヌスによくある所見であり、特に貧者のために唱えられているというよりもむしろ、劇場の催しへの参加に関する彼の禁欲的な態度という文脈において理解されるべきである。彼の力点は、ヒッポにおける特定の貧者の窮状に焦点を当てることへの関心よりも、見世物の道徳的な墮落に置かれている。同様の修辞上の定式は、アウグスティヌスが、飢饉や貧困、戦争、困窮、死、疫病、強盗や貪欲、また貧者への圧迫に現前している「世界の抑圧」を描写する際にも現われている²⁹⁰。

7.2 考察される証言：貧者は現実のものか、修辞上構成されたものか

古代のテキストを扱うにあたっての修辞、あるいは現実に関する問題は答えるのが常に困難である。上述の証言から明らかなのは、アウグスティヌスが貧困と豊かさの問題について、それが一つに集められたものでなくともある程度まで主題的に考えていたということである。彼の典型的思考にはこの問題の心理学的な分析が含まれており、また、社会的な権利から貧富を取り去るために、人間の自己認識の根底を神学的に再構成することとあいまって、この問題をその核心において扱うためのモデルを提供していることが明らかである。だがこれらの何れもが、ヒッポの共同体における現実の変化について、あるいは変化することが必要であるべき現実についてすら、いかなる洞察ももたらすことはない。ピニアンとメラニア、またユリアナという例外的な事例のほかには、たとえば、自分たちの財産を譲り、貧者の擁護者となったことが明らかな特定の富裕な家族があったなどと何ら聞くことはない²⁹¹。より辛辣に言えば、アウグスティヌス個人によって、彼の社会的な施策によって、あるいは彼の説教がもたらした衝撃によって支援された特定の個々の貧者、あるいは家族についてほとんど聞くこともないので

²⁸⁹ たとえば、『説教』 32.20; NBA 29,594.

²⁹⁰ 『説教』 113A.11; NBA 30/2,444-446.

²⁹¹ 『書簡』 126; NBA 22,22-39. Lepellety, 'Facing wealth and poverty', 14-15 は、ピニアンとメラニアの財産放棄を、「原理主義者」のそれであり「無責任」だと見なしている。

ある²⁹²。アウグスティヌスは、決してオスカル・ロメロ* でないし、彼の思想のどこにも、文字通り彼の修辞を受け取るにせよ、それが示唆するほどに、彼が政治的、あるいは社会的な転換を思い描いていたと指摘するものは存在しない。

貧者の名前を挙げないのはおそらく、アウグスティヌスの関心とその影響の限界を示すのだろう。司教としての彼の地位のままで、その当時彼のように教育を受け、しつけられ、地位を得ている者ならば大抵そうであるように、ヒッポにおいて社会的に、また物質的に極貧にあえぐ貧者の問題からは彼自身も隔たったままのような感じを抱くかもしれない²⁹³。彼が自身を、「貧者のための代表」だと描く表現もただ二回しか存在しない。その表現が希少であるのは、アウグスティヌスが、自分の著作のなかで一つにまとめたかたちで「貧困」という問題を扱うことができなかつたことと相俟って、この問題がけっして彼の精神に差し迫つたものでなかつたことを示唆している。貧困の問題に関する彼の修辞上の再構成は、たしかに差し迫つたものである。しかしながら、それはただ再構成にとどまっていて、彼の作品内部において特に効果的だったという証拠は存在しない。

貧困に関するアウグスティヌスの修辞の鍵は、その問題についての彼の所見の文学上の設定に関わっている。上述の分析から理解できるように、彼の理論的な、あるいは思弁的な著作——たとえば、『キリスト教の教えについて』や『三位一体論』——における貧困の問題についての論述は常に、個々のテキストにおける主たる関心事に対して二次的なものとどまっている。貧困や貧者への関わりは、けっして主たるものとして表面化することなく、あるいは実際のところ、これらのテキストにおいて興味をかりたてて繰り返される主題でもない。

読者により直に接しているような彼の著作——『説教』や『詩篇講解』のうちのあるもののように説教された作品、また、彼が直接的に扱う文通相手との『書簡』——においても、彼の貧困への言及は、上述のようにその輪郭が描かれたテーマとのみ一致している。説教のなかで、彼は時に自由に、気質の関わる施しへの関心と物質的な施しへの関心とのあいだを、異なる点で変化させており、そ

²⁹² 貧者に関するこの没個性化のより広汎な証言について、Ramsey, 'Almsgiving', 252-3頁を参照。彼によれば、彼らは決して、「個々の必要と欲求をそなえ、自己の権利を有する個人」でなかつた。

* オスカル・ロメロ (1917-1980) は、エルサルバドルのカトリック司祭であり、1977年にサンサルバドル大司教区の第4代大司教となった。エルサルバドル内戦における人権侵害を証言し、貧困層の側に立って、貧困、社会的不正、拷問を告発したが、その急進的な立場によってカトリック教会からも批判を受けるようになる。1980年ミサを司式している最中に暗殺された。

²⁹³ Ramsey, 'Almsgiving', 252頁は、この時代の著作において、貧者が決して個性を備えることはない」と註記している。アウグスティヌスは、まさしくこのパターンを踏襲している。

して、どの点でも両方のテーマを拡張した仕方で扱うことはない。このことが示唆するのは、私たちが物質的、また霊的な施しという主題という観点から彼の施しへの関心を追跡することが可能になる一方で、アウグスティヌス自身が、たとえば、ペラギウス主義、あるいはマニ教に関する神学的な影響を探索したのと同じような仕方で、その主題を探索すべく充分に取り組んだのではなく、さらには、彼の経歴における最初のころの善き生活についての哲学上の基本問題を探索したように充分に取り組んだのでもないということである²⁹⁴。

このことが示しているのは、貧困へのアウグスティヌスの関心が、彼の思想において卓越していたというよりもむしろ、神学的、社会的なより広汎な関心事から生じたということである。そして、施しという問題は、会衆のあいだで熱心に論争されたものでなかった。このことから私たちは、二つの結論を導き出すことができる。第一に、施しを促し、彼が行ったようにそれを立案することにおいて、彼は、彼の会衆たちのあいだでの文化的な慣わしに反して働いたのではなく、実際社会変革を同時に提唱することなしに、彼らの怠惰な寛大さに反して働いていたのである。別の仕方で表現すれば、彼と聴衆たちは社会的な変革者でなかったし、また、彼らにはなじみのない貧困と施しを考えていたわけでもなかった。むしろ、これらの問題に対するアウグスティヌスの持続的な取り組みの欠如は、彼が自分の会衆たちに自ら配した考慮すべき事柄を理解し、速やかに行動するよう促していたことを示している。第二に、アウグスティヌスの貧困と施しに対する関心が、より広汎な関心事に対して二次的に過ぎなかったということを考えれば、彼の貧困に関する思考がほのめかしている自己認識の再構成が、キリスト者の自己認識にとって一層意味をもつ行為における暗黙の自己認識を再構成することに対して、二次的であったということが論じられるかもしれない。そのようなものの一つとして、たとえば、洗礼がある。アウグスティヌスのこの問題についての考察は、関心的となっている点において、一層展開され、一層詳細にわたっていた。たとえば、『告白』における彼自身の洗礼の意義は、彼の回心物語にとって中心である²⁹⁵。このきわめて重要なアウグスティヌスの作品における貧

²⁹⁴ これら三つの主題を取り上げるのは、アウグスティヌスがこれらを詳細に考えたからである。彼の貧困への関心は散発的であり、キリスト教の奉仕の伝統の一部として貧者のために寄付を募ることに、物事の順序として従事してきたであろう司教としての自身の役割に導かれている。彼は、その所見が興味深いであろうのと同じ程度に、この問題について社会的に、あるいは理論的に「向きを変える」ことはしていない。

²⁹⁵ 洗礼の瞬間は、アウグスティヌスとそのテキストにおいて詳細に記していないとはいえ、『告白』の物語に不可欠のものである。この同じ問題については、J. J. O'Donnell, *Augustine. Confessions*

困への唯一の言及は、酔っぱらった物乞いの幸せについての考察である²⁹⁶。アウグスティヌスの、興味深いとはいえ散発的な貧困についての所見に基づいて、貧困が彼の神学的、あるいは別の仕方での中心的な関心事だったと論ずることはできない。彼の提唱は、一般的に考察された人間の条件に対する提唱であり、富者と貧者はこの文脈においては、等しい度合いで語り掛けられている。

結論

本論文の冒頭において指摘したように、私たちには、貧困、あるいは救貧に充てられたアウグスティヌスのいかなる単著も見当たらないし、また、これらの主題に関する彼の思想を包括的に扱う現代の研究も存在していない。しかしながら、本書での私たちの研究の及ぶかぎり、私たちはそうした研究の礎を据えようと試みてきた。アウグスティヌスの人間性に関するモデルに関して、私たちは、アンブロシウスの影響が顕著であることを見出したのだが、ノラのパウリヌスとカルタゴのアウレリウスもまたその影響を及ぼしていたことを見出した。ストア派と新プラトン主義のいくぶん修正されたかたちが、私たちに共通の人間性と、また同様に憐れみと内的な気質に対する彼の態度を導いた。はっきりと確認することのできる神学的なモデルは主として聖書であり、カルタゴのキュプリアヌスであり、また『アントニウスの生涯』である。

アウグスティヌスの貧困に関する言説にとっての情報源が異なるジャンルに属することで、それを一般化することが冒險的だとはいえ、説教と書簡を通して私たちは、彼の人間性に関するプログラムのもっとも重要な部分が施しから構成されていたこと、施しという現象がその実践的な側面に加えて、彼にとっての心理学的、社会的、そして終末論的な次元をも有していたことを見出した。彼は、北アフリカのドナティストの教会から突きつけられた挑戦に直面し、その文脈では、パウロ的なモデルにしたがひ、一体性が慈愛の贈与という行為よりも一層重要なものとなったのだが、会衆のうちに一致と結束を確立する手段として施しを利用した。だが真に効果的であるために、施しには与える側の断食、祈り、許し、

(Oxford 1992), vol. 3, 72と106-108頁を参照。これに反して、E. Morgan, *The Incarnation of the Word*, forthcoming〔註36参照〕は、洗礼の余波のなかでのアウグスティヌスの涙の意義について言及する。アウグスティヌスはまた、本論文の冒頭において私たちが記したように、貧困についての単著を著していない一方で、洗礼については注目に値することに、単著を数回著している。

²⁹⁶ 洗礼については、『告白』9.4.12-9.6.14; NBA 1,266-270、酔っぱらった物乞いについては、『告白』6.6.9-10; NBA 1,154-156を参照。

そして何よりも心理学的、あるいは気質に関する変容が含まれていたものであり、それによって、与える者はまず自分たちの病んだ魂について配慮すべきだったのである。与える者のそなえる謙遜、与える者と受け取る者のあいだに存在する共通の人間性への敬意に対して適切な注意を払うようにとも命じられている——富者が必ずしも高慢というわけでない一方、貧者もまさにそのことによって謙遜を示しておらず、ただ自分が貧しいというだけで救われることを当てにできない。このことによって、この主題に関するアウグスティヌスの言説全体に広がっている貧困の終末論的な靈性化が導かれてくる。施しを与えるようにとさまざまな会衆を促すため用いる方策のなかには、この世界からつぎの世界へ財産を運搬する運ぶ手としての貧者に関する描写や、貧者とキリストとの同一視があるのだが、与える者に彼らに可能な以上に与えるようにとは何れにおいても求められていない——よき意図だけで金銭を持たないことを悩みの種とすべきではない。

アウグスティヌスは、直接的な、また間接的な贈与の両方について、貧者に与えるか、あるいは聖職者に与えるかについて、またおそらくはマニ教徒の厳格で差別的な贈与に対する反発として、理論的にはこれが無差別的であると考えているのだが、実践においては同胞のキリスト者に限られていたようである。彼の会衆は、何であれそれを必要とした者には誰でも、特に自分たちの聖職者を含めて、与えるよう奨励されていた。しかしながら、こうした物惜しみしないことが、自分の所有するものを包括的に放棄することまでは上げられず、気質にかなった貧困へと集中していたのである。自発的な清貧についての例外は、アウグスティヌスの修道士たちであり、彼らに対しては実際、全面的な放棄が命ぜられていた。

貧者はとりわけ、『キリスト教の教えについて』や『三位一体論』といったアウグスティヌスの理論的な著作において現われず、それらの著作では、社会現象としての貧困への言及は、教えに関わる、あるいは神学的な問題を観念的な仕方に関連づけることへの著者の関心にとっては、常に副次的である。一方では説教において、貧困についての気質に関わる思考や、世俗的な事物を正しく使用し、享受すること (*uti/frui*) を彼が強調しているような、財産に対する態度を再編成する必要への強調を認めることができるだろう。私たちは、アウグスティヌスが施しに対する修辭的なアプローチを検討することが可能である¹⁰の下位的な区分を指摘した。貧者について散発的に行ってきた言及を、私たち自身が組織的にまとめる必要からはさらに、この区分のグループについて、彼が組織的に考え抜いた、あるいは関心を抱いていたわけではないということが明らかになっている。私たちがこの¹⁰の下位的な区分を示すことによって、これが、ヒッポの通りを見

通す姿見を用意するものだったというよりもむしろ、人間論的なメタファーという目的のために彼が使ったものだという結論が引き出された。アウグスティヌスは、物質的なものの正しい利用として施しを呈示し、物質的な施しと霊的な施しの適切な統合を提唱している。貧困という問題についてのこの修辞上の再編成が強制的なものである一方で、私たちは、彼の貧困への関心が、彼の思想のうちにあまねく行き渡っているというよりも、むしろより広汎な一連の神学的、また社会的な関心事のもとにあることを指摘している。それ故に、彼に対して、ブラウンのきわめて実際的な表現「貧者を愛する者」、あるいは「貧者のための代表」、これは、ヒッポの司教の著作からは証拠立てることができない経済的に恵まれな者たちとの実地の、あるいは密接でさえある関わり合いを前提とするものなのだが、そうした表現を彼に帰することは焦点を外しているのである。

例外的な一節があるだけで²⁹⁷、アウグスティヌスは、富者とであれ、貧者とであれ、個人的なつながりを示してはいない。むしろ彼の提唱は、一般的に考察された人間の条件に対する提唱であって、貧困と富に関する彼の枠組み全体は、すべて物質的なものは永遠的なものに対して二次的であるという人間論によって支えられている。それはまさしく社会革命などではなくて、おそらく施しと教会への関わりとのあいだの結合に対する過度に狭い焦点による影響を受けていたのである²⁹⁸。だが、アウグスティヌスの貧困についての論述は、社会的な、また共同体的な自己認識を修辞的に再分節化することに支えられた心理学的な再設定に集中している。

²⁹⁷ 『説教』 356.13; NBA 34,270-272.

²⁹⁸ そうした指摘は、Kessler, 'Eleemosyna', 766頁を参照。このように認められる不足を矯正するために、したがって、人間の本来的な特質をはっきりと表現する神学が必要になるだろう。

参考文献

一次文献と翻訳

アウグスティヌスの著作は、NBA に所収のテキストにしたがって引用している。
また翻訳は、指示がないかぎり WSA から引用している。

- Augustine. Teaching Christianity*, trans. E. Hill (New York 1996).
- Commodian, *Instructiones. Carmen de quo populis; Alethia*, ed. J. Martin and P. F. Hovingh, CCL 128 (Turnhout 1960).
- Lambot, C., 'Nouveaux sermons de s. Augustin. I-III "De lectione evangelii"', *Revue Bénédictine* 49 (1937) 233-278.
- 'Sermon sur l'aurône à restituer saint Augustin. "De generalitate elemosinarum"', *Revue Bénédictine* 66 (1966) 156-158.
- Paulinus of Nola, *Sancti Pontii Meropii Paulini Nolani opera* 1. *Epistolae*, ed. W. von Hartel, CSEL 29, 2nd edn supp. M. Kamptner (Vienna 1999).
- Possidius, *The Life of Saint Augustine by Possidius Bishop of Calama*, trans. J. Rotelle, introduction and notes by Cardinal M. Pellegrino, The Augustinian Series, vol. 1 (Villanova, PA 1988).
- *Vita Augustini*, in *Vita di Cipriano. Vita di Ambrogio. Vita di Agostino*, introduzione di C. Mohrmann; testo critico e commento a cura di A. A. R. Bastiaensen; traduzioni di L. Canali e C. Carena, *Vite dei Santi dal secolo III al secolo IV*, vol. 3, 4th edn (Milan 1997).
- Rule of Augustine*, ed. L. Verheijen, *La Règle de Saint Augustin*, 2 vols, *Études Augustiniennes* (Paris 1967).
- *The Rule of Saint Augustine. Masculine and Feminine Versions*, introduction and commentary T. van Bavel, trans. R. Canning (London 1984).

二次文献

〔本論文所収の *Preaching on Poverty* 巻頭にリストが挙げられている文献を一部追加している。〕

Allen, P., 'The horizons of a bishop's world: the letters of Augustine of Hippo', in W. Mayer, P. Allen, and L. Cross (eds), *Prayer and Spirituality in the Early Church* 4. The Spiritual Life (Strathfield 2006) 327–337.

— 'Challenges in approaching Patristic texts from the perspective of contemporary Catholic social teaching', in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Reading Patristic Social Ethics. Issues and Challenges for Contemporary Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, forthcoming). ['Challenges in approaching Patristic texts from the perspective of contemporary Catholic social teaching', in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Reading Patristic Texts on Social Ethics. Issues and Challenges for Twenty-First-Century Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, 2011) として刊行]。

Allen, P., and Mayer, W., 'Through a bishop's eyes: towards a definition of pastoral care in late antiquity', *Augustinianum* 40 (2000) 245–297.

Allen, P., and Neil, B., 'Discourses on the poor in Psalms: Augustine's *Enarrationes in Psalmos*', in *Meditations of the Heart. The Psalms in Christian Thought and Practice: Essays in Honour of Andrew Louth*, forthcoming. ['Discourses on the poor in Psalms: Augustine's Discourse on Poverty in *Enarrationes in Psalmos*', in *Meditations of the Heart: The Psalms in Christian Thought and Practice. Essays in Honour of Andrew Louth*, C. Harrison, A. Casiday, and A. Andreopoulos (eds), *Studia Traditionis Theologiae* 8 (Turnhout 2011) として刊行]。

Atkins, M. and Osborne, R. (eds), *Poverty in the Roman World* (Cambridge 2006).

Berrouard, M.-F., *Introduction aux homélies de saint Augustin sur l'Évangile de saint Jean*, ÉAA 170 (Paris 2004).

Bonner, G., *St Augustine. Life and Controversies*, rev. edn (Norwich 1986).

— 'Augustine and Pelagianism', *AugStud* 24 (1993) 27–47.

— 'Anti-Pelagian works', in Fitzgerald (ed.), *Augustine Through the Ages*,

- 41–47.
- Brown, P. R. L., *Augustine of Hippo. A Biography*, new edn (London 2000).
- *Poverty and Leadership in the Later Roman Empire*, The Menahem Stern Jerusalem Lectures (Hanover and London 2002).
- ‘Augustine and a crisis of wealth in late antiquity’, The Saint Augustine Lecture 2004, *AugStud* 36 (2005) 5–30.
- Bruck, E. F., *Die Kirchenväter und soziales Erbrecht. Wanderungen religiöser Ideen durch die Rechte der östlichen und westlichen Welt* (Berlin, Göttingen, and Heidelberg 1956).
- Burnaby, J., *Amor Dei. A Study of the Religion of St. Augustine*, The Hulsean Lectures for 1938 (London 1960).
- Canning, R., *The Unity of Love for God and Neighbour in St Augustine* (Heverlee-Leuven 1993).
- Carrié, J.-M. ‘Nil habens praeter quod ipso die vestiebatur. Comment définir le seuil de pauvreté à Rome?’, in F. Chausson and É. Wolff (eds), *Consuetudinis amor: fragments d’histoire romaine (IIe-VIe siècle) offerts à Jean-Pierre Callu* (Rome 2003) 71–102.
- Carriker, A.P., ‘Antony of Egypt’, in Fitzgerald (ed.), *Augustine Through the Ages*, 48–49.
- Codex Theodosianus*, in P. Krueger, Th. Mommsen, and P. M. Meyer (eds), 3 vols (Hildesheim 1990).
- Colish, M. L., *Ambrose’s Patriarchs. Ethics for the Common Man* (Notre Dame, IN 2005).
- Corcoran, G., *St. Augustine on Slavery*, *Studia Ephemeridis Augustinianum* 22 (Rome 1985).
- Corpus ius civilis volumen secundum. Codex Justinianus*, in P. Krueger (ed.), (Hildesheim 1989).
- Countryman, L. W., *The Rich Christian in the Church of the Early Empire. Contradictions and Accommodations*, Texts and Studies in Religion (New York and Toronto 1980).
- Coyle, J. K., *Augustine’s ‘De Moribus Ecclesiae Catholicae’. A Study of the Work, its Composition and its Sources*, *Paradosis* 25 (Fribourg, Switzerland 1978).

- Davidson, I. J. (ed. and trans.), *De officiis, Ambrose*, 2 vols, Oxford Early Christian Studies (Oxford 2001).
- Delehaye, H., *Les Passions des martyrs et les genres littéraires*, Subsidia Hagiographica 13B (Brussels 1966).
- DeVinne, M. J., 'The Advocacy of Empty Bellies. Episcopal Representation of the Poor in the Late Roman Empire', unpub. PhD Diss. (Stanford, CA 1995).
- Di Berardino, A., 'La défense du pauvre: saint Augustin et l'usure', in *Saint Augustin: africanité et universalité*. Actes du colloque international Alger-Annaba, 1–7 avril 2001, *Augustinus Afer*, Textes réunis par P.-Y. Fux, J.-M. Roessli, O. Wermelinger (Fribourg, Switzerland 2003) 257–263.
- Divjak, J., 'Epistulae', in C. Mayer et al. (eds), *AL*, 2 vols (Basel 1996–2002) vol. 2, 893–1057.
- Dodaro, R. and Lawless, G. (eds), *Augustine and His Critics. Essays in Honour of Gerald Bonner* (London and New York 2000).
- *Christ and the Just Society in the Thought of Augustine* (Cambridge 2004).
- Dolbeau, F., *Augustine et la prédication en Afrique. Recherches sur divers sermons authentiques, apocryphes ou anonymes*, ÉAA 179 (Paris 2005).
- Drobner, H. R., *Augustinus von Hippo: Sermones ad populum. Überlieferung und Bestand, Bibliographie, Indices*, Supplements to Vigiliae Christianae 49 (Leiden 2000)
- 'The chronology of St. Augustine's *Sermones ad populum*', *AugStud* 31 (2000) 211–218.
- Dulaey, M., *La rêve dans la vie et la pensée de saint Augustin* (Paris 1973).
- Dunn, G. D., 'Cyprian's care for the poor: the evidence of *De opere et eleemosynis*', in F. Young, M. Edwards, and P. Parvis (eds), *Studia Patristica* 42 (Leuven 2006) 363–368.
- 'The elements of ascetical widowhood: Augustine's *De bono viduitatis* and *Epistula* 130', in W. Mayer, P. Allen, and L. Cross (eds), *Prayer and Spirituality in the Early Church*, 4. *The Spiritual Life* (Strathfield 2006) 247–256.
- Elm, E., *Die Macht der Weisheit: Das Bild des Bischofs in der Vita Augustini*

- des Possidius und anderen spätantiken und frühmittelalterlichen Bischofsviten*, Studies in the History of Christian Thought 109 (Leiden and Boston 2003).
- Eno, R. B., 'Epistulae', in A. D. Fitzgerald (ed.), *Augustine through the Ages*, 298–310.
- Fiedrowicz, M., *Psalmus vox totius Christi: Studien zu Augustinus 'Enarrationes in Psalmos'* (Freiburg i.B. 1997).
- Finn, R. D., *Almsgiving in the Later Roman Empire. Christian Promotion and Practice (313–450)* (Oxford 2006).
- 'Portraying the poor: descriptions of poverty in Christian texts from the late Roman empire', in Atkins and Osborne, *Poverty in the Roman World*, 130–161.
- Fitzgerald, A. D., 'Almsgiving in the works of St. Augustine', in A. Zumkeller (ed.), *Signum Pietatis: Festgabe für Cornelius Petrus Mayer OSA zum 60. Geburtstag*, Cassiciacum 40 (Würzburg 1989) 445–459.
- 'Mercy, works of mercy', in Fitzgerald (ed.), *Augustine through the Ages*, 557–561.
- Fitzgerald, A. D. (ed.), *Augustine through the Ages. An Encyclopedia* (Grand Rapids, MI 1999).
- Frahier, L.-J., 'L'interprétation du récit du jugement dernier (Mt 25, 31–46 dans l'œuvre d'Augustin', *REAug* 33 (1987) 70–84.
- Garnsey, P., 'The originality and origins of Anonymus, *De Divitiis*', in H. Amirav and B. ter Haar Romeny (eds), *From Rome to Constantinople. Studies in Honour of Averil Cameron*, Late Antique History and Religion 1 (Leuven, Paris, and Dudley, MA 2007) 29–45.
- Garnsey, P. and Woolf, G., 'Patronage of the rural poor in the Roman world', in A. Wallace-Hadrill (ed.), *Patronage in Ancient Society*, Leicester-Nottingham Studies in Ancient Society 1 (London and New York 1989) 153–170.
- Garrison, R., *Redemptive Almsgiving in Early Christianity*, Journal for the Study of the New Testament Supplement Series 77 (Sheffield 1993).
- Giardina, A., 'The transition to late antiquity', in W. Scheidel, I. Morris, and R. Saller (eds), *The Cambridge Economic History of the Greco-Roman World*

- (Cambridge 2007) 743–768.
- Giet, S., 'La Doctrine de l'appropriation des biens chez quelques-uns des pères', *Recherches de science religieuse* 35 (1948) 55–91.
- Grant, R. M., *Early Christianity and Society: Seven Studies* (London 1978) ch. 5, 96–123.
- Grodzynski, D., 'Pauvres et indigents, vils et plebeians (Une étude terminologique sur le vocabulaire des petites gens dans le Code Théodosien)', *Studia et documenta historiae et iuris* (Rome 1987) 140–218.
- Hanson, C. L., 'Usury and the world of St. Augustine of Hippo', *AugStud* 19 (1988) 141–164.
- Harmless, W., *Augustine and the Catechumenate* (Collegeville, MN 1995).
- Hermanowicz, E. T., *Possidius of Calama. A Study of the North African Episcopate at the Time of Augustine* (Oxford 2008).
- Holman, S. R., 'The entitled poor: human rights language in the Cappadocians', *Doctores Ecclesiae*, in *Pro Ecclesia* 9/4 (2000) 476–488.
- *The Hungry Are Dying. Beggars and Bishops in Roman Cappadocia* (Oxford 2001).
- Hombert, P.-M., *Nouvelles recherches de chronologie augustiniennne*, ÉAA 163 (Paris 2000).
- Ihssen, B., 'That which has been wrung from tears: Usury, the Greek Patristics and Catholic social teaching', in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Patristic Social Ethics: Issues and Challenges for Contemporary Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, forthcoming). [‘That which has been wrung from tears: Usury, the Greek Patristics and Catholic social teaching’, in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Reading Patristic Texts on Social Ethics. Issues and Challenges for Twenty-First-Century Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, 2011) として刊行]。
- Jones, A. H. M., 'Church finance in the fifth and sixth centuries', *Journal of Theological Studies* NS 11 (1960) 84–94.
- *The Later Roman Empire, 284–602. A Social, Economic, and Administrative Survey* (Oxford 1964; repr. 1986).
- Kamimura, N., 'The emergence of poverty and the poor in Augustine's

- early works', in *Prayer and Spirituality in the Early Church* 5, 283–298.
- Kessler, A., and Krause, J. -U., 'Eleemosyna', in C. Mayer et al. (eds), *AL* (Basel 1996–2002) vol. 2, 752–767.
- Klein, R., 'Arm und Reich. Auskünfte und Stellungnahmen Augustins zu Sozial-Struktur der Gemeinden in den neuen Predigten', in G. Madec (ed.), *Augustin prédicateur (395–411). Actes du colloque international de Chantilly (5–7 septembre 1996)*, ÉAA 159 (Paris 1998) 481–491.
- Klingshirn, W., 'Charity and power: Caesarius of Arles and the ransoming of captives in sub-Roman Gaul', *Journal of Roman Studies* 75 (1985) 183–203.
- Kruger, S. F., *Dreaming in the Middle Ages* (Cambridge 1992).
- La Bonnardière, A.-M., 'Les *Enarrationes in psalmos* prêchées par saint Augustin à Carthage en décembre 409', *RAug* 11 (1976) 52–90.
- Lancel, S., *St. Augustine*, trans. A. Nevill (London 2002).
- Lawless, G., *Augustine of Hippo and His Monastic Rule* (Oxford 1987).
- 'Augustine's decentering of asceticism', in Dodaro and Lawless (eds), *Augustine and His Critics*, 142–163.
- Leone, A., 'Clero, proprietà, cristianizzazione delle campagne nel Nord Africa tardoantico. *Status quaestionis*', *Antiquité Tardive: revue internationale d'histoire et d'archéologie (IVe–VIIIe s.)* 14 (2006) 95–104.
- Lepelly, C., *Les Cités de l'Afrique romaine au bas-empire*, 1. *La Permanence d'une civilisation municipale* (Paris 1979).
- *Les Cités de l'Afrique romaine au bas-empire*, 2. *Notices d'histoire municipale* (Paris 1981).
- 'Le patronat épiscopal aux IVe et Ve siècles', in Rebillard and Sotinel (eds), *L'évêque et la cité*, 17–33.
- 'Saint Augustin et la voix des pauvres. Observations sur son action sociale en faveur des déshérités dans la région d'Hippone', in P.-G. Delage (ed.), *Les Pères de l'Église et la voix des pauvres. Actes du IIe colloque de La Rochelle 2, 3 et 4 septembre 2005* (La Rochelle 2006) 203–216.
- 'Facing wealth and poverty: defining Augustine's social doctrine', *Saint Augustine Lecture 2006, AugStud* 38 (2007) 1–17.
- Les Lettres de saint Augustin découvertes par Johannes Divjak*, *Communications*

- présentées au Colloque des 20 et 21 septembre 1982, *Études Augustiniennes* (Paris 1983).
- Lienhard, J. T., *Paulinus of Nola and Early Western Monasticism: With a Study of the Chronology of His Works and an Annotated Bibliography*, Theophaneia. Beiträge zur Religion- und Kirchengeschichte des Altertums 28 (Cologne and Bonn 1977).
- McCormick, M., *Origins of the European Economy. Communications and Commerce, A.D. 300–900* (Cambridge 2001).
- McLynn, N. B., *Ambrose of Milan. Church and Court in a Christian Capital, Transformation of the Classical Heritage* 22 (Berkeley, Los Angeles and London 1994).
- ‘Ambrose of Milan’, in Fitzgerald (ed.), *Augustine Through the Ages*, 17–19.
- MacQueen, D. J., ‘St Augustine’s concept of property ownership’, *RAug* 8 (1972) 187–229.
- Maloney, R. P., ‘The teaching of the Fathers on usury: an historical study on the development of Christian thinking’, *Vigiliae Christianae* 27 (1973) 241–265.
- Mandouze, A., *Prosopographie chrétienne du Bas-Empire* 1. *Prosopographie de l’Afrique chrétienne (303–533)* (Paris 1982).
- Marino, M., ‘La pobreza de Cristo en los sermones de san Agustín’, Congreso Internazionale su S. Agostino nel XVI centario della conversione, Roma 15–20 settembre 1986, Atti II: Sezione di studio II–IV = *Studia Ephemeridis Augustinianum* 25 (1987) 295–311.
- Markus, ‘The eclipse of a neo-Platonic theme: Augustine and Gregory the Great on visions and prophecies’, in H. J. Blumenthal and R. A. Markus (eds), *Neoplatonism and Early Christian Thought. Essays in Honour of A. H. Armstrong* (London 1981) 204–211, esp. 204–206; reprinted in Markus, *Sacred and Secular. Studies on Augustine and Latin Christianity* (London 1994).
- Mayer, C. et al. (eds), *AL*, 2 vols. (Basel 1986–2002).
- Meer, F. van der, *Augustine the Bishop: The Life and Work of a Father of the Church*, trans. B. Battershaw and G. R. Lamb (London 1961).

- Morgenstern, F., *Die Briefpartner des Augustinus von Hippo. Prosopographische, sozial- und ideologiegeschichtliche Untersuchungen* (Bochum 1993).
- Morgan, E., *The Incarnation of the Word: The Theology of Language of Augustine of Hippo* (London, forthcoming). [The Incarnation of the Word: The Theology of Language of Augustine of Hippo (London 2010) として刊行]。
- Mratschek, S., *Der Briefwechsel des Paulinus von Nola. Kommunikation und soziale Kontakte zwischen christlichen Intellektuellen*, Hypomnemata 134 (Göttingen 2002).
- Neri, V., *I marginali nell'occidente tardoantico. Poveri, 'infames' e criminali nella nascente società cristiana*, MUNERA. Studi storici sulla Tarda Antichità 12 (Bari 1998).
- Nuffelen, P. Van, 'Caring for the community. Imperial munificence and care for the poor in late antique panegyric', in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Patristic Social Ethics: Issues and Challenges for Contemporary Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, forthcoming). ['Caring for the community. Imperial munificence and care for the poor in late antique panegyric', in J. Leemans, B. Matz and J. Verstraeten (eds), *Reading Patristic Texts on Social Ethics. Issues and Challenges for Twenty-First-Century Christian Social Thought*, CUA Studies in Early Christianity (Washington, DC, 2011) として刊行]。
- O'Donnell, J. J., *Augustine. Confessions*, 3 vols (Oxford 1992).
- O'Donovan, O., 'Usus and fruitio in Augustine's *De Doctrina Christiana I*', *Journal of Theological Studies* NS 33 (1982) 361–397.
- Parkin, A. R., 'Poverty in the early Roman empire: ancient and modern conceptions and constructs', PhD Diss. (Cambridge 2001).
- Patlagean, E., *Pauvreté économique et pauvreté sociale à Byzance, 4e–7e siècle* (Paris 1977).
- Pétre, H., *CARITAS. Étude sur le vocabulaire latin de la charité chrétienne*, Spicilegium Sacrum Lovaniense, Études et Documents 22 (Louvain 1948).
- Prayer and Spirituality in the Early Church* 5. *Poverty and Riches*, Dunn, G. D., Luckensmeyer, D., and Cross, L. (eds) (Strathfield 2009).
- Ramsey, OP, B., 'Almsgiving in the Latin church: the late fourth and early fifth centuries', *Theological Studies* 43 (1982) 226–259.

- Rebillard, É., and Sotinel, C. (eds), *L'évêque dans la cité du IVe au Ve siècle. Image et autorité*. Actes de la table ronde organisée par l'Istituto patristico Augustinianum et l'École française de Rome, Rome, 1 et 2 décembre 1995 (Rome 1998).
- Rebillard, É., 'Augustin et le rituel épistolaire de l'élite sociale et culturelle de son temps. Éléments pour une analyse processuelle des relations de l'évêque et de la cité dans l'antiquité tardive', in Rebillard and Sotinel, *L'évêque dans la cité*, 127–152.
- Rondet, H., 'Richesse et pauvreté dans la prédication de saint Augustin', *Revue d'ascétique et de mystique* 30 (1954) 193–231.
- Rouche, M., 'La Matricule des pauvres. Évolution d'une institution de charité du Bas Empire jusqu'à la fin du Haut Moyen Âge', in M. Mollat (ed.), *Études sur l'histoire de la pauvreté (Moyen Âge–XVIe siècle)*, vol. 1, Publications de la Sorbonne, Série 'Études' 8, 1, 11 (Paris 1974) 83–110.
- Salamito, J.-M., *Les virtuoses et la multitude. Aspects sociaux de la controverse entre Augustin et les pélagiens* (Grenoble 2005).
- Salvo, L. de, 'Nolo munera ista (Aug. *Serm.* 355, 3): eredità e donazioni in Agostino', in G. Crifo and S. Giglio (eds), *Atti dell'Accademia Romanistica Costantiniana. IX Convengo Internazionale Napoli 1989* (Spello, Perugia, and Città di Castello 1993) 299–323.
- Swift, L., 'Giving and forgiving: Augustine on *eleemosyna* and *miser cordia*', *AugStud* 32 (2001) 25–48.
- Taylor, J. H., 'The meaning of *spiritus* in St. Augustine's *De Gen. ad Litt.* XII', *The Modern Schoolman* 26 (1948–1949) 211–218.
- Trout, D. E., 'Augustine at Cassiciacum: *otium honestum* and the social dimensions of conversion', *Vigiliae Christianae* 42 (1988) 132–146.
- Uhalder, K., *Expectations of Justice in the Age of Justinian* (Philadelphia 2007).
- Verheijen, L., 'Spiritualité et vie monastique chez saint Augustin. L'utilisation monastique des Actes des Apôtres 4:31, 32–35 dans son œuvre', in C. Kannengiesser (ed.), *Jean Chrysostome et Augustin, Actes du colloque de Chantilly, 22–24 septembre 1974*, Théologie historique 35 (Paris 1975) 93–123.
- *Saint Augustine's Monasticism in the Light of Acts 4:32–35*, The Saint Au-

- gustine Lecture 1975 (Villanova, PA 1979).
- Vismara Ciappa, P., *Il tema della povertà nella predicazione di Sant'Agostino*, Università di Trieste Facoltà di Scienze Politiche 5 (Milan 1975).
- Wankenne, L.-J., 'La langue de la correspondance de Saint Augustin', *Revue Bénédictine* 94 (1984) 102–153.
- Wetzel, J., 'Snares of truth. Augustine on free will and predestination', in Dodaro and Lawless, *Augustine and His Critics*, 124–141.
- Wickham, C., *Framing the Early Middle Ages. Europe and the Mediterranean 400–800* (Oxford 2005).
- Ziche, H. G., 'Administrer la propriété de l'église: l'évêque comme clerc et comme entrepreneur', *Antiquité Tardive: revue internationale d'histoire et d'archéologie (IVe–VIIIe s.)* 14 (2006) 69–78.

訳者後記

本報告書別冊は、Pauline Allen, Bronwen Neil, and Wendy Mayer (eds), *Preaching Poverty in Late Antiquity: Perceptions and Realities*, *Arbeiten zur Kirchen- und Theologiegeschichte* 28 (Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2009) の119-170頁におさめられているポーリーン・アレン教授とエドワード・モーガン博士が分担執筆した第4章 *Augustine on Poverty* の翻訳である。翻訳に際しては、第4章末に所収の文献表を載せるとともに、本章がアウグスティヌスの貧困についての論述を主題とすることから、聖書章句とアウグスティヌスの著作についての「原典索引」をあらためて作成している。

本報告書の「はじめに」のなかで出村和彦氏が記している通り、この研究書は、4世紀から6世紀にいたるキリスト教共同体の代表的な司教の社会に対する寄与が顕著であり、彼らを、古代世界にひろがっていた貧困の問題への対処に積極的に取り組んだ「貧者を愛する者」「貧者を治める者」と規定することによって、キリスト教の司教の役割に転回をもたらした者たちであると評価するピーター・ブラウン教授の先行研究のテーゼに異議を提出している¹。

すでに1967年に著したアウグスティヌスについての革新的な伝記によって²、古代世界に生きた教父の姿を鮮明に浮かび上がらせ、アウグスティヌス研究に衝撃をもたらしただけでなく、その後の研究を通して、「古代末期」(Late Antiquity)の世界を独自の活力を有した時代と捉える枠組みの基本を形成したブラウンのテーゼは、司教の社会的な活動への貢献がどのように実現されていたかという問題に対する具体的な解答を提出しているという観点からも魅力的である。しかし

¹ Peter Brown, *Poverty and Leadership in the Later Roman Empire* (Hanover and London 2002). ブラウンの研究を紹介する日本語文献として、宮島直機訳『古代末期の世界：ローマ帝国は何故キリスト教化したのか?』刀水歴史全書 58、改訂新版(刀水書房、2002年); 後藤篤子編『古代から中世へ』山川レクチャーズ 2 (山川出版社、2006年); 足立広明訳『古代末期の形成』(慶應義塾大学出版会、2006年)を参照。

² *Augustine of Hippo. A Biography*, new edn (London 2000). この増補版の日本語訳は、『アウグスティヌス伝』上・下、出村和彦訳(教文館、2004年)。

ながら、ブラウンが主張するように、後期ローマ社会におけるキリスト教司教の傑出した地位を、古典古代の「市民」社会のモデルから中世的、ビザンツ的なキリスト教的社会のモデルへの移行のなかに位置づけ、司教のリーダーシップを貧者への配慮のうちに卓越していたと簡単に首肯することができるだろうか。

こうした疑問に対して、オーストラリアカトリック大学・初期キリスト教研究センターにおいて2006年から3年計画で実施された研究プロジェクトでは、アレン教授を中心とするグループが、ヨハネス・クリュソストモス、アウグスティヌス、レオ1世のテキストを分析し、彼らの貧困に関わる言説と実践を、ブラウンのテーゼにしたがって捉えるのは困難であることを明確に実証した。その詳細についてはここに訳出した論考からも明らかであり、アウグスティヌスの『説教』『詩篇講解』『書簡』を中心とする検証は徹底している。私たちが、オーストラリア側と協力しつつ遂行した科研プロジェクトの成果である本報告書とあわせることで、とりわけアウグスティヌスの「貧困」に関わる実態を解明することが可能になっていると考える。また、日本におけるアウグスティヌス研究が、『告白』や初期の哲学的な著作を中心にしてアウグスティヌスの神学的、哲学的な思想を解明しようと試みる精緻な研究を生み出してきたのに対して、古代末期の変容に関わる問題提起に答えるべく、さまざまな説教や書簡にも焦点を当てる研究は、アウグスティヌス研究へ異なる観点からの刺激を与えることになるように思われる。

今後も、オーストラリアの研究チームとの研究交流は継続する予定である。すでに、2011年4月から今回の科研プロジェクトにつづいてあらたに、アウグスティヌスの『告白』に先行する時期の聖書註解の分析、検討を目的とする研究プロジェクト「アウグスティヌスにおける聖書解釈の理論と実践」が始まっており、アレン教授を中心とする研究グループとの共同研究が進められている。そして、2012年7月には韓国のソウルにおいて、第7回「アジア環太平洋初期キリスト教学会」が、また2013年10月にはオーストラリアのメルボルンにおいて、「初期キリスト教学会」が開催され、アジア太平洋地域の教父学研究者の交流を通して、さらなる研究の進展が期待されている。今日人文学の分野全般において求められている国際共同研究という仕組みは、古代末期の教父学という膨大なテキストとの格闘を逗られる研究領域においてとりわけ必要であるが、その一端を本研究報告書と別冊において実現できたのではないかと考える。

最後に、翻訳された論考を執筆した著者について、この研究書の末尾に載せられている紹介に一部を補って紹介したい。本報告書においても記されている通り、ポーリーン・アレン教授は現在、オーストラリアカトリック大学・初期キ

リスト教研究センターの所長として活躍しており、古代末期の説教テキストの分析、また、6世紀シリア・アンティオキアの総大司教であったセウエロスや、7世紀のギリシア教父である証聖者マクシモスの研究によって国際的に著名な研究者である³。現在は、アウグスティヌスのマリオロジー研究を端緒とした書簡研究、またこの古代末期の「貧困」研究に引き続いて、研究所のブロンウェン・ニール博士と共同で、オーストラリアリサーチカウンシル (ARC) 創発研究プロジェクト「古代末期における危機管理——キリスト教司教書簡に見るその証言」に従事している最中である。共著者であるエドワード・モーガン博士は、2006年から2009年まで研究センターのリサーチ・アソシエイトとして共同研究に従事した気鋭の研究者である。この翻訳のなかでも紹介されている通り、博士がケンブリッジ大学に2006年に提出した博士論文を公刊している⁴。共同研究を終了後は、博士の母校の一つであるメルボルン大学のオルモンド・カレッジにおいてアソシエイト・ディーンをつとめたのち、オーストラリア海軍に入隊、研鑽を積まれて戦略研究に従事している。とはいえ、アレン教授から最近届いた知らせによれば、博士が海軍を除隊し、ふたたび研究活動を再開されたということであり、今後の活躍に期待しているところである。

この翻訳を進めるにあたっては、逐次これまでに刊行された日本語の研究文献、特に、教文館から刊行中の『アウグスティヌス著作集』に所収の『詩篇講解』と『説教』の翻訳から学んでいる。なお、翻訳刊行に際して、科学研究費助成金(基盤研究(c)「転換期における「貧困」に関するアウグスティヌスの洞察と実践の研究」課題番号: 21520084)による助成を受けている。

2012年1月20日

上村直樹

<kmmrnk@gmail.com>

³ セウエロス研究については、P. Allen and C. T. R. Hayward, *Severus of Antioch, The Early Church Fathers* (London and New York 2004)、マクシモス研究については、*The Life of Maximus the Confessor. Recension 3*, ed. and trans. B. Neil and P. Allen, *Early Christian Studies* 6 (Strathfield 2003); *Maximus the Confessor and His Companions: Documents from Exile*, ed. and trans. P. Allen and B. Neil, *Oxford Early Christian Texts* (Oxford 2002) を参照。

⁴ *The Incarnation of the Word: The Theology of Language of Augustine of Hippo* (London 2010).

原典索引

聖書

- トビト記
4:8-9 39
マタイ福音書 50
25:31-46 14
ルカ福音書
6:30 49
16:19-31 26, 38
使徒行伝
4:32 15, 30, 40
4:32-35 15
コリント前書
9:7 30
コリント後書
8:13 22
エペソ書
6:5 41
ピリピ書
4:11-14 30
テモテ前書 36
6:1-2 41
6:18-19 22

アウグスティヌス

- 『アカデメイア派論駁』
1.1.1 10
3.11.24-25 57
『神の国』 10
1.10.2 13
5.18.1-2 40
21.27.3 20
『告白』 10, 61
3.4.7 14
6.2.2 10
6.6.9-10 62
7.12.18 14, 38, 54
7.12.28 14
8.6.14-15 16
9.4.12-9.6.14 62
10.30.41 57
『譴責と恩恵について』
14.43 25
『キリスト教の教えについて』 35-
36, 53, 60, 63

- praef. 4 16
 praef. 6 19
 1.28.29 31, 35
 『堅忍の賜物について』
 16.40 25
 22.57-61 25
 『詩篇講解』 60
 36, s. 2.13 26, 32
 36, s. 3.6 24
 36, s. 3.7 23
 36, s. 3.26 19
 38.19 43, 55
 39.27 21, 23
 40.2 23
 42.8 19
 46.5 30
 48, s. 1.3 21, 38
 54.14 24
 68, s. 2.14 22
 71.3 39
 72.26 22, 56
 73.13 52
 75.9 26, 56
 76.2 55
 83.7 32
 101, s.1.1 55
 102.12 26
 102.13 30
 103, s. 3.10 29, 33
 103, s. 3.11 25
 103, s. 3.12 29
 118, s. 12.2 33
 124.2 43
 124.7 42
 125.5 22
 125.12 32
 130.6 51
 146.17 26, 51
 147.13 23
 『書簡』 60
 9* 9
 10* 5, 9
 10*.7 32
 11* 9
 20* 9
 20*.6 44
 20*.6-7 9
 22* 7, 9
 22.1.6 10
 24* 5
 24*.1 9
 31.5 13
 91.9 14
 104.16 14
 104.16-17 14
 126 59
 147.23.52 11
 153.24 24
 157.4.23 38
 157.4.34 36
 211.9 42
 243.12 35
 247 6, 9
 262.9 35
 『ヨハネ書簡講解』
 8.5 47

- 『カトリック教会の習俗とマニ教徒
の習俗について』
- 1.31.65-68 12
- 1.31.67 12, 32
- 2.15.36 31
- 2.16.53 31
- 『信仰、希望、愛』
- 19.72 32
- 『修道士の働きについて』
- 25.32 42
- 25.33 42
- 『修道規則』 9, 15
- 1.1.3 15
- 1.6 42
- 『説教』 60
- 9.17 19
- 9.18 20
- 9.19 26, 57, 58
- 9.20 54
- 14.2 21
- 14.5 21
- 14.6 43
- 14.8 44
- 15.9 40
- 15A.5 (= Denis 21) 38, 54
- 16B.3 (= Mai 17) 19
- 18.1 38
- 21.8 58
- 25.8 23
- 25A.4 (= Morin 12) 22, 46
- 32.20 59
- 32.23 26
- 33A.3 (= Denis 23) 52
- 34.7 20
- 36.4 36, 43
- 36.6 50
- 39.6 19, 20, 22, 43
- 42.2 19, 22
- 45.4 50
- 46.5 30
- 50.1.2 17
- 50.2 22
- 50.3 36, 37
- 50.6 37
- 53.5 50
- 53A.2 (= Morin 11) 37
- 53A.4 37, 38
- 53A.5 50
- 53A.6 22, 46, 51
- 56.11 53
- 56.12.16 19
- 56.6.9 26
- 56.9 48
- 58.9.10 19
- 58.10 33, 55
- 60.6 31, 46
- 61.2 37, 54
- 61.3 53
- 61.8 21, 52
- 61.9.10 43
- 61.11 57
- 61.11.12 23
- 61.12 47
- 61.13 26, 47
- 65A.1 (= Etaix 1) 37
- 65A.2 53

- 65A.3-4 37
 66.5 26, 47, 48
 68.10 37
 68.11 37
 70A.1 (= Mai 127) 52
 77A.4 (= Guelf. 33) 24
 85.2.2 21
 85.3 39
 85.4 50
 85.6 52
 85.6.7 22
 86.3.3 19, 24
 86.9.11 27
 86.14.17 20, 22
 88.16.16 39
 91.9 32
 102.4.5 32
 105A.1 (= Lambot 1) 21, 38
 106.3 23
 106.4 20
 107A.2 (= Lambot 5) 18
 107A.4 37
 107A.8 22, 32
 112.8 48
 113.2.2 24
 113A.11 (= Demis 24) 59
 114B.9-13 (= Dolbeau 5) 21
 125A.4 (= Mai 128) 39
 149.18 30
 150.6.7 19
 164.7.10-11 22
 164.7.9 22
 164A (= Lambot 28) 31
 178.4 33
 178.5.5 30
 206.2 32, 54
 208.2 31
 209.2 19
 236.3 51
 239.5 24
 259.5 26, 34
 290.6.6 21
 299E.3 (= Guelf. 30) 38
 301A (= Denis 17) 37, 54
 335C (= Lambot 2) 31
 339.3 11
 346A.4 (= Caillau 2,19) 21, 38
 346A.6 38
 350B.1 (= Haffner 1) 18, 49
 355 8, 9, 27
 355.2 15, 16, 40
 355.3 28
 355.4 28
 355.5 13, 28
 356 8, 9, 27, 41
 356.1 15
 356.2 28
 356.4 28
 356.7 28
 356.10 29
 356.11 28
 356.13 30, 64
 359A.13 (= Lambot 4) 24
 367.3 43
 399.3.3 30
 『キリスト教の教えについての説教』

- | | | | |
|---------|----------------|----------------|----|
| 3.3 | 30 | 13.3.6 | 36 |
| 8.8 | 27 | 13.14.18 | 36 |
| 『三位一体論』 | 10, 36, 60, 63 | 『信ずることの効用について』 | |
| 4.13.17 | 36 | 17.35 | 40 |
| 5.11.12 | 34 | 『断食の効用について』 | |
| 12.7.11 | 36 | 57.5-8 | 20 |

